

す わ たい に い せき
諏 訪 岱 II 遺 跡
なが の たい さん い せき
長 野 岱 III 遺 跡

— 国道105号国道道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I —

2003・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所¹の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、国道105号国道道路改築工事に先立って、平成13年度に実施した諏訪岱Ⅱ遺跡と長野岱Ⅲ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。諏訪岱Ⅱ遺跡を調査した結果、縄文時代の土坑や陥し穴が検出され、縄文中期から晩期の採集場・狩猟場として利用されていたほか、平安時代から中世の竪穴住居跡も検出され、集落が営まれていたことが分かりました。長野岱Ⅲ遺跡では、縄文時代中期から晩期の土器・石器が出土したほか、平安時代の竪穴住居跡や鍛冶炉などが検出され、集落跡であったことが分かりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県北秋田建設事務所、森吉町教育委員会、合川町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

秋田県教育委員会

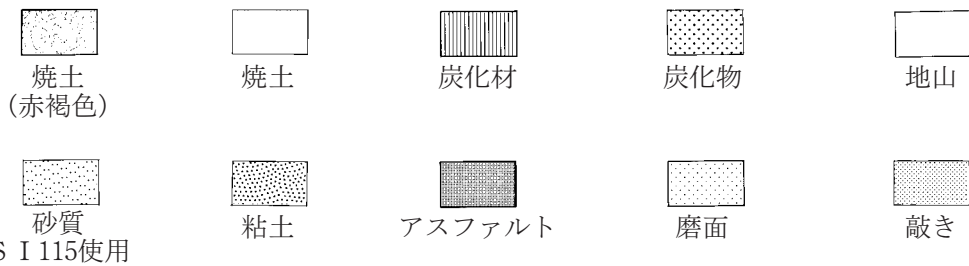
教育長 小野寺 清

例 言

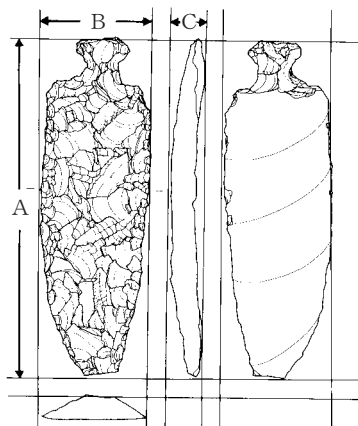
1. 本書は、国道105号国道道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊目である。
2. 本書は、平成13年度（2001年度）に発掘調査した、秋田県北秋田郡森吉町米内沢字諏訪岱および長野岱に所在する諏訪岱Ⅱ遺跡と長野岱Ⅲ遺跡の調査成果を収めたものである。
3. 発掘調査成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報20（平成13年度）』や『平成13年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』および新聞報道などで公表されているが、本報告書を正式なものとする。
4. 本書および発掘調査に関する資料は、すべて秋田県埋蔵文化財センターが保管している。
5. 本書に使用した図は、秋田県北秋田建設事務所提供の1,000分の1工事路線計画図と、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図『米内沢』・『桂瀬』と50,000分の1地形図『米内沢』である。
6. 本書に使用した航空写真は、森吉町教育委員会提供（平成7年撮影、12,500分の1相当）のものである。
7. 遺構の土層や遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2000年版に拠った。
8. 本書の本文中では、調査区内のグリッド（4m×4m方眼）を区と表記した。
9. 両遺跡の第3章自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに分析を委託し、その報告を掲載した。
10. 発掘調査ならびに報告書の刊行にあたって、次の方々より御指導、御協力、資料提供を賜った。記して感謝する〔五十音順、敬称略。所属先は平成13年度のもの〕。
桜庭博志・木村正彦・細田昌史（森吉町教育委員会）、関喜作・杉渕典子・松岡久子（合川町教育委員会）、佐野一絵・榎本剛治（鷹巣町教育委員会）、加賀利男（秋田考古学協会）、穴澤義功（製鉄遺跡研究会）、設楽政健（青森市教育委員会）、児玉徳征・藤嶋和智（秋田県立米内沢高等学校）
11. 本書の執筆と編集は、下記のように分担した。
はじめに・遺跡の立地と環境……………石澤宏基
諏訪岱Ⅱ遺跡（第1・2章、第4章）……………石澤宏基
長野岱Ⅲ遺跡（第1・2章、第4章）……………石澤宏基
各遺構図面の作成……………遠藤 元、田村瑞保、高橋 信

凡 例

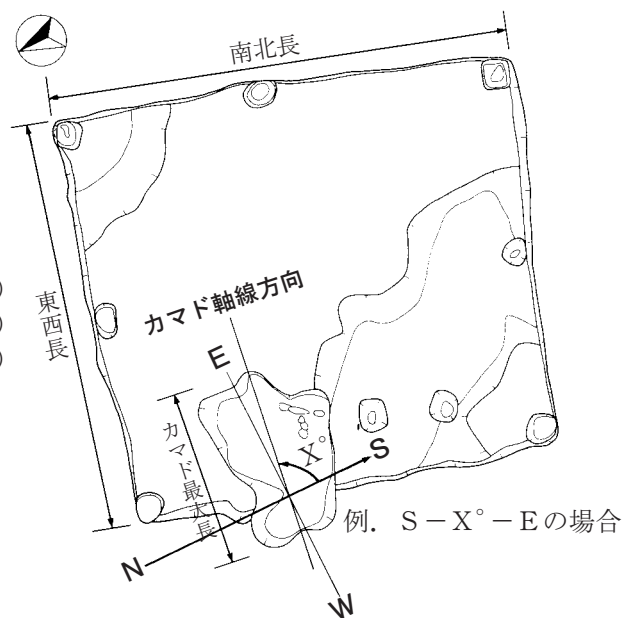
- 遺構番号は検出順に略記号と番号を付した。使用した略記号は下記の通りである。
 S I …… 竪穴住居跡、SK …… 土坑、SK F …… フラスコ状土坑、
 S N …… 焼土遺構、S R …… 土器埋設遺構、S W …… 炭窯、
 S S …… 鍛冶炉、S K T …… 陥し穴、S X …… 性格不明遺構
 なお、遺構図面中に記した「P」は竪穴住居跡に伴う柱穴を、「S」は礫・泥岩を示す。
- 土層注記には、遺跡全体の基本層序にローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…）を、各遺構の堆積土には算用数字（1・2・3…）を用いた。
- 本書の挿図中に示した方位は、国家座標第X系による座標北である。
- 遺構挿図中の「●」は土器類、「▲」は石器類、「■」は鉄製遺物、「○」は炭化物を示す。
- 遺物挿図中の番号は、器種を問わず遺構内・外に分けて通し番号を付した。それらは写真図版中の番号と対応する。
- 挿図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外は個々の挿図中に示した。



- 石器の計測部位は左下図のとおりである。計測値の単位は長さ・幅・厚さがmm、重さがgである。



A 最大長(mm)
 B 最大幅(mm)
 C 最大厚(mm)



住居跡およびカマド軸線方向の計測基準

目 次

序	i
例 言	ii
凡 例	iii
目 次	iv
挿図・表目次	v
図版目次	vi

はじめに

1. 調査に至る経過	1
2. 調査要項	2
遺跡の立地と環境	5
1. 遺跡の立地	5
2. 歴史的環境	6

諏訪岱Ⅱ遺跡

第1章 発掘調査の概要	
第1節 遺跡の概観	13
第2節 調査の方法	13
第3節 調査の経過	13
第4節 整理作業の方法と経過	14
第2章 調査の記録	
第1節 基本層序	17
第2節 検出遺構と遺物	17
1 縄文時代の検出遺構と遺物	
(1) 土 坑	17
(2) 土器埋設遺構	18
(3) 陥 し 穴	18
2 古代～中世の検出遺構と遺物	
(1) 竪穴住居跡	20
(2) 土 坑	38
(3) 焼土遺構	43
(4) 性格不明遺構	47
第3節 遺構外出土遺物	
1 縄文時代の遺構外出土遺物	
(1) 土器	48
(2) 石器	48
2 古代～中世の遺構外出土遺物	
(1) 土器	48
第3章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定	53
第2節 諏訪岱Ⅱ遺跡から出土した炭化種実	55
第3節 諏訪岱Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定	56
第4章 まとめ	58

長野岱Ⅲ遺跡

第1章 発掘調査の概要	
第1節 遺跡の概観	59
第2節 調査の方法	59
第3節 調査の経過	59
第2章 調査の記録	
第1節 基本層序	63
第2節 検出遺構と遺物	63
1 縄文時代の検出遺構と遺物	
(1) フラスコ状土坑	64
2 古代～中世の検出遺構と遺物	
(1) 竪穴住居跡	65
(2) 土 坑	75
(3) 焼土遺構	78
(4) 炭 窯	80
(5) 鍛 冶 炉	80
第3節 遺構外出土遺物	
1 縄文時代の遺構外出土遺物	
(1) 土器	81
(2) 石器	81
2 古代～中世の遺構外出土遺物	
(1) 土器	82
第3章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定	87
第2節 長野岱Ⅲ遺跡の火山灰分析	88
第3節 長野岱Ⅲ遺跡花粉化石群集	92
第4節 長野岱Ⅲ遺跡から出土した炭化種実	93
第5節 長野岱Ⅲ遺跡出土炭化材の樹種同定	93
第4章 まとめ	94

図 版
報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	路線と遺跡（諏訪岱Ⅱ遺跡）	3
第3図	路線と遺跡（長野岱Ⅲ遺跡）	4
第4図	地形区分図	8
第5図	周辺遺跡位置図	10

諏訪岱Ⅱ遺跡

第6図	諏訪岱Ⅱ遺跡とその周辺遺跡	12
第7図	遺構配置図	15
第8図	基本土層図	16
第9図	S K 124土坑	18
第10図	S R 02土器埋設遺構・出土土器 S K T 128陥し穴	19
第11図	S I 01竪穴住居跡	21
第12図	S I 113竪穴住居跡（1）	22
第13図	S I 113竪穴住居跡（2）	23
第14図	S I 113竪穴住居跡出土土器	24
第15図	S I 114竪穴住居跡（1）	25
第16図	S I 114竪穴住居跡（2）	26
第17図	S I 114竪穴住居跡出土土器	27
第18図	S I 115竪穴住居跡（1）	29
第19図	S I 115竪穴住居跡（2）	30
第20図	S I 116竪穴住居跡（1）	32
第21図	S I 116竪穴住居跡（2）	33
第22図	S I 116竪穴住居跡（3）	34
第23図	S I 122竪穴住居跡	35
第24図	S I 125竪穴住居跡（1）	36
第25図	S I 125竪穴住居跡（2）	37
第26図	S K 04・05・102・103・104土坑	39
第27図	S K 105・106・107・108・110・111土坑	40
第28図	S K 07・09土坑	41
第29図	S N 117・118・119・123焼土遺構	45
第30図	S N 126・129・130焼土遺構	46
第31図	S X 101性格不明遺構	47
第32図	遺構外出土土器	49
第33図	遺構外出土石器（1）	50
第34図	遺構外出土石器（2）	51
第35図	遺構外出土土器	52

長野岱Ⅲ遺跡

第36図	遺構配置図	61
第37図	基本土層図	62
第38図	S K F 04フラスコ状土坑	64
第39図	S I 01・02・03竪穴住居跡（1）	66
第40図	S I 01・02・03竪穴住居跡、出土土器（2）	67
第41図	S I 01・02・03竪穴住居跡（3）	68
第42図	S I 16竪穴住居跡（1）	70
第43図	S I 16竪穴住居跡（2）	71
第44図	S I 16竪穴住居跡（3）	72
第45図	S I 44竪穴住居跡	73
第46図	S I 44竪穴住居跡出土遺物	74
第47図	S K 14・53・72土坑	76
第48図	S N 15焼土遺構・出土遺物	77
第49図	S W 07炭窯	78
第50図	S S 43鍛冶炉・出土遺物（1）	79
第51図	S S 43鍛冶炉・出土遺物（2）	80
第52図	遺構外出土土器（1）	82
第53図	遺構外出土土器（2）	83
第54図	遺構外出土土器（3）	84
第55図	遺構外出土石器（1）	85
第56図	遺構外出土遺物	86
第57図	火山ガラスの形態区分	89

表目次

第1表	周辺遺跡一覧	11	第5表	長野岱Ⅲ遺跡堆積物の鉱物分析結果一覧	90
第2表	諏訪岱Ⅱ遺跡放射性炭素年代測定 および歴年代較正の結果	54	第6表	長野岱Ⅲ遺跡火山ガラスの屈折率測定結果	90
第3表	諏訪岱Ⅱ遺跡出土炭化材樹種同定結果	56	第7表	長野岱Ⅲ遺跡における堆積物中の鉱物組成	91
第4表	長野岱Ⅲ遺跡放射性炭素年代測定 および歴年代較正の結果	88	第8表	長野岱Ⅲ遺跡花粉化石一覧表	92

図版目次

- 図版1 空中写真
空から見た諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡（南→）
諏訪岱Ⅱ遺跡
- 図版2 諏訪岱Ⅱ遺跡風景
1. 諏訪岱Ⅱ遺跡遠景（南東→）
2. 諏訪岱Ⅱ遺跡調査区近景（南→）
- 図版3 諏訪岱Ⅱ遺跡検出遺構（1）
1. S K 124土坑完掘（北→）
2. S R 02土器埋設遺構断面（西→）
3. S K T 128陥し穴完掘（南西→）
- 図版4 諏訪岱Ⅱ遺跡検出遺構（2）
1. S I 113竪穴住居跡炭化材出土状況（南西→）
2. S I 113竪穴住居跡完掘（南西→）
3. S I 114竪穴住居跡炭化材出土状況（南東→）
- 図版5 諏訪岱Ⅱ遺跡検出遺構（3）
1. S I 114竪穴住居跡カマド確認状況（南東→）
2. S I 114竪穴住居跡断面（北東→）
3. S I 115竪穴住居跡断面（南東→）
4. S I 115竪穴住居跡完掘（南東→）
- 図版6 諏訪岱Ⅱ遺跡検出遺構（4）
1. S I 116竪穴住居跡断面（南→）
2. S I 116竪穴住居跡完掘（東→）
3. S I 122竪穴住居跡断面（南西→）
- 図版7 諏訪岱Ⅱ遺跡検出遺構（5）
1. S I 122竪穴住居跡完掘（南西→）
2. S I 125竪穴住居跡断面（南→）
3. S I 125竪穴住居跡完掘（西→）
- 図版8 諏訪岱Ⅱ遺跡検出遺構（6）
1. S K 04土坑完掘（北→）
2. S K 05土坑完掘（西→）
3. S K 07土坑完掘（南→）
4. S K 09土坑完掘（北西→）
5. S K 102土坑完掘（西→）
6. S K 103土坑完掘（西→）
7. S K 104土坑完掘（西→）
8. S K 105土坑完掘（西→）
- 図版9 諏訪岱Ⅱ遺跡検出遺構（7）
1. S K 106土坑完掘（北西→）
2. S K 107土坑完掘（西→）
3. S K 108土坑完掘（南西→）
4. S K 110土坑完掘（西→）
5. S K 111土坑完掘（北西→）
6. S N 117焼土遺構断面（北西→）
7. S N 118焼土遺構断面（北西→）
8. S N 119焼土遺構断面（西→）
- 図版10 諏訪岱Ⅱ遺跡検出遺構（8）
1. S N 123焼土遺構断面（西→）
2. S N 126焼土遺構完掘（西→）
3. S N 129焼土遺構断面（南→）
4. S N 130焼土遺構断面（西→）
5. S X 101性格不明遺構確認状況（南西→）
6. S I 113竪穴住居跡土師器坏出土状況（北→）
7. S I 113竪穴住居跡土師器片出土状況（南東→）
8. S I 115竪穴住居跡銭貨出土状況（南西→）
- 長野岱Ⅲ遺跡
- 図版11 長野岱Ⅲ遺跡風景
1. 長野岱Ⅲ遺跡調査区近景（東→）
2. 長野岱Ⅲ遺跡調査区近景（南東→）
- 図版12 長野岱Ⅲ遺跡検出遺構（1）
1. S I 01・02・03竪穴住居跡完掘（南東→）
2. S I 01・02・03竪穴住居跡確認（南東→）
3. S I 01・02・03竪穴住居跡断面（南東→）
4. S I 01・02・03竪穴住居跡断面（南西→）
5. S I 01竪穴住居跡カマド断面（北→）
- 図版13 長野岱Ⅲ遺跡検出遺構（2）
1. S I 16竪穴住居跡完掘（南→）
2. S I 16竪穴住居跡断面（南東→）
3. S I 16竪穴住居跡カマド断面（南西→）
4. S I 16竪穴住居跡金床石出土状況（東→）
5. S I 16竪穴住居跡カマド完掘（南西→）
- 図版14 長野岱Ⅲ遺跡検出遺構（3）
1. S I 44竪穴住居跡完掘（南→）
2. S I 44竪穴住居跡断面東側（北→）
3. S I 44竪穴住居跡断面西側（北→）
4. S I 44竪穴住居跡断面南北側（東→）
5. S I 44竪穴住居跡羽口出土状況（西→）
- 図版15 長野岱Ⅲ遺跡検出遺構（4）
1. S K 14土坑断面（東→）
2. S K 14土坑完掘（東→）
3. S K 53土坑断面（南西→）
4. S K 53土坑完掘（南西→）
5. S K 72土坑断面（南東→）
6. S K 72土坑完掘（南東→）
7. S K F 04フラスコ状土坑断面（北西→）
8. S K F 04フラスコ状土坑完掘（北西→）
- 図版16 長野岱Ⅲ遺跡検出遺構（5）
1. S W 07炭窯完掘（南→）
2. S W 07炭窯確認（南東→）
3. S W 07炭窯断面（南→）
4. S N 15焼土遺構確認（南→）
5. S N 15焼土遺構断面（南→）
- 図版17 長野岱Ⅲ遺跡検出遺構（6）
1. S S 43鍛冶炉鉄滓出土状況（北東→）
2. S S 43鍛冶炉確認状況（東→）
3. S S 43鍛冶炉羽口片出土状況（北東→）
- 図版18 諏訪岱Ⅱ遺跡出土遺物（1）
1. S I 113・114竪穴住居跡出土土器（1）
2. S I 114竪穴住居跡出土土器（2）
- 図版19 諏訪岱Ⅱ遺跡出土遺物（2）
1. S I 114竪穴住居跡出土土器（3）
2. S I 115竪穴住居跡出土銭貨
- 図版20 諏訪岱Ⅱ遺跡出土遺物（3）
1. 遺構外出土土器（1）
2. 遺構外出土土器（2）
- 図版21 諏訪岱Ⅱ・長野岱Ⅲ遺跡出土遺物
1. 遺構外出土土器（3）
2. S I 01・02竪穴住居跡出土土器・羽口
- 図版22 長野岱Ⅲ遺跡出土遺物（1）
1. S I 16竪穴住居跡出土金床石
2. S I 44竪穴住居跡出土土器
- 図版23 長野岱Ⅲ遺跡出土遺物（2）
1. S I 44竪穴住居跡出土羽口
2. S N 15焼土遺構・S S 43鍛冶炉出土遺物
- 図版24 長野岱Ⅲ遺跡出土遺物（3）
1. 遺構外出土土器（1）
2. 遺構外出土土器（2）
- 図版25 長野岱Ⅲ遺跡出土遺物（4）
1. 遺構外出土石器
2. 遺構外出土土器・羽口
- 図版26 諏訪岱Ⅱ・長野岱Ⅲ遺跡出土遺物
1. 諏訪岱Ⅱ遺跡 S R 02埋設土器
2. 諏訪岱Ⅱ遺跡 S I 113出土土師器甕
3. 諏訪岱Ⅱ遺跡 S I 113出土土師器坏
4. 長野岱Ⅲ遺跡遺構外出土土器（1）
5. 長野岱Ⅲ遺跡遺構外出土土器（2）
6. 長野岱Ⅲ遺跡遺構外出土土器（3）
- 図版27 諏訪岱Ⅱ遺跡樹種同定分析
図版28 諏訪岱Ⅱ・長野岱Ⅲ遺跡種実同定分析
図版29 長野岱Ⅲ遺跡火山灰分析・樹種同定分析
図版30 長野岱Ⅲ遺跡花粉分析

はじめに

1. 調査に至る経緯

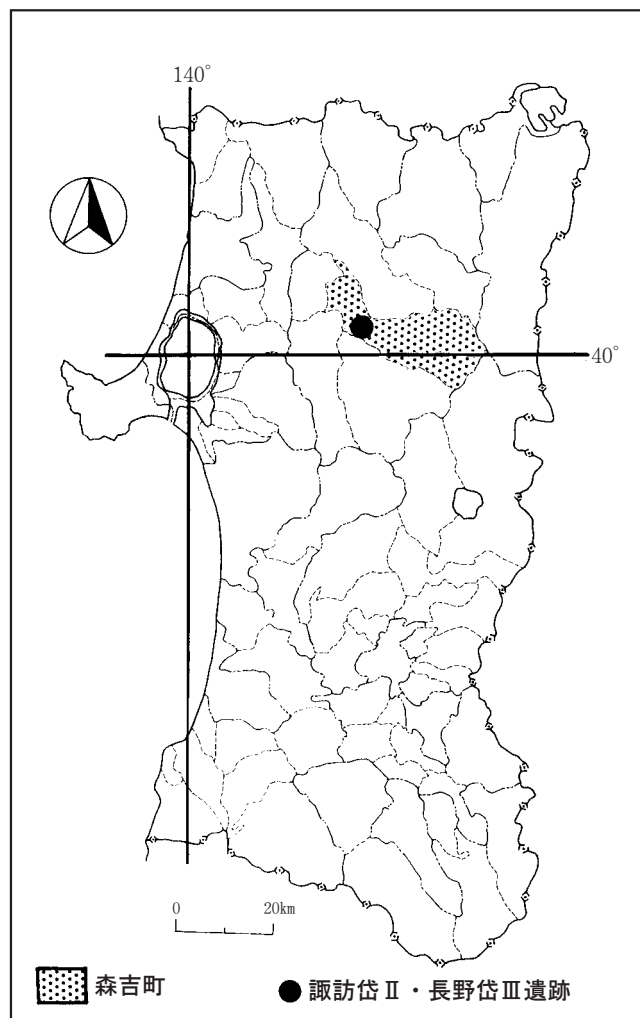
秋田県北秋田郡森吉町内を通る一般国道105号は、本荘市出戸町字井戸尻地内を起点とし、北秋田郡鷹巣町綴子字大堤地内を終点とする全長171.753kmの国有道路である。現在、秋田県が管理する国道の中では、この105号が最も長いもので、通過する市町村の多さからも県内交通網の骨格をなす幹線道路として運用され、地域住民の生活道路としても日々利用されている。

しかし、森吉町米内沢地区の現道は、幅員が狭隘で大型車両の通行が困難な上、国道105号と285号の交点および主要地方道二ツ井森吉線の交点が、すべて米内沢橋付近で結節しているため、信号機と交差点が多数連続する通行上の隘路となっている。また、沿道には商店が連なり、森吉町の中心街として伝統的商業圏を形成していることから、歩行者が多く車両通行量も大幅に増加していた(平成2年度道路交通センサスで1日当たり7,950台の通行量)。この結果を受けて、秋田県北秋田土木事務所(現：秋田県北秋田建設事務所)は現道の安全性・利便性を高める必要から、森吉町寄延地内を起点とし、森吉町松栄地内を終点とする全長3,550m

の「国道105号国道道路改築工事業」(愛称：米内沢バイパス建設事業)を平成3年度に策定、着手した。

本事業の工事路線内には、埋蔵文化財包蔵地として周知の遺跡である諏訪岱Ⅱ遺跡と長野岱Ⅲ遺跡が存在することが判明していた。このため、秋田県教育委員会は、道路建設部分に所在する遺跡の範囲確認調査を平成12年11月に実施した。その結果、両遺跡とも発掘調査による記録保存が必要であることが判明した。

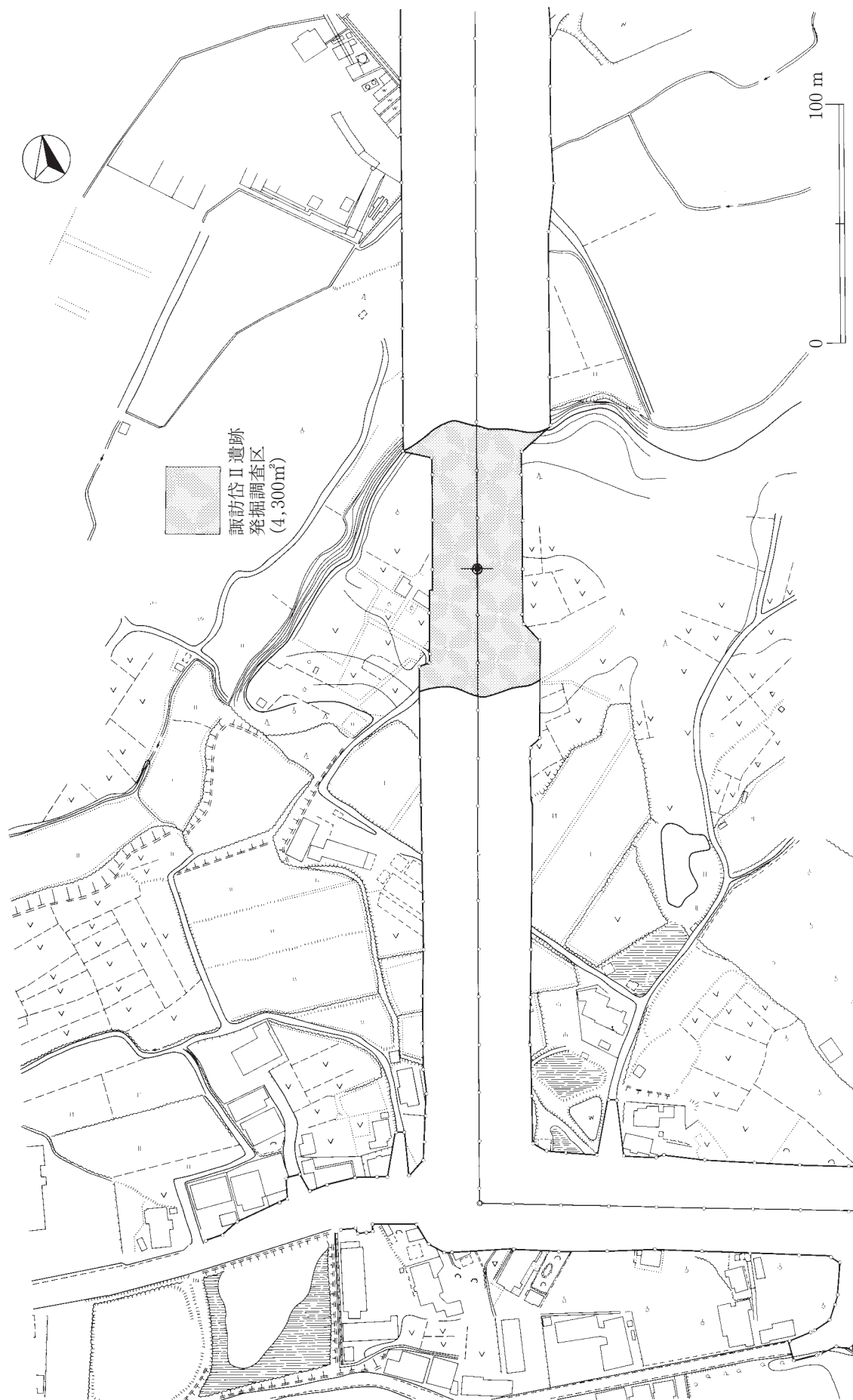
以上の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、道路の建設に先立って、諏訪岱Ⅱ遺跡を平成13年5月17日から7月26日までの期間、長野岱Ⅲ遺跡を平成13年7月27日から10月4日までの期間、発掘調査を実施するに至った。



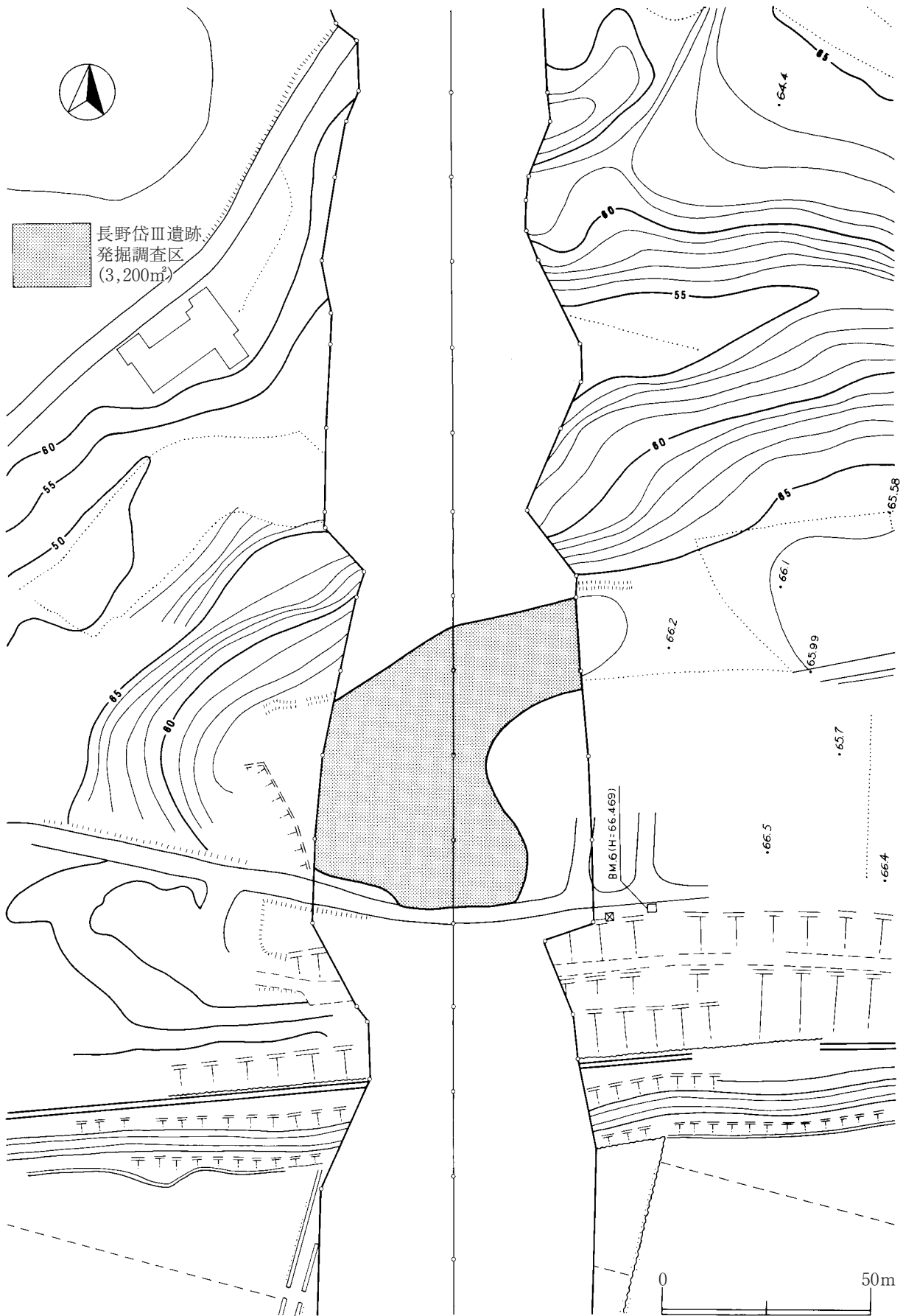
第1図 遺跡の位置

2. 調査要項

遺 跡 名	諏訪岱Ⅱ遺跡(すわたいにいせき) : 遺跡略号 2 S W T - Ⅱ 長野岱Ⅲ遺跡(ながのたいさんいせき) : 遺跡略号 2 N N T - Ⅲ
遺 跡 所 在 地	諏訪岱Ⅱ遺跡 : 秋田県北秋田郡森吉町米内沢字諏訪岱111外 (北緯40度7分8秒、東経140度23分0秒) 長野岱Ⅲ遺跡 : 秋田県北秋田郡森吉町米内沢字長野岱149-2外 (北緯40度7分39秒、東経140度23分8秒)
調 査 期 間	諏訪岱Ⅱ遺跡 : 平成13年5月17日～平成13年7月26日 長野岱Ⅲ遺跡 : 平成13年7月27日～平成13年10月4日
調 査 目 的	国道105号国道道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査
調 査 面 積	諏訪岱Ⅱ遺跡 : 4,300m ² 長野岱Ⅲ遺跡 : 3,200m ²
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	石澤 宏基(秋田県埋蔵文化財センター 南調査課 調査班 学芸主事) 遠藤 元(秋田県埋蔵文化財センター 南調査課 調査班 非常勤職員) 田村 瑞保(秋田県埋蔵文化財センター 南調査課 調査班 非常勤職員) 高橋 信(秋田県埋蔵文化財センター 南調査課 調査班 非常勤職員)
総 務 担 当 者	佐藤 悟(秋田県埋蔵文化財センター 総務課 総務課長) 佐々木敬隆(秋田県埋蔵文化財センター 総務課 主事) 成田 誠(秋田県埋蔵文化財センター 総務課 主事)
調 査 協 力 機 関	秋田県北秋田建設事務所 森吉町教育委員会 合川町教育委員会



第2図 路線と遺跡（諏訪袋Ⅱ遺跡）



第3図 路線と遺跡（長野岱Ⅲ遺跡）

遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地

諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡の所在する森吉町は、第1図の通り、秋田県の北部中央やや西寄りに位置する。東は鹿角市と仙北郡田沢湖町、西は北秋田郡合川町と上小阿仁村、南は北秋田郡阿仁町、北は北秋田郡鷹巣町と比内町に接している。町名の由来となった森吉山(標高1,454m)は南接する阿仁町との境界にある。町域は、奥羽脊梁山脈の支脈である森吉火山地と、太平山山地に連なる標高500m以上の山地に立地する。南部の森吉山、北部の小繫ノ森(標高1,012m)、東部の柴倉岳(標高1,178m)およびヒバクラ岳(標高1,326m)、といった奥羽山系の比較的低い山々に囲まれているため、町域総面積の約70%が山地で占められる。

この森吉町を貫流する阿仁川は、流路の全長が約62.3kmあり、森吉山系に源を發し、中流域で小又川や小阿仁川などの支流を合わせつつ、兩岸に河岸段丘を形成して二ツ井町麻生集落付近で米代川に注ぐ。諏訪岱Ⅱ遺跡と長野岱Ⅲ遺跡の位置する森吉町米内沢地区では、両遺跡の間を西流し、米内沢橋付近で北西方向に流路を変える。この阿仁川流域では、縄文土器や土師器・須恵器などの遺物を出土する遺跡の多くが流路兩岸の河岸段丘上に確認されており、諏訪岱Ⅱ遺跡と長野岱Ⅲ遺跡もこの例に漏れない。秋田県農政部農地整備課編『大野台開発計画地域土地分類基本調査米内沢』(1978年)の地形区分図(第4図)によると、阿仁川が形成した5面の河岸段丘のうち、低位から2段目の砂礫段丘Ⅳ(Higher Lowest)上に諏訪岱Ⅱ遺跡が、低位から3段目の砂礫段丘Ⅲ(Higher more Lower)上に長野岱Ⅲ遺跡が立地する。表層地質は、諏訪岱Ⅱ遺跡が火山灰と砂礫層から成る低位段丘堆積物、長野岱Ⅲ遺跡が火山灰と砂礫層から成る低位～中位段丘堆積物で、いずれも第四紀更新世である。

諏訪岱Ⅱ遺跡は、秋田内陸縦貫鉄道米内沢駅から南東へ約2km、森吉町役場から北西に約300mの阿仁川左岸段丘上に位置する。この地点は、南東―北西方向に蛇行してきた阿仁川が、ほぼ真西に流路を変え、沖積地が広がっている。遺跡は河岸段丘上に位置し、調査区北端は阿仁川の氾濫原へと下る急峻な斜面、南端は倉ノ山(標高309m)から伸びる後背山地の裾先となっている。標高は41～42mである。遺跡が乗る段丘面の東側を堤沢川が、西側をヲツコ沢川が流れており、調査区周辺は、現在水田および畑地・果樹園として利用されている。遺跡から堤沢川寄りの南西側には、平成3年に森吉町教育委員会によって発掘調査が行われた諏訪岱遺跡^(註1)が位置する。

長野岱Ⅲ遺跡は、秋田内陸縦貫鉄道米内沢駅から東へ約1km、森吉町役場から北に約1.3kmの阿仁川右岸段丘上に位置する。この地点は、諏訪岱Ⅱ遺跡と阿仁川を挟んだ対岸であり、県北部有数の規模をもつ大野台台地の南東縁辺部にあたる。大野台台地は、成因的には阿仁川による河成段丘であるが、地表面は十和田火山灰が覆っているため、形態的にはローム段丘とも称される。遺跡全体は、西に突き出した小舌状台地の上に立地する。標高は62～65mである。調査区北端は沢地形へと落ち込む急峻な斜面、南端は下方の阿仁川低地と比高差20m前後の急崖を成している。調査区周辺は、現在山林と建設資材置き場および長野岱工業団地として利用されている。遺跡の東側には、長野岱Ⅱ遺跡と昭和41年に森吉町教育委員会によって発掘調査が行われた長野岱Ⅰ遺跡^(註2)が位置する。

2. 歴史的環境

森吉町には、1991年刊行の『秋田県遺跡地図(県北版)』によると、58箇所^(註1)の埋蔵文化財包蔵地が周知の遺跡として記載されている。その後、阿仁川流域では、米内沢地区の諏訪岱遺跡発掘調査(1991年)^(註1)、同地区の諏訪岱遺跡・柳田遺跡・冷水岱遺跡範囲確認調査(1992～93年)^(註3)、根森田地区の桂の沢遺跡発掘調査(1993年)^(註4)、白坂上岱地区の白坂遺跡発掘調査(1993年)^(註5)などが実施され、貴重な調査結果が報告された。これらに加え、近年の調査成果を代表するものに森吉山ダム建設事業関連遺跡がある。同事業は、1992(平成4)年度～1993(平成5)年度の2箇年度にわたって秋田県教育委員会が遺跡分布調査を実施した結果、著しい数の「新発見の遺跡」がダム建設に係ることが判明したため、1994(平成6)年度～1998(平成10)年度の5箇年度にわたり、開発区域1,200,000m²を対象とする遺跡範囲確認調査^(註6)が行われた。これによって、計60遺跡の存在が確認され、阿仁川の支流である小又川流域の遺跡数は激増した。発掘調査は、1997年(平成9年)から秋田県教育委員会と森吉町教育委員会が主体となって現在も実施されている。2002年(平成13年)3月時点で、秋田県教育委員会から7冊9遺跡の報告書^(註7)が、森吉町教育委員会から7冊の報告書^(註8)が刊行されている。

このうち、諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡の周辺遺跡として、第5図上の30遺跡および1991年以降に周知の遺跡となった遺跡を含む一覧(第1表)を掲載した。この地域の遺跡は、阿仁川兩岸の河岸段丘面に多数所在しており、これは上流の小又川兩岸に位置する森吉山ダム建設事業に関連する遺跡群も同様である。以下、時代および時期ごとに、当該地域の主要な遺跡について述べる。

旧石器時代の遺跡には、米内沢地区の長野岱Ⅰ遺跡(13-21)があげられる。昭和42年に文化財保護委員会(現:文化庁)提出された長野岱Ⅰ遺跡発見届に「縄文期以前の旧石器と考えられた石器1点」が数えられており、同年4～6月に行われた長野岱Ⅰ遺跡発掘調査の報告書で奥山潤氏は、慎重な立場ながらその第5図に掲載した石器に対して「いわゆる旧石器」「旧石器のような石器」という見解を示している^(註9)。その後、1995(平成7)年に実施された森吉山ダム建設事業に係る遺跡範囲確認調査によって、森吉地区の二重鳥A遺跡で搔器1点、二重鳥B遺跡でナイフ形石器1点が出土し、同地区のネネム沢A遺跡でも旧石器時代の石器が出土した。現在までのところ、この4遺跡以外に旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代草創期の遺跡は現在のところ確認されていないが、早期の遺跡については、桂の沢遺跡、桐内A・C・D遺跡、姫ヶ岱C・D遺跡、二重鳥A・E遺跡、地蔵岱遺跡の9遺跡がある。爪形文・貝殻沈線文・条痕文土器が出土した桂の沢遺跡、早期および早期末葉の尖底土器片が出土した桐内A遺跡および桐内C遺跡、早期後葉の繊維土器・撚糸文土器が出土した桐内D遺跡、底部内面に煤状炭化物が付着する尖底土器片が出土した姫ヶ岱D遺跡、トランシェ様石器1点が出土した姫ヶ岱C遺跡、早期に属する土器片が出土した二重鳥A遺跡および二重鳥E遺跡、地蔵岱遺跡などである。

縄文時代前期の遺跡には、長野岱Ⅰ遺跡、白坂遺跡、吉野Ⅱ遺跡、桐内B・C・D遺跡、姫ヶ岱A・C・D遺跡、上ハ岱B遺跡、地蔵岱遺跡がある。諏訪岱Ⅱ遺跡の北東に近接する狐岱遺跡(13-16)は森吉町内では初めての発掘調査として、1954(昭和29)年に大和久震平氏を中心に実施され、縄文時代前期後葉～中期前葉の円筒式土器を出土する遺跡として報告^(註10)された。大和久氏が前期末から中期初頭の土器編年について、円筒下層d式土器および円筒上層a・b式土器との対比から、秋田県北部に地

域を限定して「仮称狐岱式」を提唱したことでも知られる遺跡である。のち狐岱遺跡は、森吉山ダム建設事業の宅地移転と代替農地造成のため、1989(平成元)年に秋田県埋蔵文化財センターによる遺跡範囲確認調査(註11)が実施された。その結果、竪穴住居跡・土坑・組石棺墓・土器埋設遺構・土堤状盛土遺構および捨て場など多数の遺構が検出され、出土した遺物から縄文時代前期から晩期まで及ぶ大規模な集落跡(遺跡推定面積約150,000m²)であることが判明(註12)した。この1989年調査時に明らかになった遺跡の主要な時期は縄文時代前期後葉から後期前葉である。また、長野岱Ⅲ遺跡の東南に近接する長野岱Ⅰ遺跡(13-21)も、前期末葉を主体とする遺跡である。円筒下層d式土器が出土しており、同時期の所産と考えられる岩偶も採集されている(註13)。この他の前期の遺物包含地には冷水岱遺跡(13-15)、石倉坂遺跡(13-30)、陣場岱Ⅰ遺跡(13-37)などがある。

縄文時代中期の遺跡には、円筒上層式土器が出土した長野岱Ⅰ・Ⅱ遺跡(13-20・21)、円筒上層式土器および大木8a~10式土器が出土した狐岱遺跡(13-16)、吉野Ⅱ遺跡(13-19)、陣場岱Ⅰ遺跡(13-37)、円筒上層b・d式土器が出土した冷水岱遺跡(13-15)、円筒上層e式土器が出土した桐内C遺跡、狐岱遺跡があるが、この他の中期の遺物包含地としては愛宕堂遺跡、石倉坂遺跡がある。

縄文時代後期の遺跡には、十腰内Ⅰ式期の土器埋設遺構が検出された白坂遺跡(13-27)、十腰内Ⅰ・Ⅱ式の住居跡が検出された桂の沢遺跡、狐岱遺跡、吉野Ⅰ遺跡、十腰内Ⅰ式土器が出土した桐内C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、深渡遺跡などがある。後期の遺物包含地には長野岱Ⅰ遺跡(13-21)、比内道下山根遺跡(13-25)、根小屋岱遺跡(13-23)、長下A・B遺跡(13-9・10)、大沢岱A・B遺跡(13-1・2)、大野遺跡(19-07)、小堤岱遺跡(19-08)などがあり、近年の森吉山ダム関連遺跡の出土事例がこれに加わる。

縄文時代晩期の遺跡には、戦前から知られる大規模な遺跡として塚の岱遺跡(13-26)と白坂遺跡(13-27)、桂の沢遺跡がある。塚の岱遺跡は、1968(昭和43)年に発掘調査され、後期末葉から晩期前葉を主体とする土器(鉢・壺・注口など)と土偶が出土した(註14)。白坂遺跡は、大洞B式土器の注口土器や土偶・岩偶・岩版など多様な遺物を含む捨て場が検出され、全国的に話題となった「笑う岩偶」が出土した。現在、森吉山ダムの向様田遺跡群や漆下遺跡などで晩期の遺構・遺物が新たに確認されつつある。

弥生時代および続縄文時代の遺跡には、長野岱Ⅲ遺跡の東南に近接する長野岱Ⅰ遺跡(13-21)、吉野Ⅰ遺跡(13-18)、森吉山ダムの桐内A遺跡があり、森吉町教育委員会が発掘調査した水上ミ遺跡や二重鳥E・F遺跡、上悪戸B遺跡でも弥生時代の遺物が出土している。

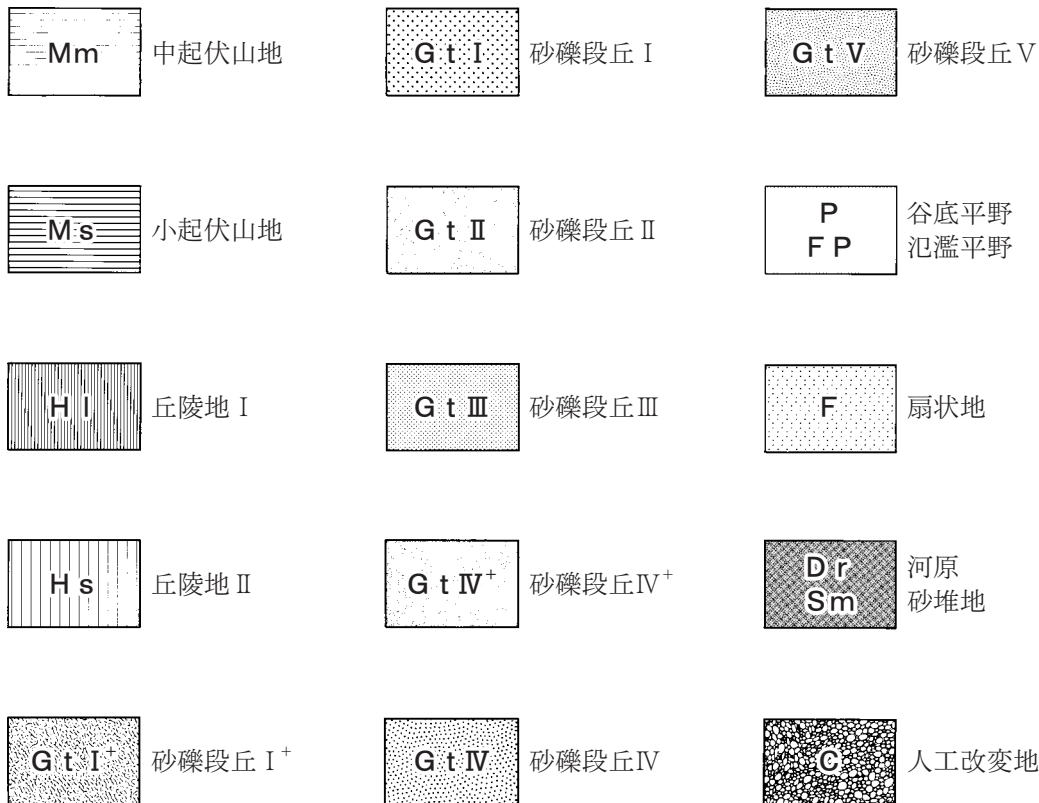
古墳時代の遺跡は、今のところ当該期の遺構・遺物が阿仁川の上～中流域で確認されていない。

奈良～平安時代の遺跡には、平安時代の竪穴住居跡が12軒検出された諏訪岱遺跡、遺物包含地として土師器の出土が確認されている遺跡には寺の上Ⅱ遺跡(13-12)、御嶽遺跡(13-07)、根小屋岱遺跡(13-23)、長野岱Ⅰ遺跡(13-21)、狐岱遺跡(13-16)、吉野Ⅱ遺跡(13-19)、小堤岱遺跡(19-07)があり、これらに近年の調査で森吉山ダムの天津場A遺跡、ネネム沢A遺跡、森吉家の前A遺跡が加わった。

中世以降の遺跡には、中世城館として知られる米内沢城(13-11)と阿仁城(13-06)、空堀と土塁が確認されている御嶽館跡(13-08)、長野岱Ⅰ遺跡と部分的に重複する空堀が確認された根小屋館跡(13-22)など、森吉町内に13箇所確認されている。この他、小滝新兵エ岱Ⅰ遺跡では鎌倉時代製作の青銅古鏡が出土し、森吉家の前B遺跡では室町時代後期と考えられる竪穴建物跡1軒が検出され、珠洲系陶器や鉄製品が出土した。



第4図 地形区分図



《参考文献》

- 註1 森吉町教育委員会『諏訪岱遺跡～堤沢川流路溝工事に係る発掘調査報告～』1992(平成4)年
- 註2 森吉町教育委員会『長野岱 I 遺跡』1967(昭和42)年
- 註3 森吉町教育委員会『諏訪岱・柳田・冷水岱～仮称「ふるさと村整備事業」に係る遺跡範囲確認調査報告～』1994(平成6)年
- 註4 秋田県教育委員会『桂の沢遺跡発掘調査報告書～小滝阿仁前田停車場線地方道改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』秋田県文化財調査報告書第247集 1994(平成6)年
- 註5 秋田県教育委員会『白坂遺跡発掘調査報告書～県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』秋田県文化財調査報告書第244集 1994(平成6)年
- 註6 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第259集(1995年)、第267集(1996年)、第270集(1997年)、第281集(1998年)、第291集(1999年)の「森吉山ダム建設事業」に係る遺跡範囲確認調査の記録を参照。
- 註7 秋田県教育委員会『深渡遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I～』秋田県文化財調査報告書第286集 1999(平成11)年
秋田県教育委員会『姫ヶ岱 C 遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 II～』秋田県文化財調査報告書第287集 1999(平成11)年
秋田県教育委員会『桐内 C 遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 III～』秋田県文化財調査報告書第299集 2000(平成12)年
秋田県教育委員会『姫ヶ岱 D 遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 IV～』秋田県文化財調査報告書第300集 2000(平成12)年
秋田県教育委員会『桐内 B 遺跡・桐内 D 遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 V～』秋田県文化財調査報告書第318集 2001(平成13)年
秋田県教育委員会『桐内 A 遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 VI～』秋田県文化財調査報告書第334集 2002(平成14)年
秋田県教育委員会『桐内沢遺跡・日廻岱 A 遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 VII～』秋田県文化財調査報告書第335集 2002(平成14)年
- 註8 森吉町教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』の平成7年度、同8年度、同9年度(上悪戸 A 遺跡)、同10年度、同10・11年度、同12年度(二重鳥 D・E・F 遺跡)の6冊
- 註9 前掲、註2に同じ
- 註10 大和久震平「北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告」『昭和三十二年調査研究報告』秋田県文化財保護協会 1958(昭和33)年
- 註11 秋田県教育委員会『狐岱遺跡、山崎遺跡、吉野 I 遺跡、吉野 II 遺跡』『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集 1990(平成2)年
- 註12 大野憲司「狐岱遺跡について～1989年の範囲確認調査から～」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号 1990(平成2)年
- 註13 高橋学「森吉町長野岱 I 遺跡採集の岩偶」『秋田考古学』第42・43合併号 1993(平成5)年
- 註14 加賀利男「塚ノ岱遺跡の発掘調査について」『広報もりよし』第131号 森吉町 1969(昭和44)年

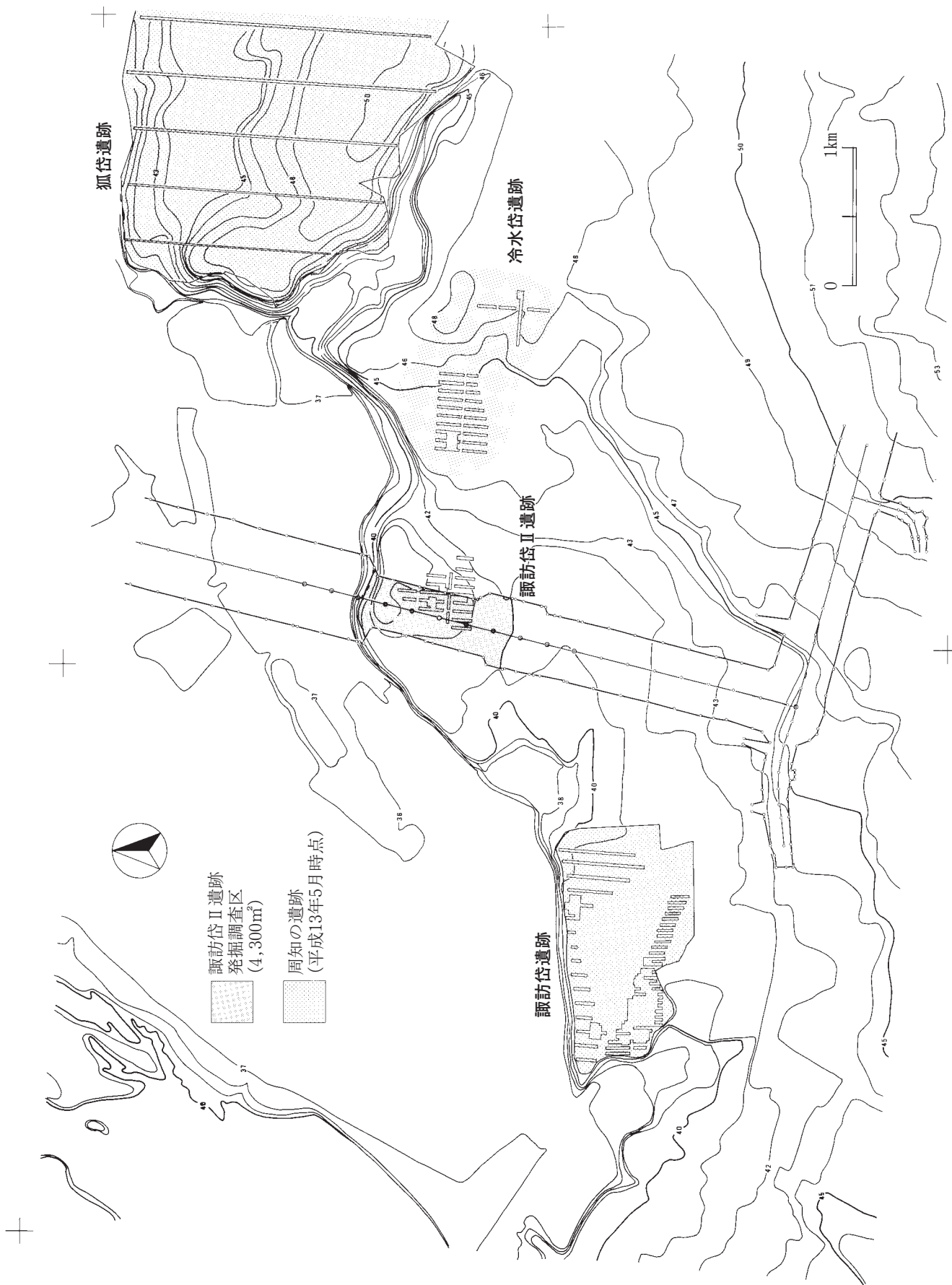
第1表 周辺遺跡一覧

※下記の番号は、秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県北版)』1991(平成3年)で付された遺跡番号である。

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
13-01	大沢岱A	森吉町米内沢字大沢岱148-8	縄文後期	遺物包含地
13-02	大沢岱B	森吉町米内沢字大沢岱202-30	縄文後期	遺物包含地
13-03	向本城	森吉町米内沢字本城向屋敷3	縄文時代	遺物包含地
13-04	桐木岱A	森吉町米内沢字桐木岱38	縄文晩期	遺物包含地
13-05	桐木岱B	森吉町米内沢字桐木岱20	縄文晩期	遺物包含地
13-06	阿仁城	森吉町本城字寺ノ沢201、館ノ下10	中世館跡	館跡
13-07	御嶽	森吉町米内沢字御嶽62-1	平安時代	遺物包含地
13-08	御嶽館	森吉町米内沢字高御嶽2	中世館跡	館跡
13-09	長下A	森吉町米内沢字寺ノ上27-1	縄文後期	遺物包含地
13-10	長下B	森吉町米内沢字寺ノ上12-28	縄文後期	遺物包含地
13-11	米内沢城	森吉町米内沢字倉ノ沢出口99-5、寺ノ上77-1	中世城館	館跡
13-12	寺の上Ⅱ	森吉町米内沢字寺ノ上27-1	縄文晩期	遺物包含地
13-13	寺の上Ⅰ	森吉町米内沢字寺ノ上12-28	縄文時代	遺物包含地
13-14	伊勢の森	森吉町米内沢字伊勢の森52-57	平安時代	遺物包含地
13-15	冷水岱	森吉町米内沢字冷水岱77-1	縄文前・中期	遺物包含地
13-16	狐岱	森吉町米内沢字狐岱88	縄文前・中・後期、平安時代	遺物包含地
13-17	山崎	森吉町米内沢字山崎57-1	縄文時代	遺物包含地
13-18	吉野Ⅰ	森吉町米内沢字吉野13-1	縄文後・晩期	遺物包含地
13-19	吉野Ⅱ	森吉町米内沢字吉野5-1	縄文前・中期、平安時代	遺物包含地
13-20	長野岱Ⅱ	森吉町米内沢字長野岱346-1	縄文中期	遺物包含地
13-21	長野岱Ⅰ	森吉町米内沢字長野岱56-1	縄文前・中期	遺物包含地
13-22	根小屋館	森吉町米内沢字長野岱56-1	中世城館	館跡
13-23	根小屋岱	森吉町米内沢字根小屋1-34	縄文前・中・後期	遺物包含地
13-24	浦田うるし沢	森吉町浦田字うるし沢50-1	縄文時代	遺物包含地
13-25	比内道下山根	森吉町浦田字白坂山根92	縄文後期	遺物包含地
13-26	塚の岱	森吉町浦田字塚の岱80	縄文晩期	遺物包含地
13-27	白坂	森吉町浦田字白坂上岱19-22	縄文後・晩期	遺物包含地
13-28	愛宕堂	森吉町浦田字稲荷沢40	縄文中期	遺物包含地
13-29	浦田館	森吉町浦田字愛宕堂下44	中世館跡	館跡
13-30	石倉坂	森吉町浦田字石倉坂3	縄文前・中期	遺物包含地
19-07	大野	合川町上道城字大野1	縄文中期	遺物包含地
19-08	小堤岱	合川町道城字小堤岱51-2	縄文後期、平安時代	遺物包含地

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県北版)』刊行後(平成3年以降)に確認された周知の遺跡

	遺跡名	所在地	時代	備考
—	諏訪岱遺跡	森吉町米内沢字諏訪岱1-1外	縄文・平安時代	遺物包含地
—	諏訪岱Ⅱ遺跡	森吉町米内沢字諏訪岱111外	縄文前・中期、平安時代、中世	遺物包含地
—	長野岱Ⅲ遺跡	森吉町米内沢字長野岱149-2外	縄文中・後・晩期、平安時代	遺物包含地
—	長野Ⅰ遺跡	森吉町米内沢字長野131外	縄文時代	遺物包含地
—	長野Ⅱ遺跡	森吉町米内沢字長野86-1外	平安時代	遺物包含地



第6図 諏訪谷II遺跡とその周辺遺跡

諏訪岱Ⅱ遺跡

(遺跡略号：2SWT-Ⅱ)

所在地：秋田県北秋田郡森吉町米内沢字諏訪岱111外

調査期間：平成13年（2001）5月17日～7月26日

調査面積：4,300㎡

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

諏訪岱Ⅱ遺跡は、北秋田郡を貫流する阿仁川と出羽山地の北東辺に立地し、その標高は41～42m前後である。本遺跡の発掘調査区は国道105号（米内沢バイパス）線の工事路線区域にあたり、南北方向に細長い4,300㎡の広さである（第2図）。

発掘調査区は、森吉町役場から国道105号線を約180m米内沢中心街に向かって進み、秋北バス米内沢操車場との交差点で阿仁川方向に右折後、約120m先の水田・畑地および果樹園の中にある。バイパス道路の工事路線に合わせた道路上の平面形を呈し、南北方向に長く東西方向に短い。

検出した遺構は、竪穴住居跡を主体として土坑・土器埋設遺構・焼土遺構・陥し穴などである。調査区内での遺構分布は、調査区南側で住居跡を中心に遺構が集中的に検出された。調査区北側でも遺構を検出したが、その密度は南側に比べて希薄である。出土した遺物は、ほとんどが縄文時代中期～晩期および平安時代に属するものであった。

第2節 調査の方法

調査の方法は、国道105号国道道路改築工事の路線中心杭STA-No.66を基点として真北方向をとり、4m四方の方眼（以下、グリッドと呼称する）杭を打設して、検出した遺構の位置を把握するグリッド法に拠った。基点杭にはMA50の名称を付し、西に行くに従いMB・MC・MD…、東に行くに従いLT・LS・LR…、北に行くに従い51・52・53…、南に行くに従い49・48・47…と、二桁のアルファベットおよび算用数字を組み合わせた番号を4mごとの各杭に明記した。この組み合わせ番号を示した各グリッドの名称は、南東隅の杭の番号を用いた。調査によって検出した遺構は、発見順に一連の番号を付して把握した。発掘調査中、精査による新知見によって欠番となった遺構番号もある。

第3節 調査の経過

諏訪岱Ⅱ遺跡の発掘調査は、平成13年5月17日～7月26日まで実施した。

4月26日、合川町李岱下豊田の合川町公民館にて、諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡の発掘調査作業員説明会を開催した。芳賀所長以下、調査員4名が出席し、資料とスライドで解説を行った。当日の説明会出席者数は32名であった。応募者からは個人登録カードと健康調査カードの提出を受けた。

第1週（5月17日～5月18日）5月17日より、発掘調査を開始。調査事務所および作業員休憩所の整備・整頓、遺跡遠景写真を撮影した。

第2週（5月21日～5月25日）主に調査区北端からの粗掘りを実施した。遺構はSI・SR・SKなど4基を検出した。全調査区のグリッド杭打設を完了する。

第3週（5月28日～6月1日）57ライン以南の粗掘りを実施した。遺構はS X05を検出した。

第4週（6月4日～6月8日）48ライン以南の粗掘りを中心に作業を行った。先々週から多数確認されていた柱穴様ピットを検出遺構とし、番号を付した。調査区北東側を中心に柱穴様ピット群を検出遺構とした。

第5週（6月11日～6月14日）43～50のL Tライン以東の粗掘りを行った。S Iの精査作業を優先し、十字ベルトを設定して掘り下げを開始した。

第6週（6月18日～6月22日）S R121・S I122・S N123の遺構を検出した。S I115内から銭貨5点が出土した。

第7週（6月25日～6月29日）S X124・S X125・S N126・S N127の遺構を検出した。

第8週（7月2日～7月6日）S I113の北側半分ではほぼ全面的に炭化材の出土。S I114のカマドからは赤褐色の土師器がまとまって出土した。

第9週（7月9日～7月13日）遺跡全景写真を撮影した。L S59グリット内から陥し穴を1基検出した。

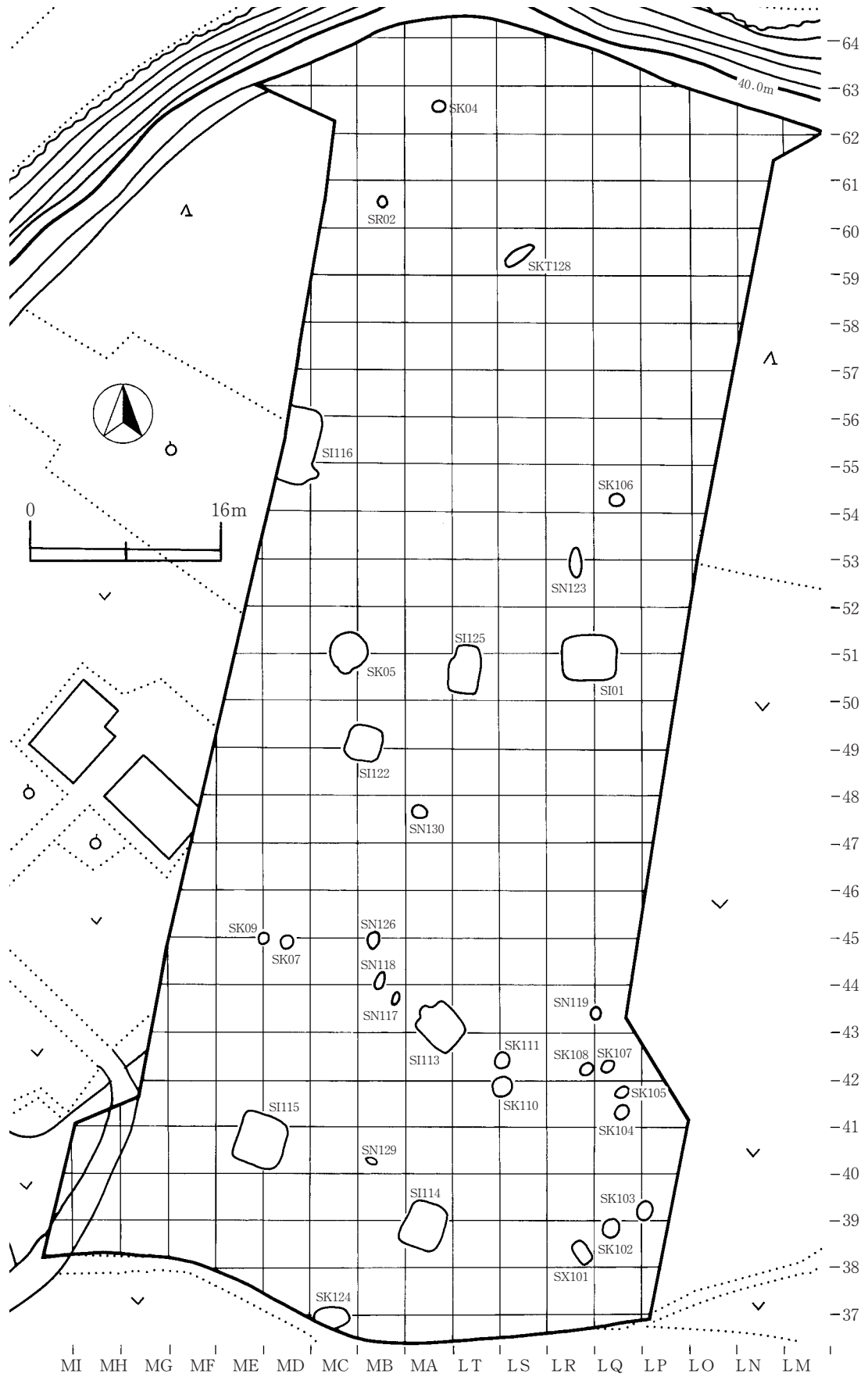
第10週（7月16日～7月19日）柱穴様ピット群については精査の結果、掘建柱建物跡となるような等間隔の配置になるものがなかった。S X101は精査の結果、泥岩による石囲いを構築した遺構であることが判明した。

第11週（7月23日～7月26日）長野岱Ⅲ遺跡への現場引越し準備作業を実施した。26日をもって発掘調査を終了した。

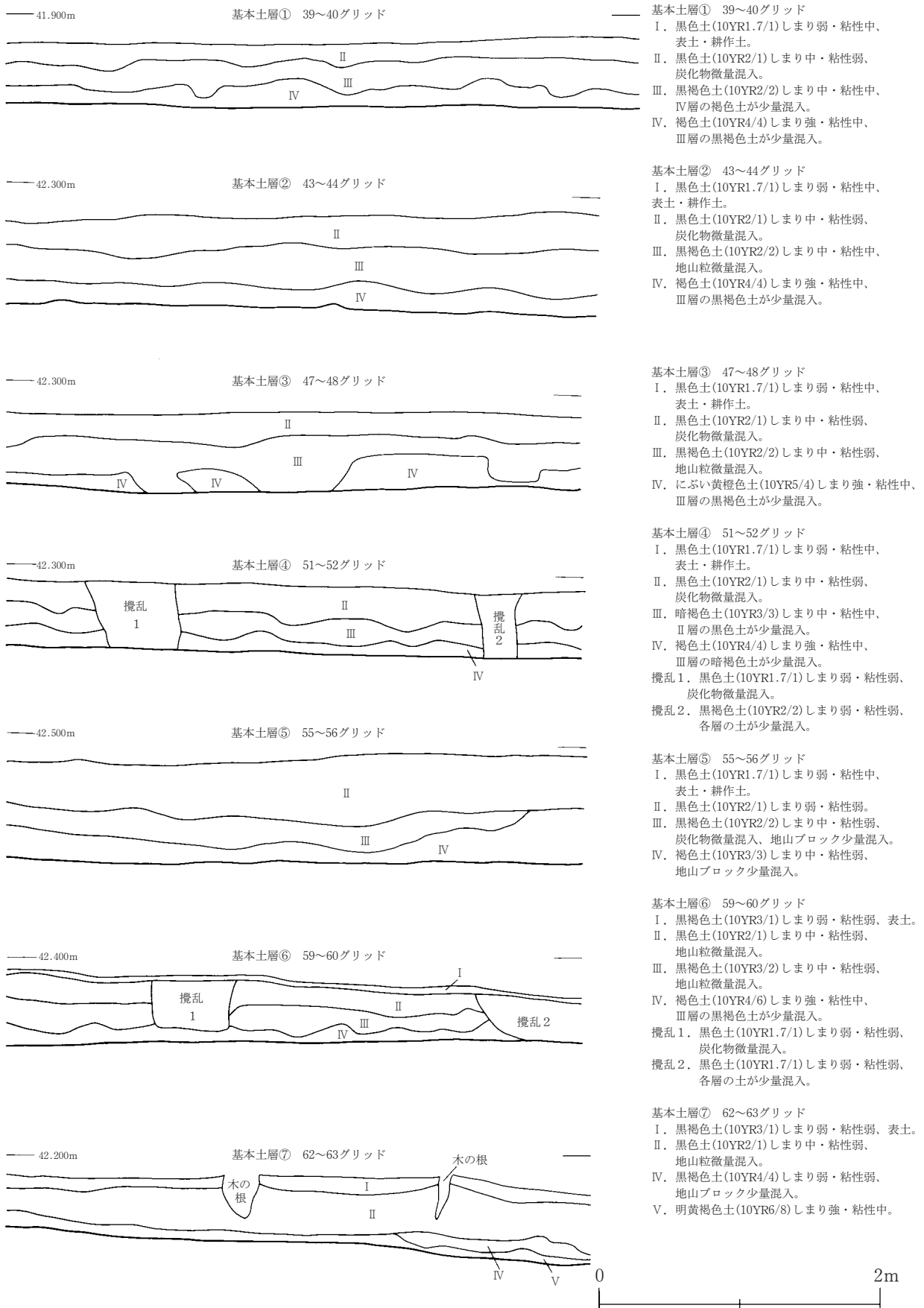
第4節 整理作業の方法と経過

すべての整理作業は、平成13年10月9日から秋田県埋蔵文化財センター本所にて行った。出土した遺物の洗浄・注記・分類・接合を開始し、この工程が終了した遺物から実測・採拓・トレースなどの作業を行った。遺構図面の浄書は、現場で記録した実測図（原図）とグリッド配置図を組み合わせ第2原図を作成した。第2原図の縮尺は基本的に20分の1縮尺で作図を行った。また、報告書原稿を執筆するにあたって、例言に挙げた方々より多くの御教示をいただいた。平成14年3月3日、秋田市文化会館を会場に開催された「平成13年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」にて、諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡の発掘調査成果を公開した。会場では、出土した遺物の展示を行った。

報告書の作成にあたって、遺跡の時期が縄文時代と平安時代であるため、遺構の掲載順序を検討した。その結果、まず種別毎の帰属を優先し、次に遺構番号の小さい順に配列することとした。遺構番号は検出順に付したものであるが、調査の工程は調査区北端から南端に向かって、南下しながら進めたことから、概ね南に行くほど遺構番号の数値が大きくなる。遺物については、遺構内出土遺物を先に掲載して遺構外出土遺物を後とした。以上の経過を経て、多くの上司・同僚の指導と協力を受けつつ、諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡の発掘調査成果を本書にまとめることができた。



第7図 遺構配置図



第8図 基本土層図

第2章 調査の記録

第1節 基本層序

諏訪岱Ⅱ遺跡の基本層序は、前年度（平成12年12月）実施の範囲確認調査時に試掘されたトレンチを精査・観察して確認した。その確認地点は、調査区南側のM I 38グリッド杭からME63グリッド杭のラインである。このライン内に試掘トレンチの交差があるため土層の中央が一部欠けている。発掘調査前の現況は松および杉の林野であった。確認した基本層序は以下の通りである。

I層：黒色土（10YR 2/1）表土・盛土。

II層：黒色土（10YR 2/1）締まり中、粘性中、粒径2～3mmの炭化物微量混入。

III層：黒褐色土（10YR 2/3）締まりやや強、粘性やや強、粒径2～3mmの炭化物微量混入。

IV層：褐色土（10YR 4/4）締まりやや強、粘性やや強、地山粒土・黒褐色土が微量混入。

V層：黄褐色土（10YR 5/6）締まり強、粘性強、地山。

以上のうち、検出遺構の確認面は概ねIII層上面であった。

第2節 検出遺構と遺物

発掘調査の結果、縄文時代の土坑や土器埋設遺構、陥し穴、平安時代の竪穴住居跡や土坑などの計31遺構を検出した。出土した遺物は、縄文時代の土器・石器(16箱)、平安時代の土器(8箱)、銭貨など(1箱)、合わせて整理用コンテナ25箱分(大コンテナ換算、1箱の容量36ℓ)である。今回の発掘調査区(4,300㎡)内で検出した遺構の内訳は以下の通りである。

縄文時代の遺構 計3遺構

土坑……1基(S K124)、土器埋設遺構……1基(S R02)、陥し穴……1基(S K T128)

古代(平安時代)～中世の遺構 計28遺構

竪穴住居跡……7軒(S I 01・113・114・115・116・122・125)

土坑……11基(S K04・05・07・09・102・103・104・105・106・107・108・110・111)

焼土遺構……7基(S N117・118・119・123・126・129・130)

性格不明遺構……1基(S X101)

1. 縄文時代の遺構

(1) 土坑

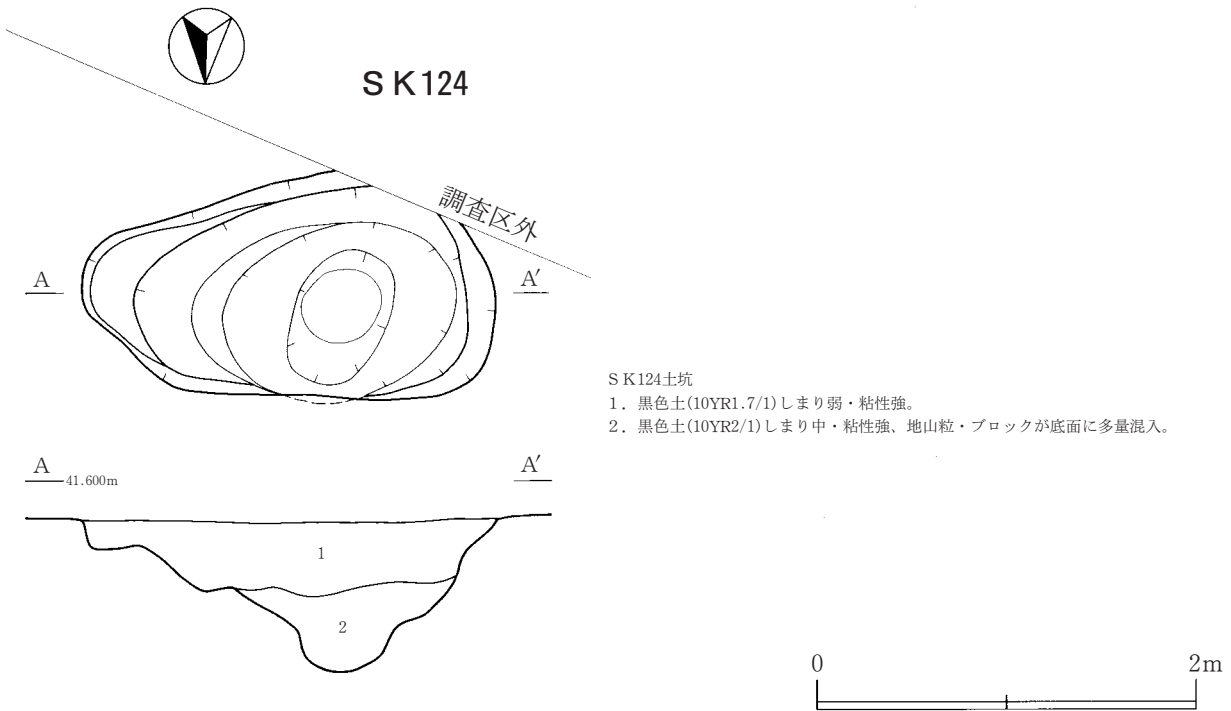
SK124土坑（第9図、図版3-1）

《位置と確認》調査区南端の境界線上、MC36・37区に位置し、III層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸2.20m、短軸1.18m、深さ0.80mで、平面形は長楕円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》2層に分層した。2層には多量の地山ブロックが混入していた。



SK124土坑
 1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性強。
 2. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性強、地山粒・ブロックが底面に多量混入。

第9図 SK124土坑

《断面形》長軸方向である東西断面は、東側が底面から緩い段差を持つ断面形であるのに対し、西側はやや急に立ち上がり段差を持たない。

《底面》緩く窪んでおり平坦ではない。穴の中央より西側が鉢状にくぼむ。

《時期》遺構内覆土中から遺物の出土はなかったが、遺構確認面の上位および周辺から縄文土器片および石製品が出土しており、縄文時代の土坑と判断した。

(2) 土器埋設遺構

SR02土器埋設遺構 (第10図、図版3-2、26-1)

《位置と確認》調査区北西部のMB60区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.30m、短軸0.26m、深さ0.17mで、平面形は楕円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》埋設土器内部の覆土を3層に、土器本体の掘り方は1層の計4層に分層した。土器内部の覆土には3層とも粒状の炭化物が認められ、土器内底面には径3cmの小礫が1点含まれていた。

《断面形》埋設土器の直径および外反角度より一回り大きい、円形の掘り方である。

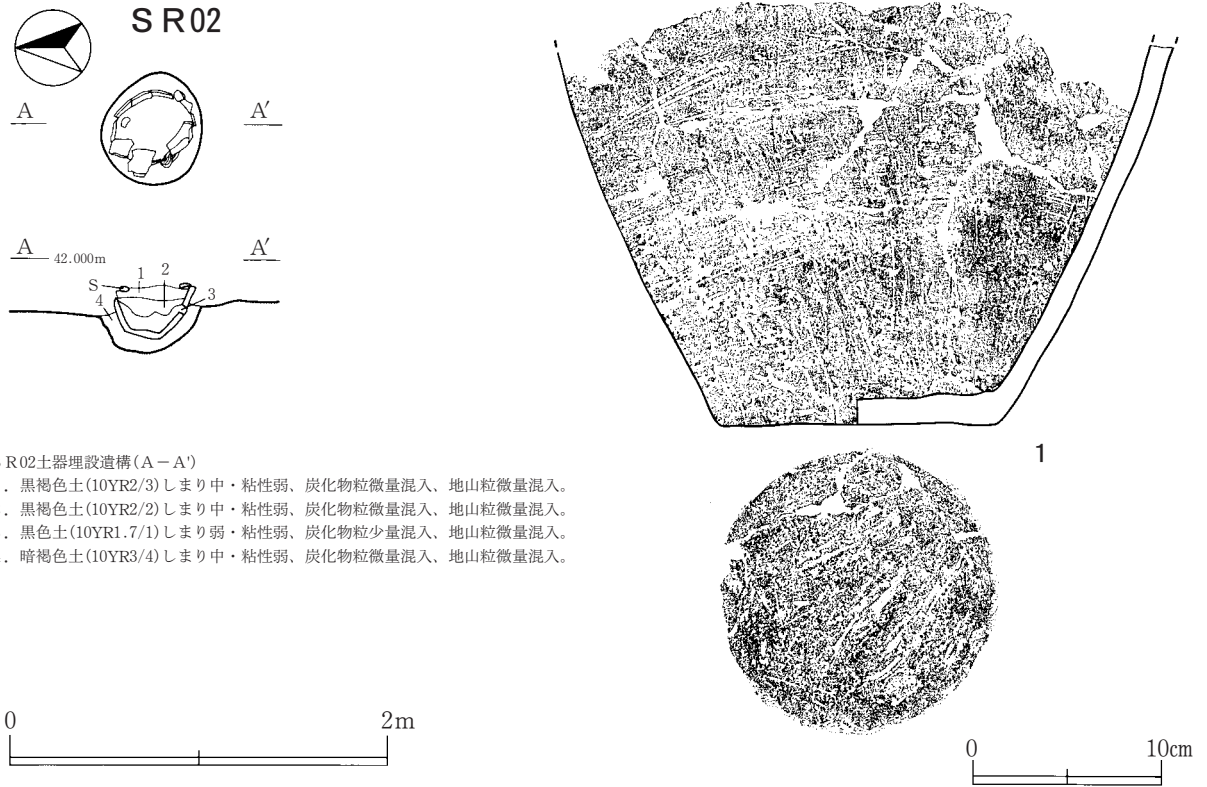
《出土遺物》深鉢形土器の胴部下半から底部にかけての部位が埋設土器(第10図1)として出土した。胴部上半より上は欠損している。外底面・側面ともヘラ状工具で加工された痕跡があり、残存する部位の上端に、僅かながら縄文が見られた。また、土器内面には煤状炭化物が付着している。

《時期》縄文時代の土器埋設遺構であり、埋設状況から墓である可能性が高い。

(3) 陥し穴

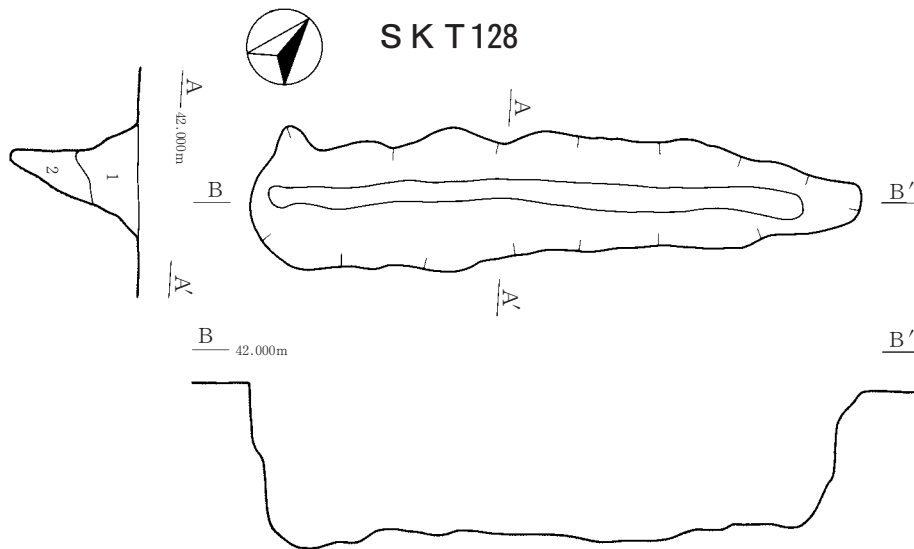
SKT128陥し穴 (第10図、図版3-3)

《位置と確認》調査区北側ほぼ中央のLS59区に位置し、Ⅳ層で確認した。



SR02土器埋設遺構(A-A')

1. 黒褐色土(10YR2/3)しまり中・粘性弱、炭化物粒微量混入、地山粒微量混入。
2. 黒褐色土(10YR2/2)しまり中・粘性弱、炭化物粒微量混入、地山粒微量混入。
3. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性弱、炭化物粒少量混入、地山粒微量混入。
4. 暗褐色土(10YR3/4)しまり中・粘性弱、炭化物粒微量混入、地山粒微量混入。



SKT128陥し穴(A-A')

1. 黒褐色土(10YR2/2)しまり強・粘性弱、地山粒微量混入。
2. 暗褐色土(10YR3/4)しまり強・粘性弱、地山粒少量混入。



第10図 SR02土器埋設遺構・出土土器 SKT128陥し穴

《規模と平面形》規模は長軸3.23m、短軸0.76m、深さ0.87mで平面形は溝状を呈する。軸線方向は、北東－南西である。

《重 複》重複は見られなかった。

《土 層》2層に分層した。底面側の2層には粒状の地山土が少量混入していた。

《断 面 形》ほぼVの字型の断面形を呈し、掘り方の半ばで細くすぼまる。

《底 面》やや凹凸があり平坦ではない。北東側は浅く南西側が深い。

《出 土 遺 物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時 期》遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、規模・形態から縄文時代の陥し穴であると考えられる。

2. 古代(平安時代)～中世の遺構

(1) 竪穴住居跡

S I 01竪穴住居跡 (第11図)

《位 置 と 確 認》調査区中央東側のL Q 50・51、L R 50・51区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸5.14m、短軸3.10m、深さ0.16mで、平面形は長方形を呈する。

《重 複》重複は見られなかった。

《土 層》平成5年の森吉町教育委員会が実施した遺跡範囲確認調査により完掘されていたため精査のみを行った。よって、覆土は残っていなかった。

《壁・床面》壁は四方とも強く立ち上がり、床面は平坦である。

《柱 穴》12基確認した。いずれも直径15～20cm前後で、確認面からの深さは40～55cmである。平面形は概ね円形を呈するが、P1のみ楕円形である。

《時 期》平成5年に森吉町教育委員会が実施した諏訪岱遺跡範囲確認調査(諏訪岱Ⅱ地区)で検出された竪穴住居跡である。当時の確認調査時に掘りあげられており、遺構検出時は雑草が覆っている状態であった。規模・形態から時期は平安時代と考えられる。カマドは確認されず、遺物も出土しなかった。竪穴状遺構である可能性も考えられる。軸線はN-68°-Wである。

S I 113竪穴住居跡 (第12～14図、図版4-1・2、10-6・7、18-1、26-2・3)

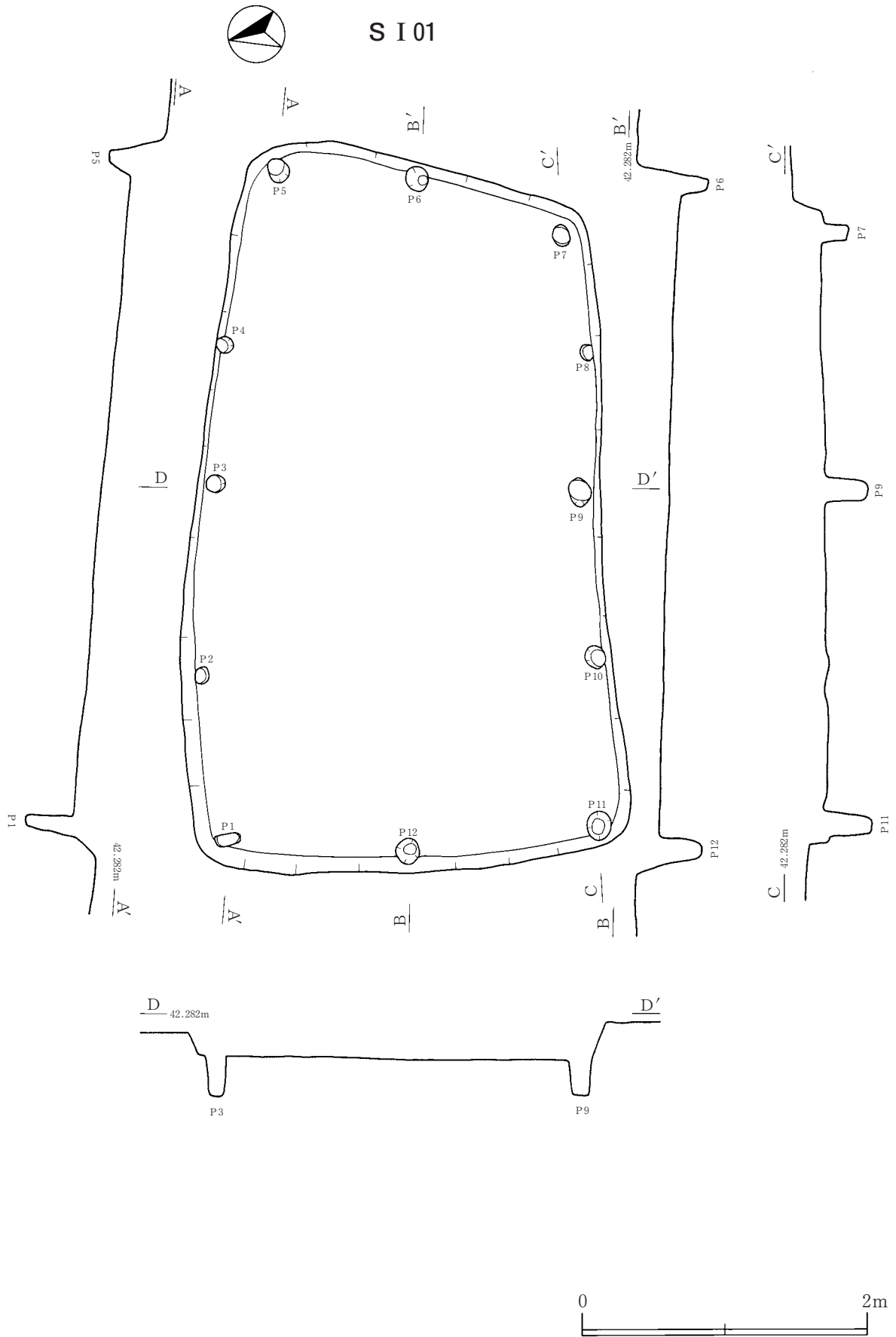
《位 置 と 確 認》調査区南側の中央、MA 42・43、L T 42・43区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸3.30m、短軸3.00mで、平面形は方形を基調とし、北西側に約80cm四方の張り出しと南西側に約30cmの楕円形張り出しを持つ。東壁近くには土坑状のくぼみがある。

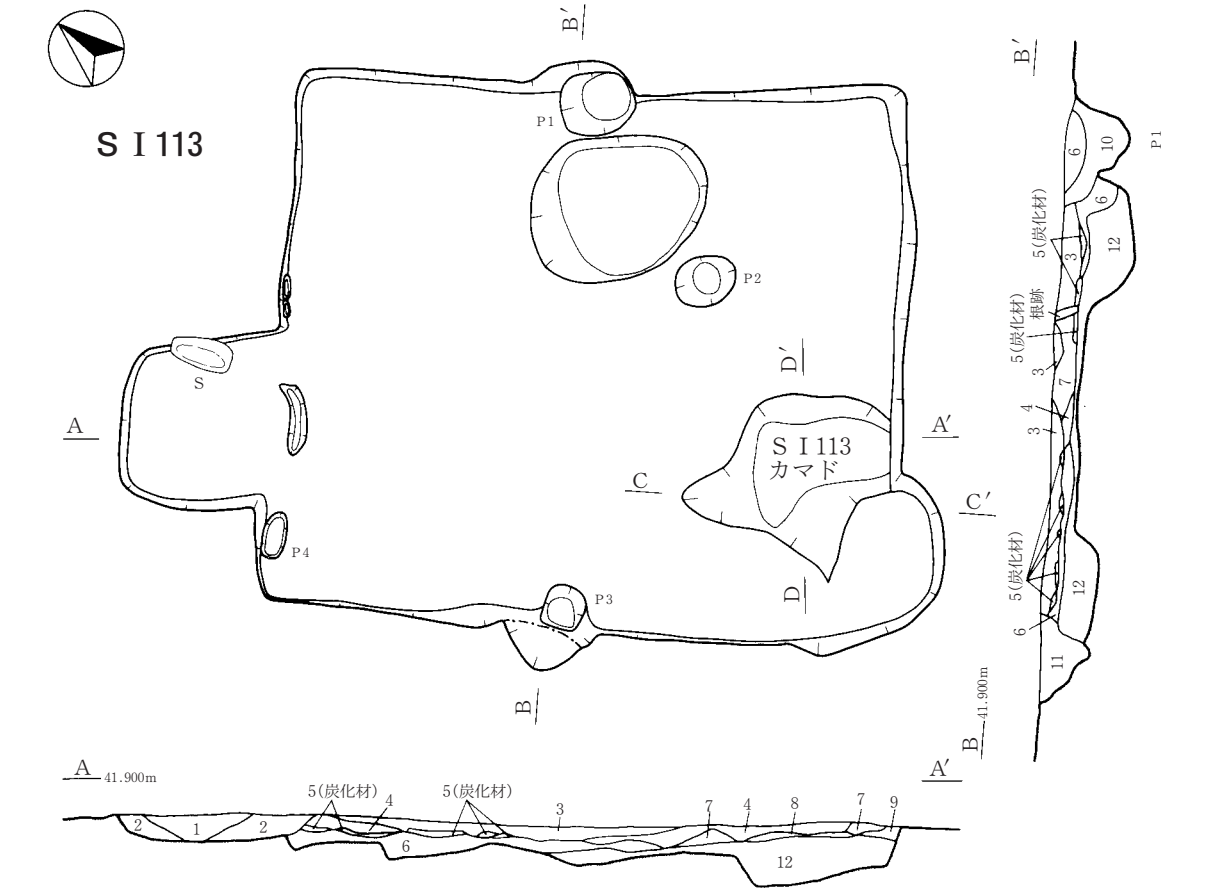
《重 複》重複は見られなかった。東壁に近い土坑状のくぼみは、炭化材よりも層位的に下位にあり、住居構築以前の土坑である可能性がある。しかし、覆土は貼り床の12層と同一であった。

《土 層》12層に分層した。検出した段階から著しい焼土と炭化物が見つかり、掘り下げていくにつれ5層の炭化材(第13図)が一面に確認された。炭化材は住居全体の北西半分分布する。南西側の張り出しにはカマドの焼土粒・ブロックが確認され、最下層の12層は貼り床であった。

《 壁 》遺構確認面からの壁の深さは0.38mである。西側と北西側は緩く立ち上がり、東側と南東側は急に立ち上がる。北西側の張り出しと住居壁の途切れるライン上には幅約10cmの溝が確認された。何らかの区画溝であると考えられる。

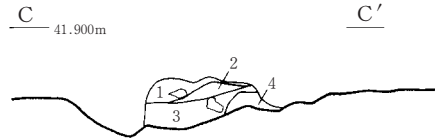


第11図 S I 01 竪穴住居跡



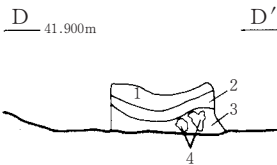
S I 113 竪穴住居跡 (A-A'およびB-B')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり中・粘性中、植物根多量混入。
2. 黒褐色土(10YR2/2)しまり中・粘性中、植物根多量混入。
3. 極暗褐色土(7.5YR2/3)しまり中・粘性中、炭化物少量混入、焼土ブロック微量混入。
4. 暗褐色土(7.5YR3/3)しまり中・粘性中、炭化物多量混入、焼土ブロック少量混入。
5. 黒色土(7.5YR1.7/1)しまり中・粘性中、炭化材。
6. 黒褐色土(7.5YR2/2)しまり弱・粘性中、炭化物・焼土少量混入、地山ブロック多量混入。
- 地山、黄橙色土(10YR7/8)しまり強・粘性中。
7. 褐色土(7.5YR4/6)しまり弱・粘性弱、焼土ブロック多量混入。
8. 赤褐色土(5YR4/8)しまり強・粘性弱、焼土面、炭化物少量混入。
9. 黒褐色土(7.5YR3/1)しまり中・粘性中。
10. 黒色土(7.5YR2/1)しまり弱・粘性中。
11. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、地山ブロック混入。
12. 暗褐色土(10YR3/4)しまり中・粘性中、地山ブロック混入。



S I 113 竪穴住居跡カマド (C-C')

1. 褐色土(7.5YR4/4)しまり中・粘性無し、炭化物粒・焼土粒・地山ブロック含む。
2. 褐色土(7.5YR4/6)しまり強・粘性無し。
3. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性無し、炭化物多量混入。
4. 明黄褐色土(10YR6/8)しまり強・粘性無し。



S I 113 竪穴住居跡カマド (D-D')

1. 褐色土(7.5YR4/4)しまり中・粘性無し、炭化物粒・焼土粒・地山ブロック含む。
2. 褐色土(7.5YR4/6)しまり強・粘性無し、焼土粒少量混入。
3. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性無し、炭化物多量混入。
4. 明黄褐色土(10YR6/8)しまり強・粘性無し。



第12図 S I 113 竪穴住居跡 (1)

S I 113



第13図 S I 113 竪穴住居跡 (2) 炭化材・焼土分布状況

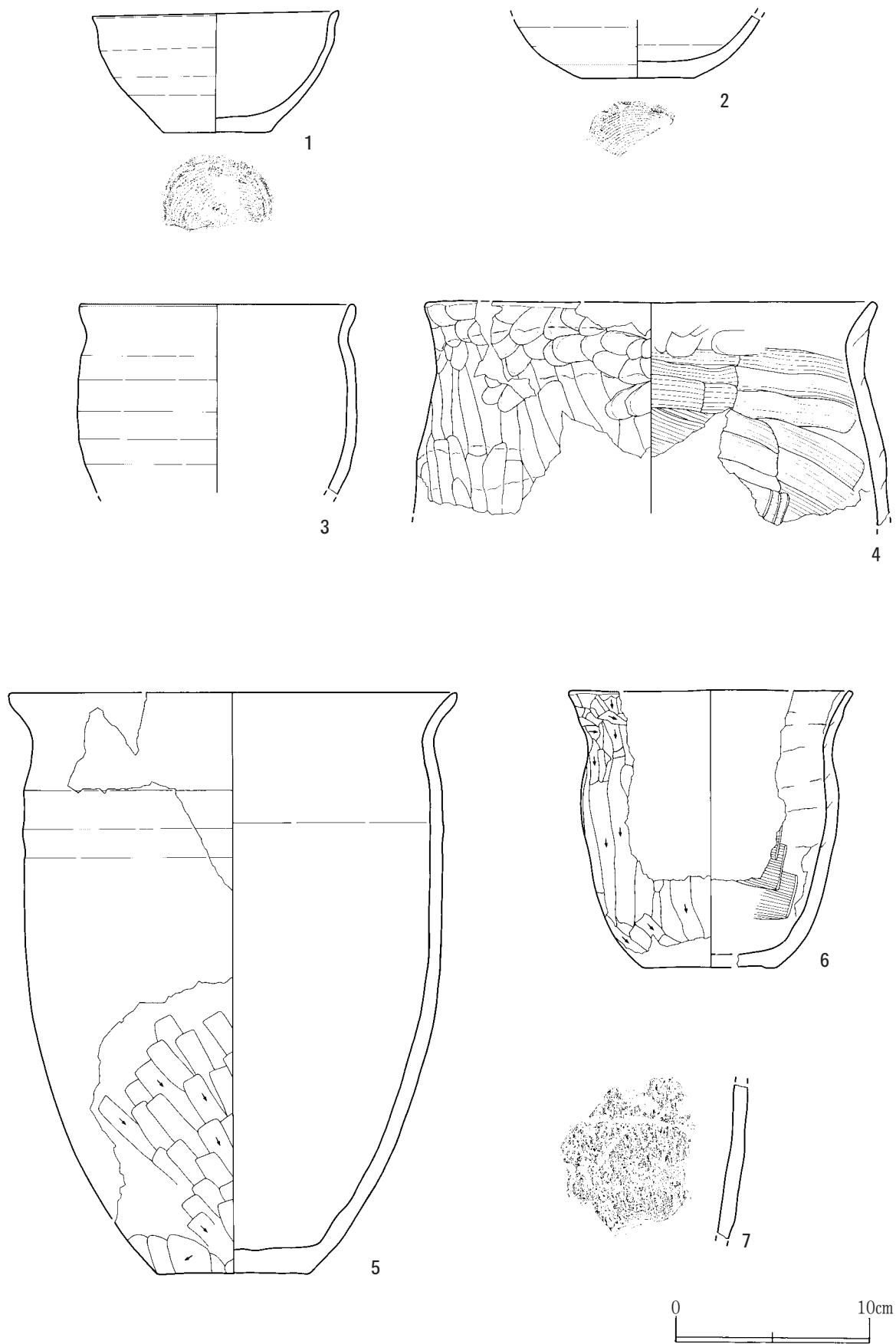
《床 面》北西側が浅く部分的に段差があるのに対し、南東側は深くくぼんでいる。これは住居の北西半分は炭化材が確認されたことと、南東半分には炭化材があまり確認されなかったことと関連があると考えられる。

《柱 穴》柱穴は東西両壁に沿う2基と、土坑状のくぼみの南側に1基の合計3基が住居内に確認された。

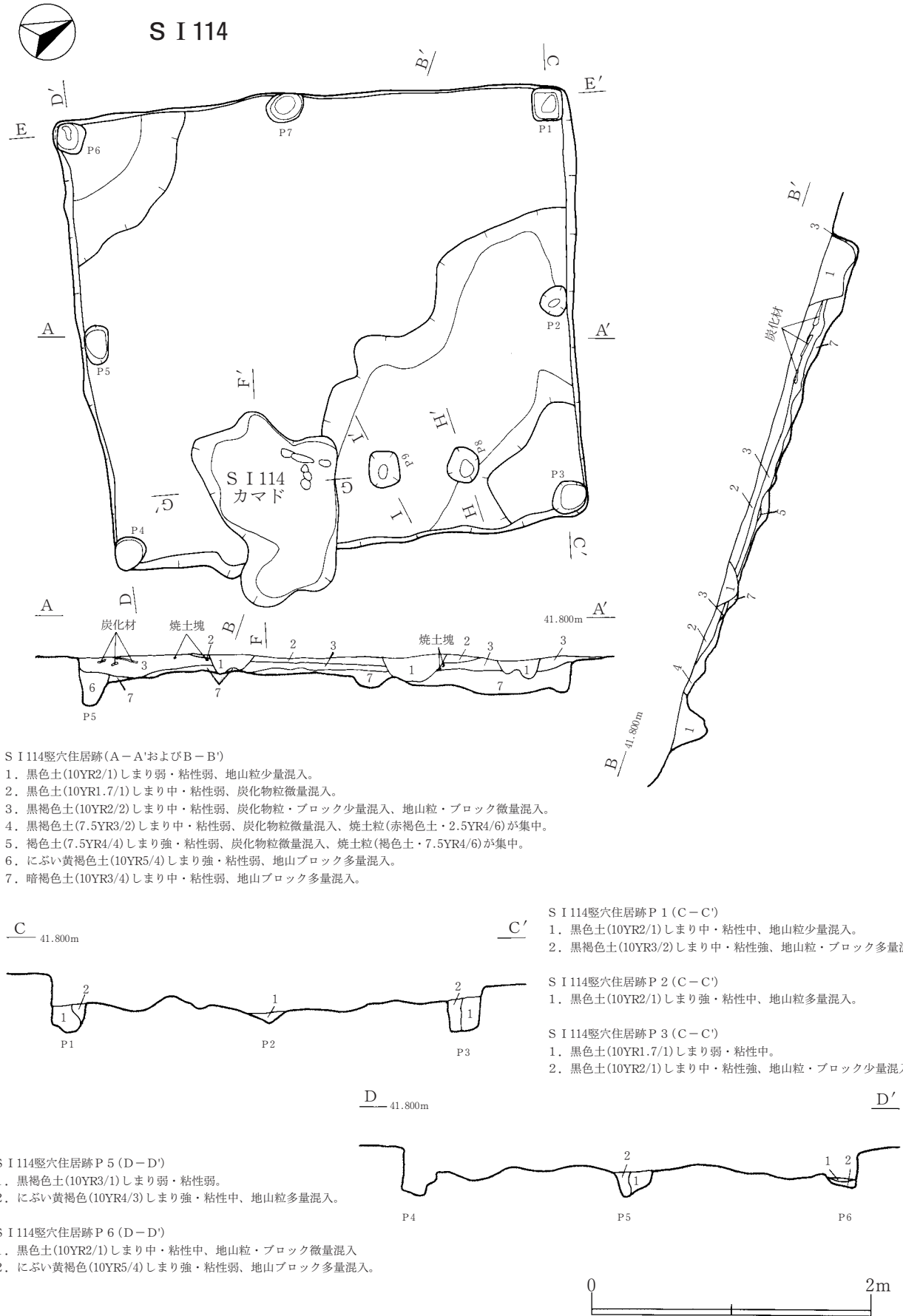
《カ マ ド》南西側の張り出し部分のやや東に、まとまった焼土粒および焼土ブロックが確認され、土師器破片が出土した。土層断面と完掘の結果、この部分が本住居跡のカマドであると判断した。しかし、焚き口や袖部・燃焼部・煙道部などの各部位は明瞭に残っていなかった。覆土は4層に分層した。焼土範囲は張り出し部分の壁までに及び、平面形は楕円形を呈する(第13図)。なお、焼土範囲は炭化材分布と重ならず、住居内での機能の違いがあったと想定される。カマド軸線はN-28°-Wである。

《出 土 遺 物》第14図1~7に示した土師器が出土した。1と2は坏、3~6は甕、7は焼土および炭化物が付着した土師器甕の胴部破片である。いずれも平安時代後半の時期に比定される。

《時 期》本住居跡は、炭化材の分布状況や出土した土師器から、平安時代後半の焼失家屋であると考えられる。住居北西半分に分布する炭化材は、確認した厚さや木目の方向から板材であることが判明した。部分的に柱材が板材の上に重なっている箇所も見られたが、これら板材が覆う部分はおおむね住居の居間部分(板の間)に想定される。板材が分布しない南東半分は土間部分およびカマド位置であると考えられる。住居の軸線はN-32°-Wである。



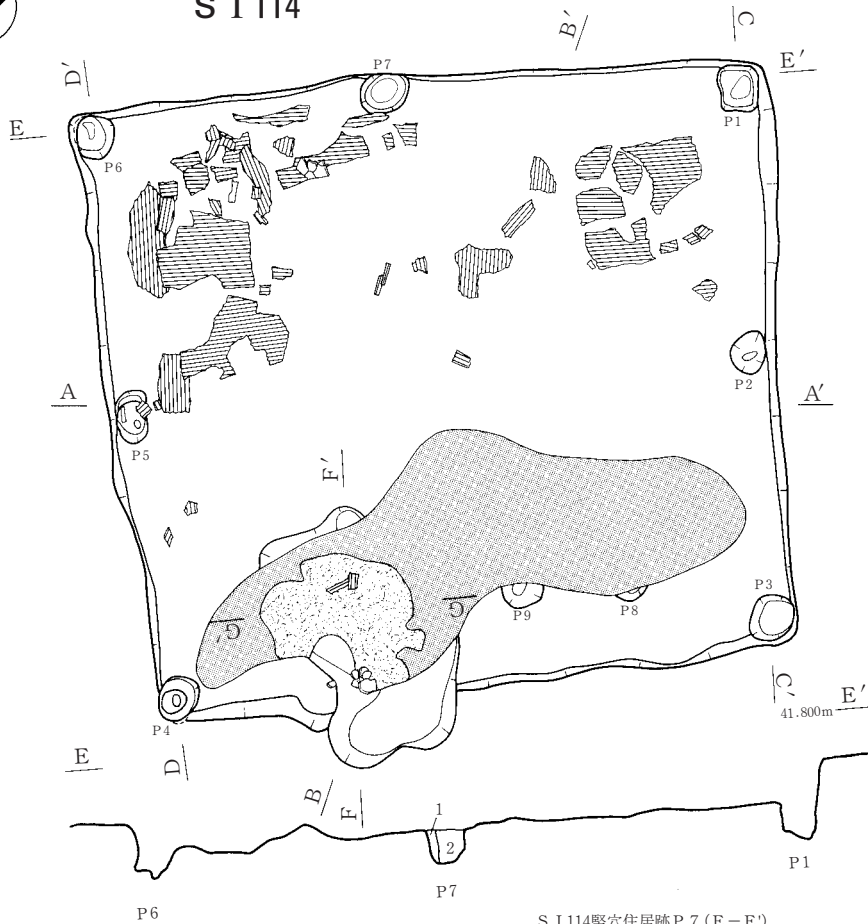
第14図 S I 113出土土器



第15図 S I 114堅穴住居跡 (1)

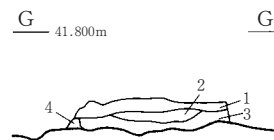
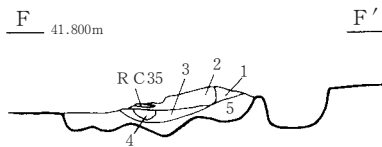


S I 114



S I 114 竪穴住居跡 P 7 (E-E')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性強、地山粒少量混入。
2. 黒褐色土(10YR3/1)しまり中・粘性強、地山ブロック少量混入。



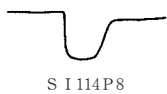
S I 114 竪穴住居跡カマド (F-F')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性無し、焼土粒・ブロック多量混入。
2. 暗赤褐色土(5YR3/6)しまり強・粘性無し、焼土。
3. 橙色土(7.5YR6/8)しまり強・粘性無し。
3. 明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり強・粘性弱。
4. 黒褐色土(2.5YR3/2)しまり強、粘性弱、地山ブロック混入。
5. 明黄褐色土(10YR6/8)しまり強、粘性無し、地山ブロック混入。

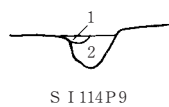
S I 114 竪穴住居跡カマド (G-G')

1. 暗赤褐色土(5YR3/6)しまり強・粘性無し、焼土。
2. 橙色土(7.5YR6/8)しまり強・粘性無し、細かい砂状。
3. 黒色土(10YR2/1)しまり強・粘性無し、炭化物粒微量混入、1・2層ブロック混入。
4. 黒褐色土(10YR3/1)しまり強・粘性無し、焼土粒微量混入。

H 41.800m H'

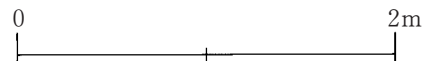


I 41.800m I'

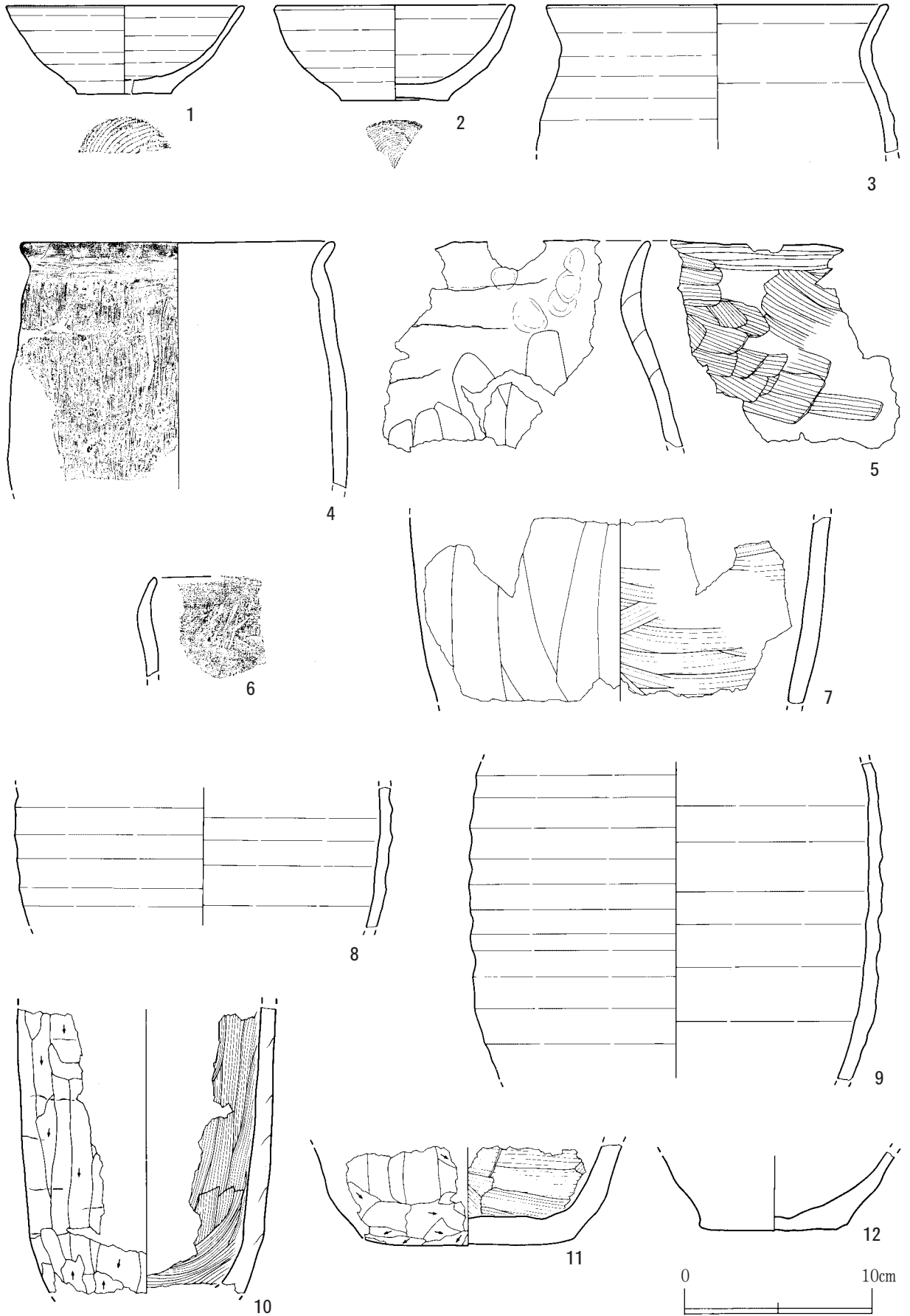


S I 114 竪穴住居跡 P 9 (A-A')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり強・粘性中。
2. 黒褐色土(10YR3/2)しまり強・粘性強、地山粒・地山ブロック多量混入。



第16図 S I 114 竪穴住居跡 (2) 炭化材・焼土分布状況



第17図 S I 114出土土器

S I 114 竪穴住居跡（第15～17図、図版4-3、5-1・2、18-1・2、19-1）

《位置と確認》調査区南側中央のMA38・39、MB38区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸3.68m、短軸3.68mで、平面形は正方形を呈し、カマドが東壁の外に張り出す。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》7層に分層した。検出した段階から焼土と炭化物が見つかり、掘り下げていくにつれ2～3層間で炭化材（第16図）が確認された。炭化材の分布は住居西半であり、東半では僅かな量しか出土しなかった。4・5層には焼土粒が多く含まれ、南東側に位置するカマドを主体として住居東半は広い焼土範囲が認められた。

《壁》遺構確認面からの壁の深さは0.24mで、各壁の長さは東壁3.40m、西壁3.70m、南壁3.20m、北壁3.10mである。四方とも壁はほぼ垂直に立ち上がる。

《床面》おおむね平坦であるが、住居の北東部分（約1/4の面積）と南西コーナーは、一段深く窪んでいる。部分的に欠ける箇所もあるが7層が貼り床と考えられる。

《柱穴》9基確認した。P8・9以外の柱穴7基は住居の壁に沿った場所にあり、壁のコーナーとそのほぼ中間に位置する。これに対し、壁より約40cm内側に位置するP8・9の柱穴2基は、一段深い場所（住居北東部分）にあり、東壁に並行した場所に位置する。

《カマド》東壁中央よりやや南側、略円形を呈するカマドを確認した。畑地の耕作により攪乱を受けていたが、焚き口や袖部・燃焼部は焼土によって著しく赤変した範囲（第16図）であると想定される。カマドの住居東壁外に張り出す部位は、本来存在した煙道部の一部を含むものと考えられるが、明瞭な形では残存していなかった。カマド軸線はN-75°-Wである。

《出土遺物》第17図1～12に示した土師器12点が出土した。1・2は坏、3～6は甕の口縁部および胴部上半の破片、7～10は甕の胴部中央および下半の破片、11・12は甕の底部破片である。いずれも平安時代後半の時期に比定される土師器である。

《時期》本住居跡は、炭化材の分布状況や出土した土師器から、前述のS I 113と同時期（平安時代後半）の焼失家屋であると考えられる。住居の西側半分に分布する炭化材は、厚さや木目の方向から板材であることが判明した。一部柱材が重なっているものの、これらの板材が分布する部分が住居の居間部分（板の間）に想定される。これに対し、炭化材が分布せず焼土範囲の広がりがある東側半分は土間部分およびカマド位置であると考えられる。住居の軸線はN-15°-Eである。

S I 115 竪穴住居跡（第18・19図、図版5-3・4、10-8、19-2）

《位置と確認》調査区南側西寄りのMD40・41、ME40・41区に位置し、Ⅲ層で確認した。

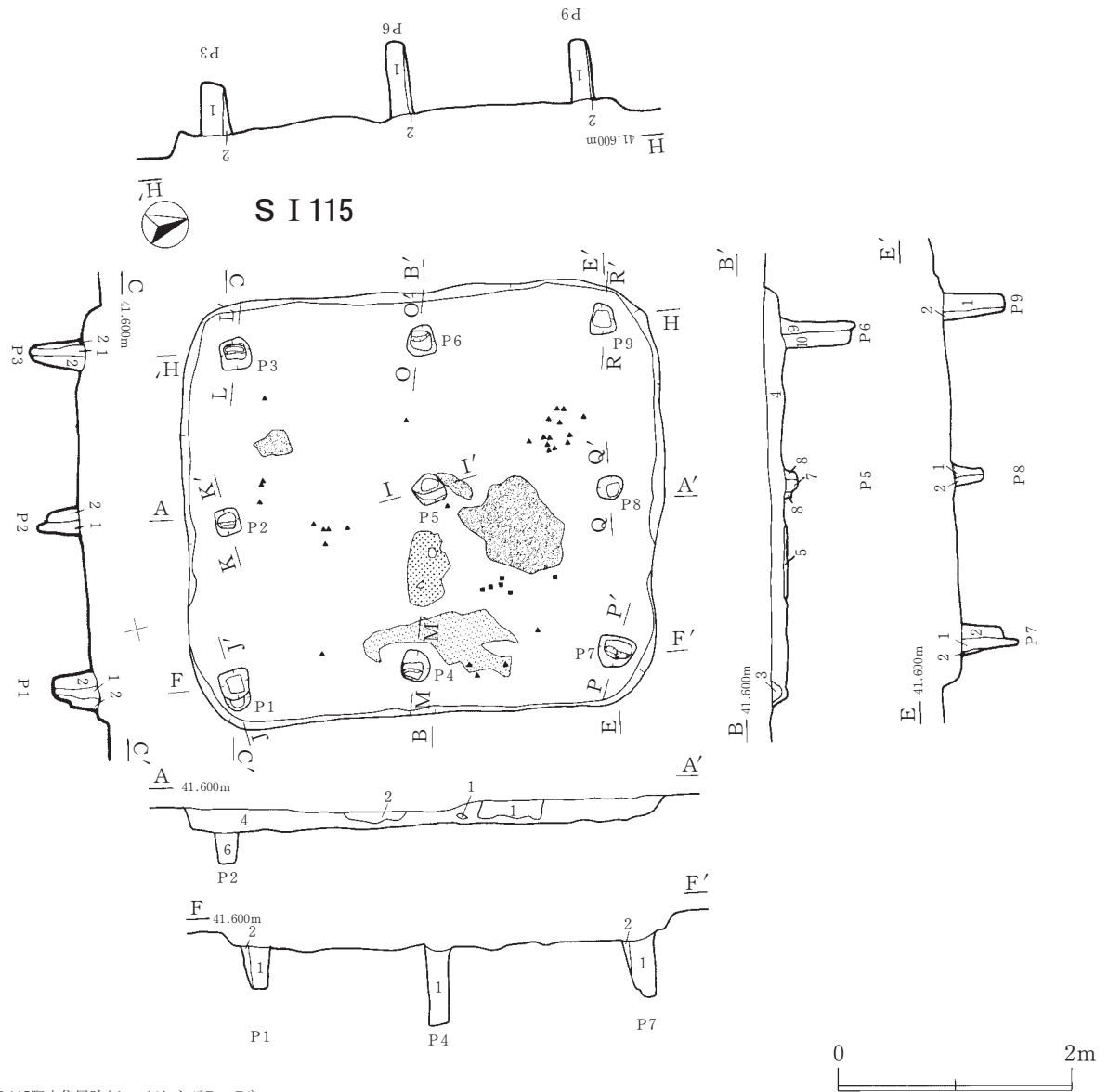
《規模と平面形》規模は長軸4.10m、短軸3.64mで、平面形は隅丸方形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》10層に分層した。主体となる覆土は4層で、5層は炭化物範囲である。

《壁》遺構確認面からの壁の深さは深さ0.20mである。畑地の耕作による削平が著しいが、壁は四方とも緩やかに立ち上がる。

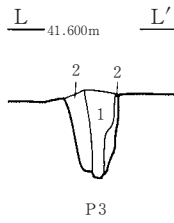
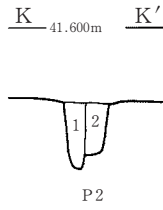
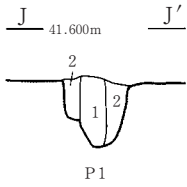
《床面》住居中央に向かって緩くくぼんでいるが、おおむね平坦な床面である。この床面上に炭化範囲1箇所、焼土3箇所、砂質土の範囲1箇所を確認した。



S I 115 竪穴住居跡 (A-A' および B-B')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、炭化物粒微量混入・焼土(5YR3/2)多量に混入、地山粒・ブロック少量混入。
2. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、炭化物粒少量混入、地山粒・ブロック多量混入。
3. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、炭化物粒少量混入、地山ブロックまだらに多量混入。
4. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、炭化物粒少量混入、地山粒・ブロック少量混入。
5. 炭化物の層
6. にぶい黄橙色土(10YR6/4)しまり中・粘性弱、砂質土。
7. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
8. 明黄褐色土(10YR6/6)しまり弱(非常に脆い)・粘性弱、黒色土(10YR2/1)まだらに混入、地山。
9. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
10. にぶい黄橙色土(10YR6/4)しまり中・粘性弱、砂質土、にぶい黄橙色土(10YR6/4)まだらに混入。

第18図 S I 115 竪穴住居跡 (1)



S I 115 竪穴住居跡 P 1 (J-J')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入。
2. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、にぶい黄橙色土(10YR6/4)・地山少量混入。

S I 115 竪穴住居跡 P 2 (K-K')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
2. にぶい黄橙色土(10YR6/4)しまり弱・粘性弱、砂質土。

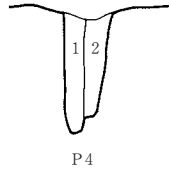
S I 115 竪穴住居跡 P 3 (L-L')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
2. にぶい黄橙色土(10YR6/4)しまり弱・粘性弱、砂質土、にぶい黄褐色土(10YR4/3)少量混入。



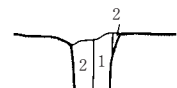
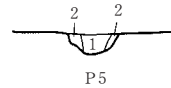
S I 115 竪穴住居跡 P 4 (M-M')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
2. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、にぶい黄橙色土(10YR6/4)・地山少量混入。



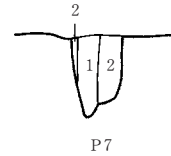
S I 115 竪穴住居跡 P 5 (I-I')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
2. 明黄褐色土(10YR6/6)しまり弱・粘性弱、黒色土(10YR2/1)少量混入。



S I 115 竪穴住居跡 P 6 (O-O')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
2. にぶい黄橙色土(10YR6/4)しまり中・粘性弱、砂質土、にぶい黄褐色土(10YR4/3)少量混入。



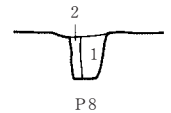
S I 115 竪穴住居跡 P 7 (P-P')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
2. にぶい黄橙色土(10YR6/4)しまり中・粘性弱、砂質土、地山土少量混入。



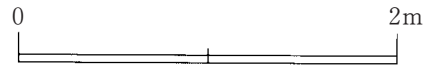
S I 115 竪穴住居跡 P 8 (Q-Q')

1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
2. にぶい黄橙色土(10YR6/4)しまり弱・粘性弱、にぶい黄褐色土(10YR4/3)少量混入。

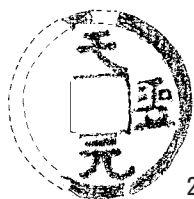


S I 115 竪穴住居跡 P 9 (R-R')

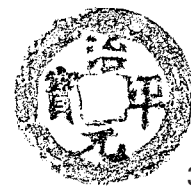
1. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性中、炭化物粒微量混入、地山粒・ブロック多量混入。
2. にぶい黄橙色土(10YR6/4)しまり弱・粘性弱、黒色土(10YR2/1)・地山少量混入。



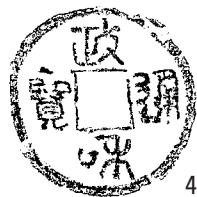
天聖元寶 (北宋)



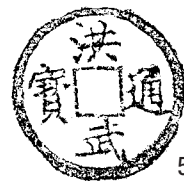
天聖元寶 (北宋)



治平元寶 (北宋)



政和通寶 (北宋)



洪武通寶 (明)



第19図 S I 115 竪穴住居跡 (2)

《柱 穴》住居内部に総柱的な配置を9基確認した。四方の住居壁から約20～30cm離れた位置に、ほぼ等間隔に並行して配置されていた。

《カマド・炉》袖部等のカマド構築物は確認されなかったが、P2－P3間に狭い焼土範囲が、P5－P8間にやや広い焼土範囲が見つかった。このP5－P8間の焼土範囲に隣接して、P4－P5間には長楕円形の炭化物集中範囲が確認された。この炭化物を分析した結果、断面図B－B'線より北側はコナラ（小楮）と麻、同南側は大角豆（豇豆）属の近似種であることが判明した。

《出土遺物》住居床面から銭貨5点が出土した。内訳は天聖元寶〔北宋、1023（天聖元）年初鑄、仁宗〕2点、治平元寶〔北宋、1064（治平元）年初鑄、英宗〕1点、政和通寶〔北宋、1111（政和元）年初鑄、徽宗〕1点、洪武通寶〔明、1368（洪武元）年初鑄、洪武帝〕1点である。しかし、粗製であることから模鑄銭の可能性もある。土器・石器等の遺物は出土していない。

《時期》出土した銭貨の中に洪武通寶（明銭）が含まれることから、南北朝・室町時代以降の竪穴住居跡であると考えられる。竪穴状遺構である可能性も考慮されたが、床面の中央東寄りに炭化物集中範囲が確認されたこと、3箇所焼土範囲が存在したことや、炭化物の分析結果が燃焼材（コナラ）と食用の豆類（大角豆属近似種）であったことから、炭化物集中範囲をカマドと捉え、本遺構を竪穴住居跡と判断した。住居の主軸はN－11°－Eである。

S I 116竪穴住居跡（第20～22図、図版6－1・2）

《位置と確認》調査区中央やや西側のMC54・55・56、MD54・55・56区に位置し、IV層で確認した。住居の西側部分は調査区外である。

《規模と平面形》規模は長軸5.99m、短軸2.96mで、平面形は長方形を呈するものと推定される。

《重複》北側の床面にあるP23が入る方形の土坑（直径約1m）と重複する。土坑は本住居跡を切っており、住居廃棄後に掘り込まれた、より新しい時期のものである。

《土層》3層に分層した。1・2層は自然堆積土で、3層が貼床を含む住居内覆土である。

《壁》遺構確認面からの壁の深さは0.26mで、長さは東壁5.84m、西壁5.78m、北壁（確認部分）2.06m、南壁（確認部分）2.24mである。

《床面》ほぼ平坦である。

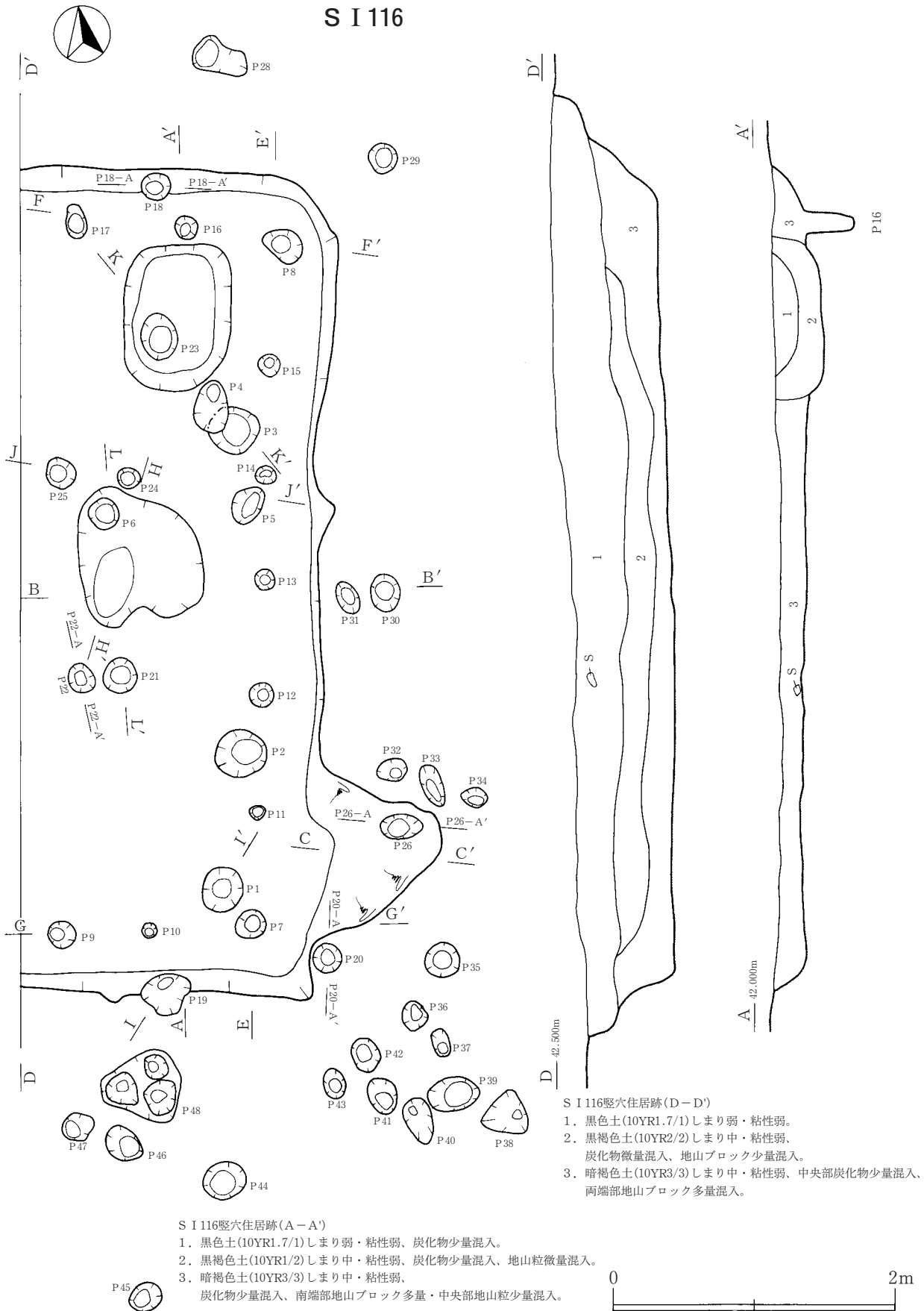
《柱 穴》住居の内外で48基確認した。このうちP9・10・7・1・11・2・12・5・3・15・8・16・17の13基は住居の壁下をほぼ等間隔に巡っており、壁面を支える柱穴と推定される。また壁の立ち上がり面にあるP18（北壁面）・19（南壁面）の2基も対応する関係にあるものと思われる。

《カマド》住居のほぼ中央に直径約1m、深さ0.25mの掘り込み（P6を含む）が確認された。この覆土中には炭化物・焼土が含まれ、小礫十数点と種子状炭化物1点が出土した。この部分はカマドと推定される。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》土器や石器等の出土遺物がないため詳細な時期は不明である。カマドに推定される掘り込みから出土した種子状炭化物を、樹種同定および放射性炭素年代測定したところ、樹種はクリ（栗）であることが判明し、暦年代範囲は西暦1040年－1100年という較正結果が出た。この結果に基づき、本遺構は平安時代後半の住居跡であると考えられる。住居の主軸はN－7°－Eである。

S I 116



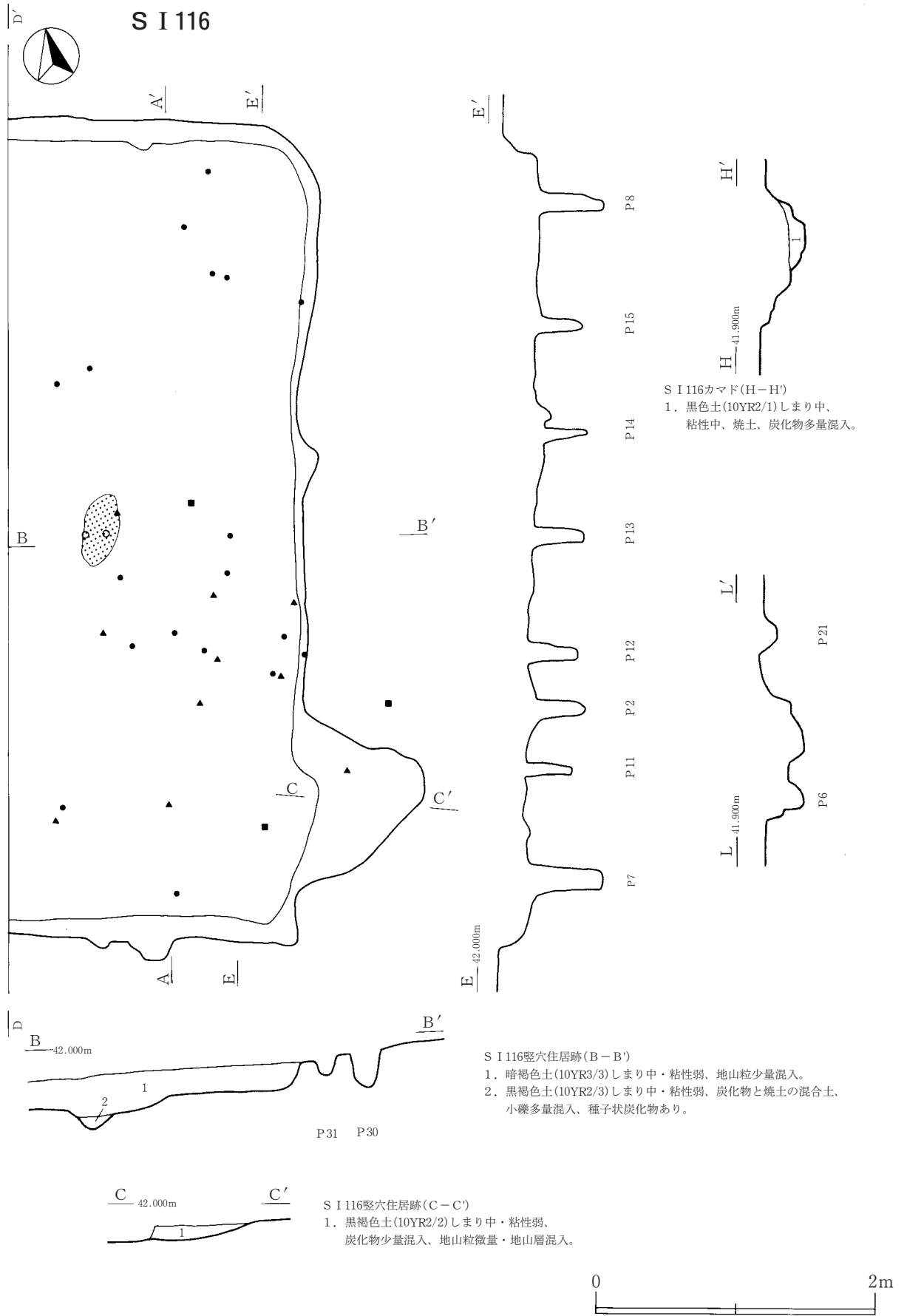
S I 116竪穴住居跡(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性弱、炭化物少量混入。
2. 黒褐色土(10YR1/2)しまり中・粘性弱、炭化物少量混入、地山粒微量混入。
3. 暗褐色土(10YR3/3)しまり中・粘性弱、炭化物少量混入、南端部地山ブロック多量・中央部地山粒少量混入。

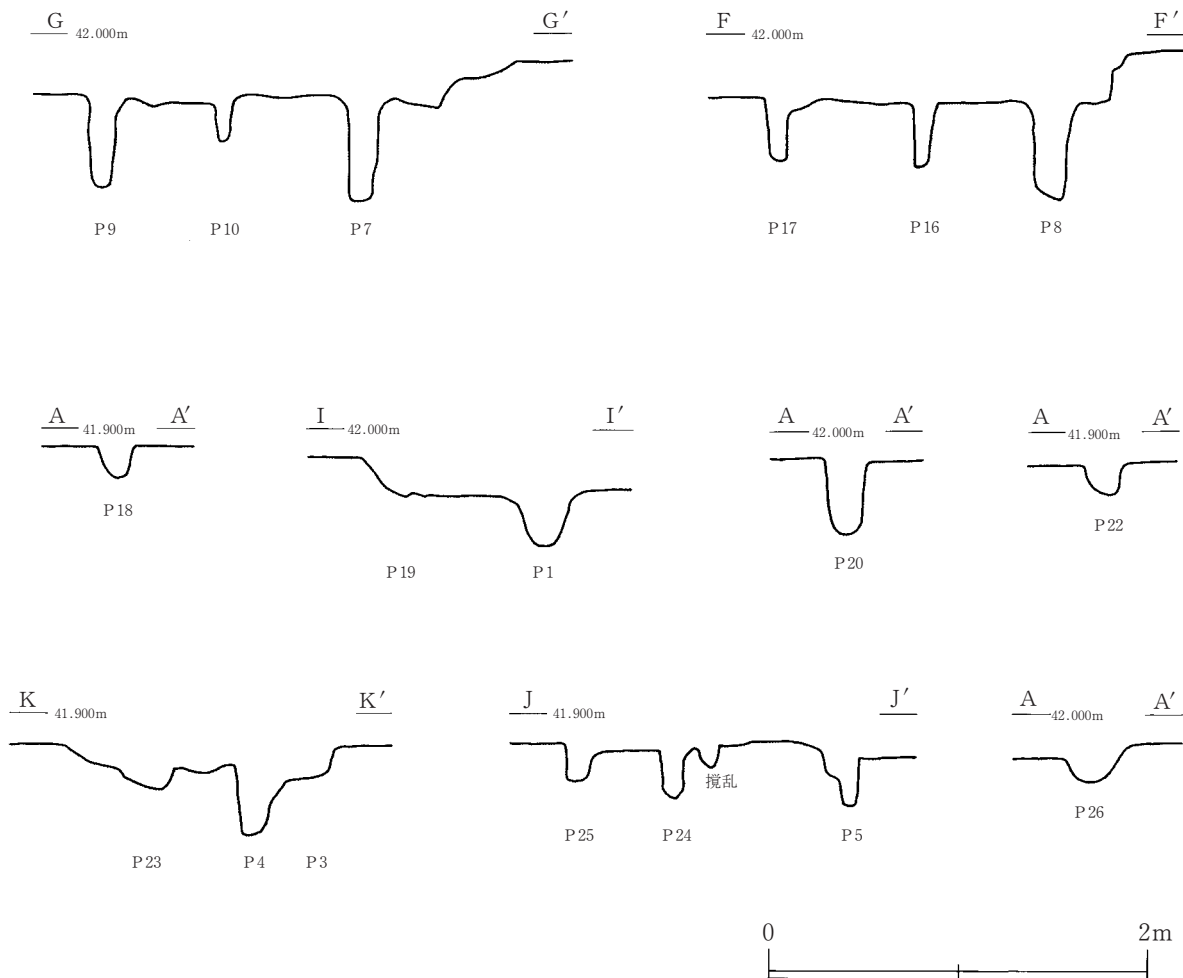
S I 116竪穴住居跡(D-D')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性弱。
2. 黒褐色土(10YR2/2)しまり中・粘性弱、炭化物微量混入、地山ブロック少量混入。
3. 暗褐色土(10YR3/3)しまり中・粘性弱、中央部炭化物少量混入、両端部地山ブロック多量混入。

第20図 S I 116竪穴住居跡(1)



第21図 S I 116竪穴住居跡 (2)



第22図 S I 116 竪穴住居跡 (3)

S I 122 竪穴住居跡 (第23図、図版6-3、7-1)

《位置と確認》調査区中央やや西側、MB48・49、MC48・49区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸2.71m、短軸2.54mで、平面形は胴張りのある方形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》5層に分層した。主体となる覆土は2層で、1～3層には炭化物が含まれる。南西壁に近い2層中から大型の礫が1点確認された。

《壁》遺構確認面からの壁の深さは0.27mである。壁は四方ともほぼ垂直に立ち上がる。

《床面》床面はほぼ平坦である。確認面からの深さは北東より南西が、南東より北西が深い。

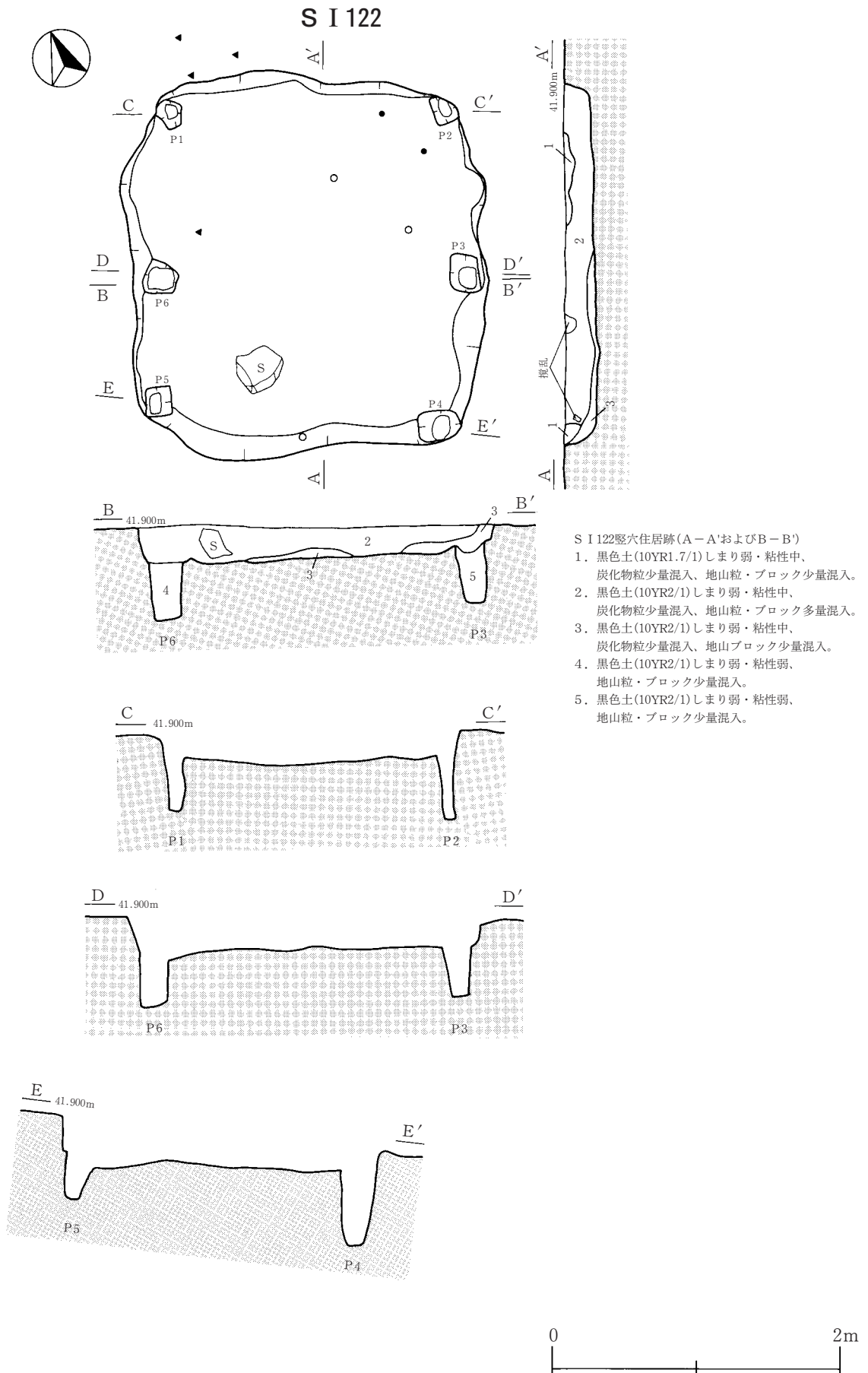
《柱穴》6基確認した。すべて壁際または壁の立ち上がり面に位置する。確認面からの深さは0.45～0.65mで平面形は方形を呈する。北東壁と南西壁には中間の柱穴がない。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。規模・形態から古代～中世の竪穴住居跡と考えられる。住居の軸線はN-18°-Eである。

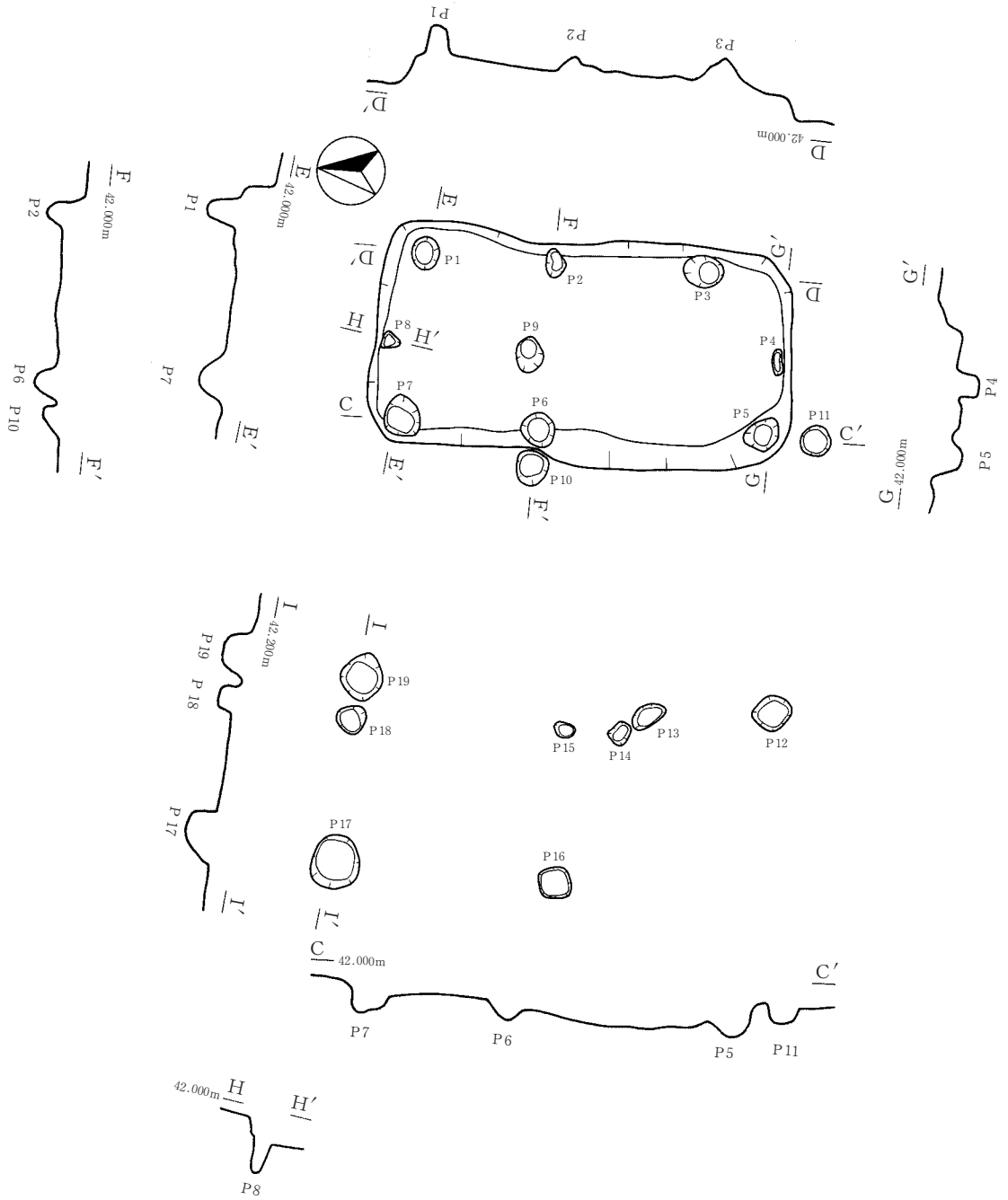
S I 125 竪穴住居跡 (第24・25図、図版7-2・3)

《位置と確認》調査区中央のMA50・51、LT50・51区に位置し、Ⅳ層で確認した。



第23図 S I 122 竪穴住居跡

S I 125



第25図 S I 125 竪穴住居跡 (2)

(2) 土坑

SK04土坑 (第26図、図版8-1)

《位置と確認》調査区北端のMA62区に位置し、Ⅲ層で確認した。本遺跡で最も北側にある遺構である。北端の崖に近い、緩い斜面上にある。

《規模と平面形》規模は長軸1.08m、短軸0.88m、深さ0.65mで、平面形は不整な楕円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》3層に分層した。3層は砂質土の地山粒およびブロックを多く含む。

《断面形・床面》底面は平坦であるが、掘り方の半ばまで緩く立ち上がり、遺構確認面に近くなると垂直に近い立ち上がりである。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。

SK05土坑 (第26図、図版8-2)

《位置と確認》調査区中央MB50・51、MC50・51区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸2.10m、短軸2.10m、深さ0.16mで、平面形は円形を呈するが南側に方形の張り出しを持つ。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》3層に分層した。各層とも後世の攪乱を受けている。

《断面形・床面》南側の張り出し部分が緩く立ち上がるほかは、ほぼ垂直な立ち上がりである。底面は凹凸があり平坦ではない。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代(平安時代)の土坑と考えられる。

SK102土坑 (第26図、図版8-5)

《位置と確認》調査区南東のLQ38・39区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.88m、短軸0.87m、深さ0.20mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》2層に分層した。覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・床面》北側が緩く南側は急に立ち上がる。床面は北側から南側に緩く傾斜していた。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》調査区南東で検出した9基の土坑群の中の1基である。出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代(平安時代)の土坑と考えられる。

SK103土坑 (第26図、図版8-6)

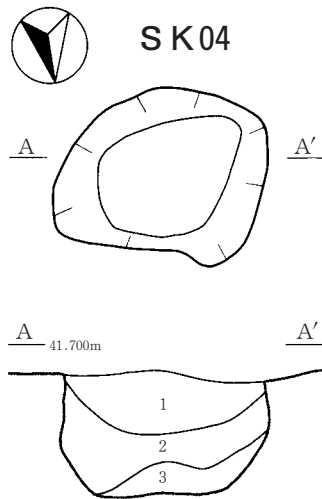
《位置と確認》調査区南東のLP39、LQ39区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.36m、短軸1.22m、深さ0.42mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

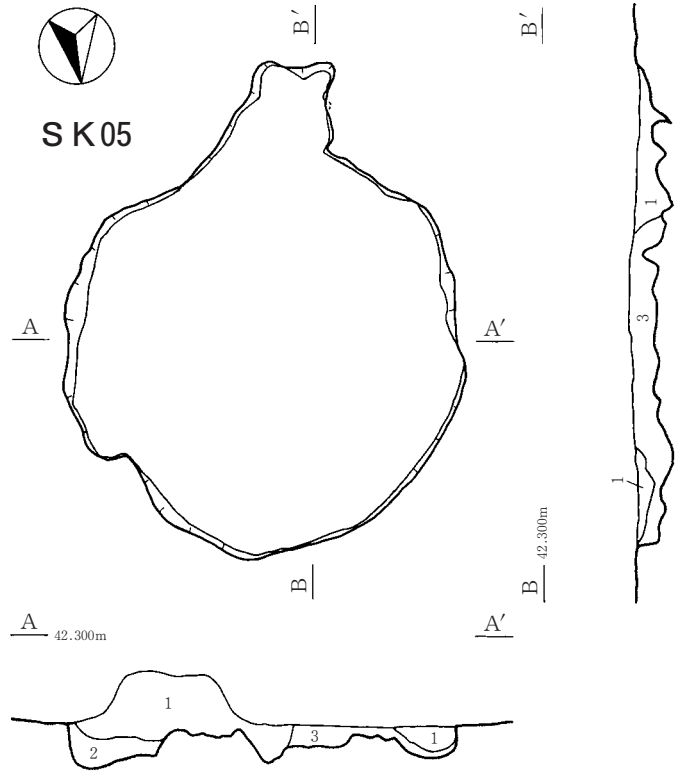
《土層》3層に分層した。覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・床面》南北両側とも緩く立ち上がる。底面は平坦である。



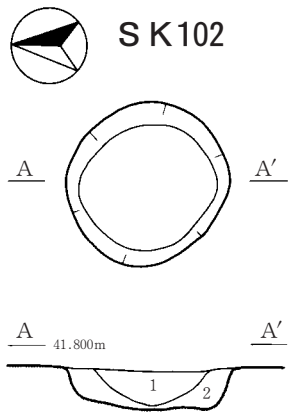
SK04土坑(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり中・粘性弱、地山ブロック小混入。
2. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性中。
3. 暗褐色土(10YR3/4)しまり中・粘性弱、砂質状地山ブロック混入。



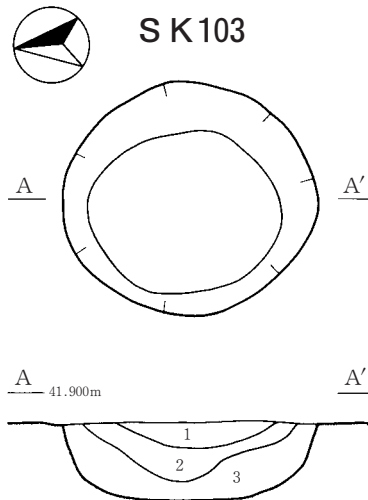
SK05土坑(A-A'およびB-B')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり中・粘性弱、地山ブロック多数見られる。
2. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性弱。
3. 黒褐色土(2.5YR3/2)しまり強・粘性弱、地山粒微量混入。



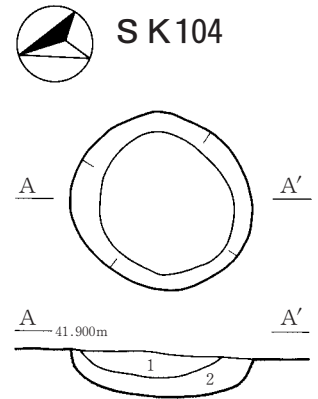
SK102土坑(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり中・粘性中、地山ブロック微量混入。
2. 黒褐色土(10YR2/2)しまり中・粘性中、地山ブロック少量混入。



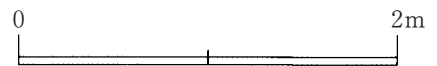
SK103土坑(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性中、地山ブロック微量混入。
2. 黒褐色土(10YR2/2)しまり中・粘性中、地山ブロック微量混入。
3. 黒褐色土(10YR3/1)しまり中・粘性中。



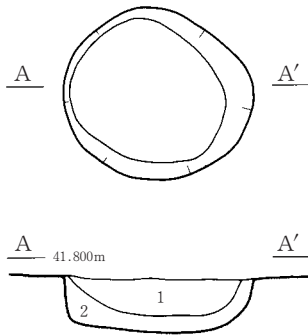
SK104土坑(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり中・粘性中、地山粒微量混入。
2. 黒色土(10YR2/1)しまり中・粘性中、地山粒微量混入。




第26図 SK04・05・102・103・104土坑

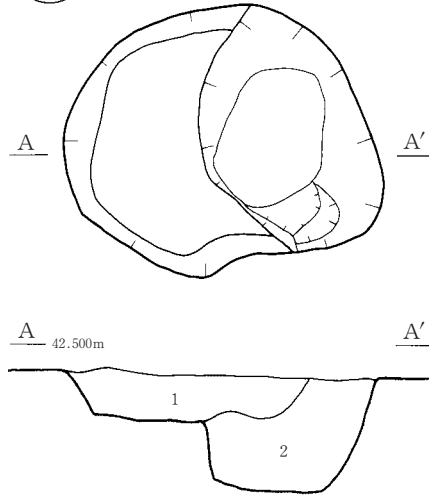
 SK105



SK105土坑(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性中、地山粒微量混入。
2. 黒褐色土(10YR2/2)しまり中・粘性中、地山粒微量混入。

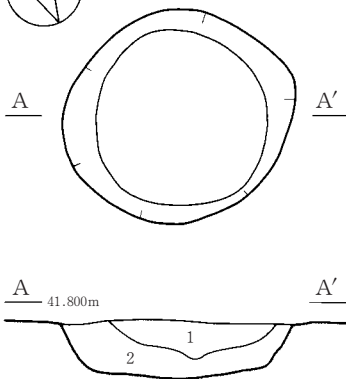
 SK106



SK106土坑(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり中・粘性中、地山粒微量混入。
2. 黒褐色土(10YR2/2)しまり強・粘性中、地山粒微量混入、倒木痕である。

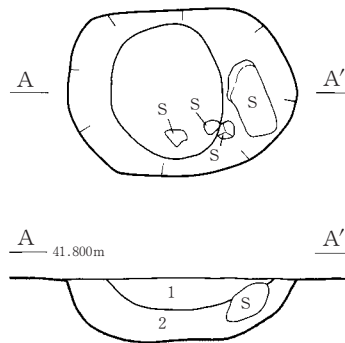
 SK107



SK107土坑(A-A')

1. 黒褐色土(10YR2/2)しまり中・粘性中、地山ブロック少量混入。
2. 黒色土(10YR1.7/1)しまり中・粘性中、地山粒微量混入。

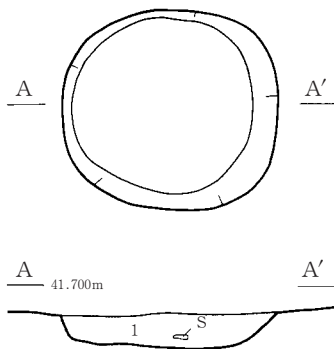
 SK108




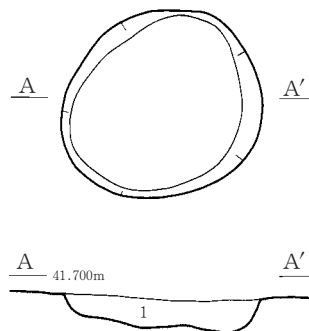
SK108土坑(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性弱。
2. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、炭化物ブロック・炭化粒微量混入。

 SK110



 SK111

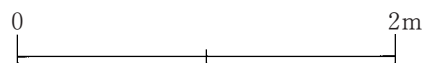


SK110土坑(A-A')

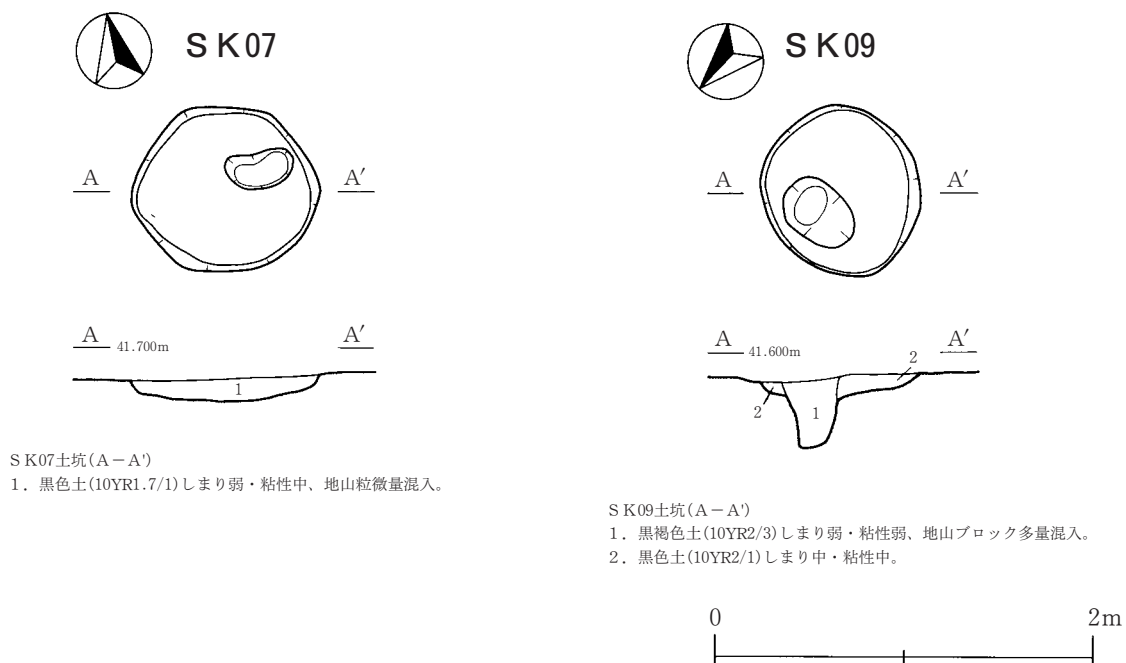
1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性中、地山粒微量混入。

SK111土坑(A-A')

1. 黒色土(10YR1.7/1)しまり弱・粘性中、地山粒微量混入。



第27図 SK105・106・107・108・110・111土坑



第28図 SK07・09土坑

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》調査区南東で検出した9基の土坑群の内の1基である。出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代(平安時代)の土坑と考えられる。

SK104土坑(第26図、図版8-7)

《位置と確認》調査区南東のLQ41区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.36m、短軸0.93m、深さ0.24mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》2層に分層した。覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・床面》北東側・南西側とも緩く立ち上がる。底面は浅鉢状である。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》調査区南東で検出した9基の土坑群の内の1基である。出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代(平安時代)の土坑と考えられる。

SK105土坑(第27図、図版8-8)

《位置と確認》調査区南東のLQ41区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.01m、短軸0.91m、深さ0.28mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》2層に分層した。覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・床面》北東側は急に立ち上がり、南西側はやや緩く立ち上がる。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》調査区南東で検出した9基の土坑群の内の1基である。出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代(平安時代)の土坑と考えられる。

SK106土坑（第27図、図版9-1）

《位置と確認》調査区北東のLQ54区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.45m、短軸1.30m（推定値）、深さ0.12m（推定値）で、平面形は楕円形を呈する。

《重複》本土坑が倒木痕を切っており、新しい。

《土層》2層に分層した。浅い1層が土坑の覆土、深さのある2層は倒木痕である。

《断面形・床面》土坑の覆土は北東側・切り合い部分ともに緩く立ち上がる。底面は平坦であるが、倒木痕との切り合い部分は波打っている。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。

SK107土坑（第27図、図版9-2）

《位置と確認》調査区南東のLQ42区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.26m、短軸1.11m、深さ0.30mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》2層に分層した。覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・床面》南北両側とも緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》調査区南東で検出した9基の土坑群の中の1基である。出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の土坑と考えられる。

SK108土坑（第27図、図版9-3）

《位置と確認》調査区南東のLR42区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.22m、短軸0.87m、深さ0.34mで、平面形は楕円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》2層に分層した。覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・床面》北西側・南東側とも緩く立ち上がる。底面は浅鉢状である。

《出土遺物》遺物は出土しなかったが、自然の小礫3点と大型の礫1点が覆土中に確認された。

《時期》調査区南東で検出した9基の土坑群の中の1基である。出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の土坑と考えられる。

SK110土坑（第27図、図版9-4）

《位置と確認》調査区南東のLS41・42、LT41・42区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.14m、短軸1.14m、深さ0.19mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》単層であった。

《断面形・床面》北側は緩く立ち上がり、南側は急に立ち上がる。底面は北側に緩く傾斜する。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。自然の小礫1点が覆土中に確認された。

《時期》調査区南東で検出した9基の土坑群の中の1基である。出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の土坑と考えられる。

SK111土坑（第27図、図版9－5）

《位置と確認》調査区南東のLS42、LT42区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.10m、短軸1.10m、深さ0.18mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》単層であった。

《断面形・床面》東西両側とも緩く立ち上がる。底面は東側に緩く傾斜する。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》調査区南東で検出した9基の土坑群の中の1基である。出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の土坑と考えられる。

SK07土坑（第28図、図版8－3）

《位置と確認》調査区南側西寄りのMD44・45区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.00m、短軸0.86m、深さ0.12mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》単層であった。

《断面形・底面》東西両側とも浅く緩い立ち上がりで、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の土坑と考えられる。

SK09土坑（第28図、図版8－4）

《位置と確認》調査区南側西寄りのMD44・45、ME44・45区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.90m、短軸0.82m、深さ0.10mで、平面形は円形を呈する。

《重複》径0.40mの柱穴様ピットに切られている。

《土層》2層に分層した。

《断面形・底面》北東・南西両側とも浅く緩い立ち上がりで、底面は北側が僅かにくぼむ。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の土坑と考えられる。

（3）焼土遺構**SN117焼土遺構**（第29図、図版9－6）

《位置と確認》調査区中央から南寄りのMB43区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.92m、短軸0.87m、深さ0.29mで、平面形は楕円形を呈する。

《土層》6層に分層した。1・2層が焼土層になっており、特に2層は多量の焼土が含まれている。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、北側が深く南側はやや浅い。壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》平安時代後半に比定される土師器片が出土し、長方形で箱形の泥岩1点を確認した。この泥岩は焼土面である1層より深く覆土に設置されており、遺構内で何らかの区画を意図した「仕

切り」の役割があったと考えられる。

《時期》出土した土師器から平安時代後半の焼土遺構であると考えられる。遺構の軸線方向はN-30°-Eである。隣接するS I 118同時期の遺構であると考えられる。

S N118焼土遺構（第29図、図版9-7）

《位置と確認》調査区中央から南寄りのMB43・44区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸2.58m、短軸0.88m、深さ0.22mで、平面形は不整な楕円形を呈する。

《土層》4層に分層した。1・2層が焼土面となっており、特に2層は焼土ブロック土を多く含みリング状の平面形を呈する。

《壁・底面》底面はほぼ平坦で、南側が北側より僅かながら浅い。壁は緩やかに立ち上がる。

前述のS N117と隣接する場所で検出した、規模・形態ともに類似する焼土遺構である。軸線方向もN-22°-Eであり、おおむね同じような方向を示す。周辺から土師器片が出土しており、S I 113にも近接していることから、平安時代の遺構であると考えられる。

S N119焼土遺構（第29図、図版9-8）

《位置と確認》調査区南側西部のL Q44・L R44区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.79m、短軸0.58m、深さ0.13mで、平面形は楕円形を呈する。

《土層》3層に分層した。1層が焼土面となっており3層にも焼土粒が含まれる。

《壁・底面》底面は凹凸があり、壁は北側が緩やかに立ち上がり、南側は急に立ち上がる。焼土面である1層下は底面に凹凸があるが、これは他の焼土遺構で確認されている泥岩が抜けた跡であると考えられる。泥岩は遺構内を区画する仕切りとして使用され、抜き取られたものと判断される。なお、遺物は出土しなかった。

S N123焼土遺構（第29図、図版10-1）

《位置と確認》調査区中央やや北東寄りのL R52・53区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸2.06m、短軸0.97m、深さ0.21mで、平面形は不整な長楕円形を呈する。

《土層》3層に分層した。1層が焼土面となっており2・3層にも焼土粒が含まれる。

《壁・底面》底面は浅い凹凸があり、壁は南側が緩やかに立ち上がり、北側は急に立ち上がる。

《時期》S I 01の北側5mに位置する焼土遺構である。覆土はおおむねレンズ状の堆積であるが2～3層間の堆積には凹凸が見られる。なお、遺物は出土しなかった。

S N126焼土遺構（第30図、図版10-2）

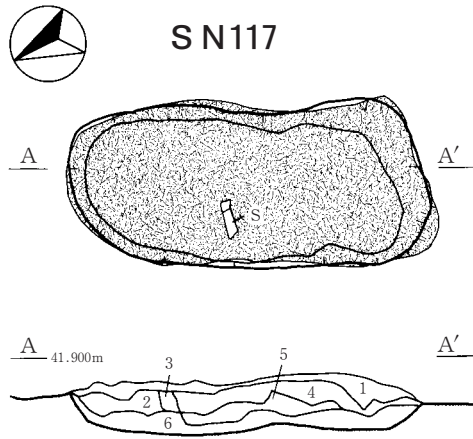
《位置と確認》調査区中央やや南側のMB44・45区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.40m、短軸0.68m、深さ0.15mで、平面形は隅丸の長方形を呈する。

《土層》4層に分層した。1層が焼土面となっており3層にも焼土粒が含まれる。

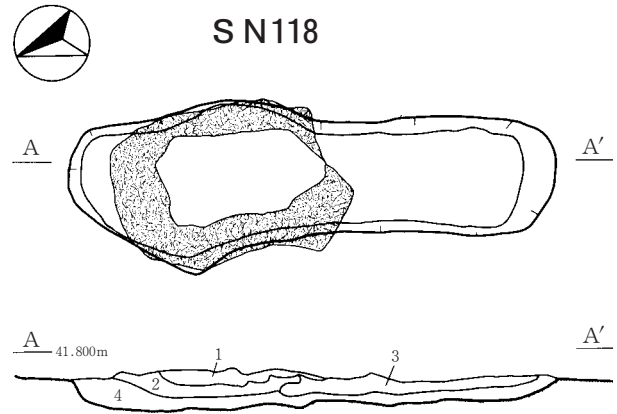
《壁・底面》底面には凹凸があり、南側が浅く北側は僅かながら深い。北側壁の立ち上がりには浅い柱穴が1基確認された。

《時期》S N118の北側4mに位置する焼土遺構である。規模は比較的小型であるが、焼土面は遺構プランの中に位置しており、底面の凹凸は泥岩の抜き取り跡と考えられる。なお、覆土中から遺物は出土しなかった。この隣接して3基検出した焼土遺構S N117・118・126は、その規模や形態から同時期の遺構であると思われ、遺構外ながら周辺グリッドで出土している土師器片や、南東に近接



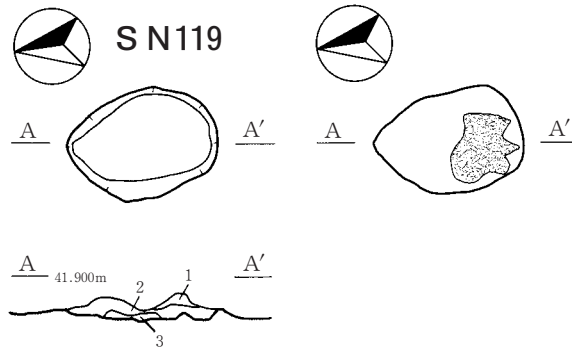
SN117焼土遺構(A-A')

1. 明褐色土(7.5YR5/6)しまり強・粘性弱、黒褐色耕作土少量混入、焼土面。
 2. 極明褐色土(7.5YR2/3)しまり中・粘性中、炭化物少量混入・焼土ブロック(赤褐色5YR4/8)多量混入。
 3. 橙色土(7.5YR6/8)しまり強・粘性弱。
 4. 黒色土(7.5YR2/1)しまり強・粘性中、炭化物微量混入・焼土ブロック(赤褐色5YR4/8)微量混入。
 5. 明褐色土(7.5YR5/8)しまり強・粘性中、焼土ブロック(赤褐色5YR4/8)微量混入。
 6. 褐色土(7.5YR4/4)しまり中・粘性中、炭化物微量混入。
- 地山、黄橙色土(7.5YR7/8)しまり強・粘性弱、砂質土。



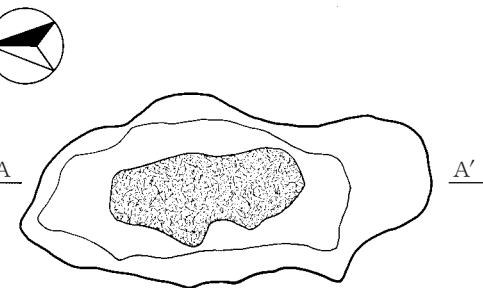
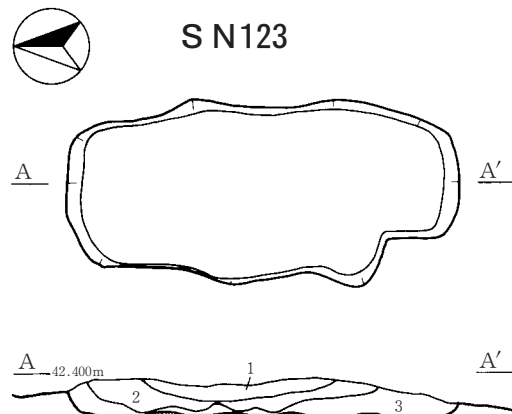
SN118焼土遺構(A-A')

1. 明褐色土(7.5YR5/6)しまり強・粘性弱、焼土ブロック(赤褐色5YR4/8)多量混入、黒褐色耕作土少量混入。
 2. 褐色土(7.5YR4/6)しまり中・粘性中、炭化物微量混入・焼土ブロック(赤褐色5YR4/8)多量混入。
 3. 黒色土(7.5YR1.7/1)しまり強・粘性中、炭化物多量混入・焼土粒微量混入。
 4. 暗褐色土(7.5YR3/4)しまり中・粘性中、炭化物微量混入・焼土粒微量混入。
- 地山、黄橙色土(7.5YR7/8)しまり強・粘性弱、砂質土。



SN119焼土遺構(A-A')

1. にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまり中・粘性弱、炭化物微量混入、砂質土、焼土面。
 2. 黒色土(7.5YR1.7/1)しまり弱・粘性弱、炭化物微量混入、焼土粒微量混入。地山粒少量混入。
 3. 明赤褐色土(5YR5/6)しまり弱・粘性弱、炭化物微量混入、地山粒少量混入。
- 地山、明褐色(10YR6/8)しまり強・粘性弱。

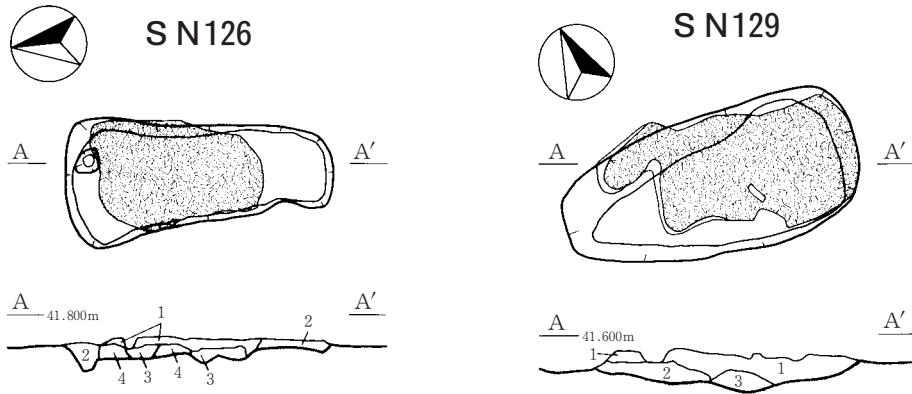


SN123焼土遺構(A-A')

1. 明褐色土(7.5YR5/8)しまり中・粘性弱、炭化物多量混入・焼土ブロック(赤褐色5YR4/8)多量混入。
 2. 黒褐色土(7.5YR2/2)しまり中・粘性中、炭化物多量混入・焼土粒少量混入。
 3. 褐色土(7.5YR4/4)しまり中・粘性中、炭化物微量混入・焼土粒少量混入。
- 地山、黄橙色土(7.5YR7/8)しまり強・粘性中。



第29図 SN117・118・119・123焼土遺構

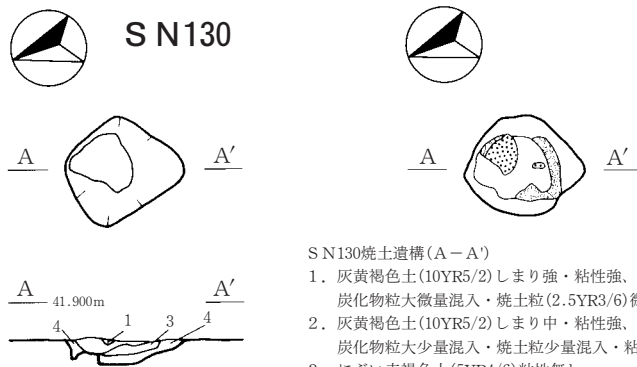


SN126焼土遺構(A-A')

1. 橙色土(7.5YR6/8)しまり強・粘性中、炭化物多量混入・焼土面。
 2. 黒褐色土(7.5YR2/2)しまり中・粘性中、炭化物微量混入。
 3. 褐色土(7.5YR4/3)しまり中・粘性中、炭化物少量混入・焼土粒少量混入。
 4. 明褐色土(7.5YR5/6)しまり強・粘性中、炭化物微量混入。
- 地山、黄橙色土(7.5YR7/8)しまり強・粘性弱、砂質土。

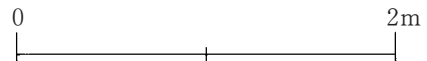
SN129焼土遺構(A-A')

1. 明褐色土(7.5YR5/6)しまり中・粘性中、炭化物多量混入、焼土ブロック(赤褐色5YR4/8)多量混入。
 2. 黒色土(7.5YR1.7/1)しまり強・粘性中、炭化物微量混入・焼土粒微量混入、地山粒微量混入。
 3. 赤褐色土(5YR4/6)しまり中・粘性中、炭化物微量混入、焼土面。
- 地山、明褐色土(10YR6/8)しまり強・粘性弱。



SN130焼土遺構(A-A')

1. 灰黄褐色土(10YR5/2)しまり強・粘性強、炭化物粒大微量混入・焼土粒(2.5YR3/6)微量混入・粘土面。
 2. 灰黄褐色土(10YR5/2)しまり中・粘性強、炭化物粒大少量混入・焼土粒少量混入・粘土少量混入。
 3. にぶい赤褐色土(5YR4/6)粘性無し、シルト質、混入物無し、焼土面。
 4. 黒色土(10YR2/1)しまり弱・粘性弱、炭化物粒中少量混入、焼土粒中・灰黄褐色粘土粒中少量混入、地山粒中少量混入。
- 地山、明褐色土(10YR6/8)しまり強・粘性弱。



第30図 SN126・129・130焼土遺構

する竪穴住居跡S I 113との関連性から平安時代後期の遺構であると考えられる。

SN129焼土遺構(第30図、図版10-3)

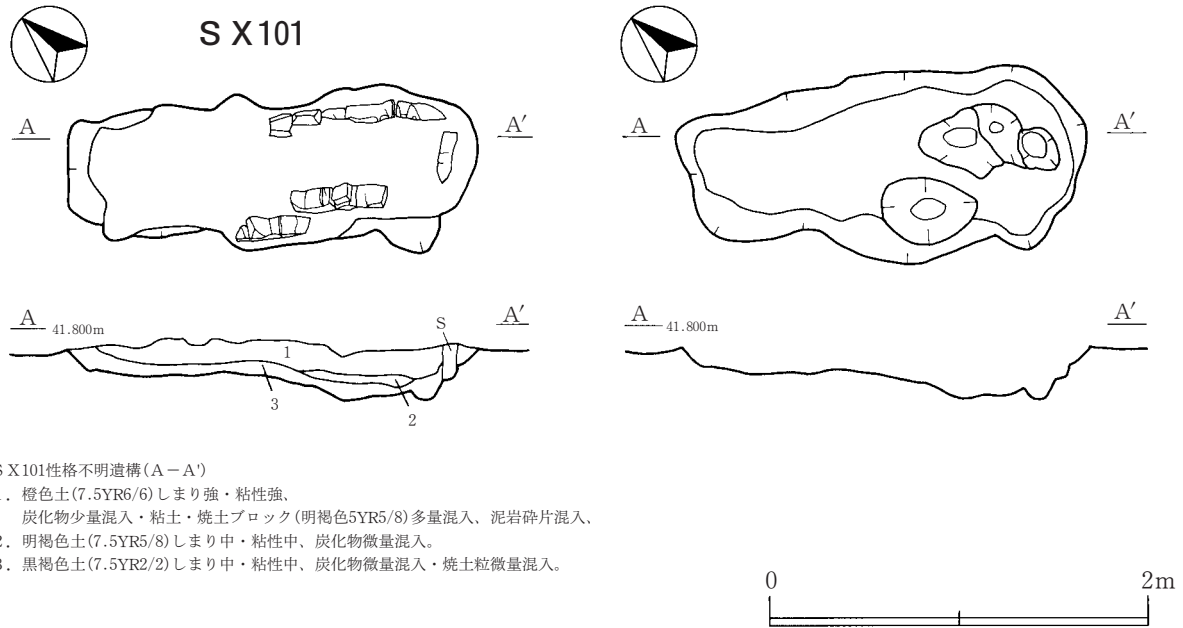
《位置と確認》調査区南側中央のMB40区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.60m、短軸0.76m、深さ0.19mで、平面形は楕円形を呈する。

《土層》3層に分層した。すべての層に焼土が含まれているが、特に1層と3層が著しく焼けており、覆土が赤変していた。1層は範囲も広く炭化物を含む量も多い。

《壁・底面》壁の北西側は攪乱によって覆土が一部失われており、部分的な壁面しか確認できなかった。南東側は緩やかに立ち上がる。底面は緩く浅いくぼみであり凹凸は見られない。

《時期》覆土中から遺物は出土しなかった。しかし、北側に位置するSN117や118と類似の形態を呈することから、同時期の焼土遺構と判断した。



S X 101性格不明遺構(A-A')

1. 橙色土(7.5YR6/6)しまり強・粘性強、炭化物少量混入・粘土・焼土ブロック(明褐色5YR5/8)多量混入、泥岩碎片混入、
2. 明褐色土(7.5YR5/8)しまり中・粘性中、炭化物微量混入。
3. 黒褐色土(7.5YR2/2)しまり中・粘性中、炭化物微量混入・焼土粒微量混入。

第31図 S X 101性格不明遺構

S N 130焼土遺構 (第30図、図版10-4)

《位置と確認》調査区中央やや南寄りのMA47区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.63m、短軸0.54m、深さ0.13mで、平面形は不整な楕円形を呈する。

《土層》4層に分層した。3層が焼土面になっており、1層は粘土である。2層にも焼土粒が含まれる。

《壁・底面》壁の北東側は急な立ち上がりであり、南西側は緩く立ち上がる。底面は北東側に凹凸が見られる。

《時期》S I 122の南東6mに位置する比較的小規模の焼土遺構である。諏訪袋Ⅱ遺跡で検出した焼土遺構の中では最も小型のものである。他の焼土遺構と異なり粘土面(1層)が確認され、これと重ならない部分に焼土面が位置する。なお、覆土中から遺物は出土しなかった。本遺跡の中ではS N 119が比較的近似する。

(4) 性格不明遺構

S X 101性格不明遺構 (第31図、図版10-5)

《位置と確認》調査区南東のL Q 38・L R 38区に位置し、Ⅲ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸2.16m、短軸1.01m、深さ0.28mで、平面形は不整な長方形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》3層に分層した。全層に焼土が含まれ、1・2層は著しく赤変している。

《断面形・底面》北西側は緩く立ち上がり、南東側はやや急に立ち上がる。底面は北西から南東へ緩く傾斜する。南東底面には近接しあうくぼみが4箇所ある。

《焼土面》遺構確認面は全面的に焼土粒が含まれており、掘り方全体で燃焼させていたと推定される。特に赤変が著しい南東側の半分(1・2層)は、遺構の輪郭と並行にブロック状に割られた

泥岩が3方向に配置されていた。泥岩の表面も被熱により赤化している。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。S N117や118と部分的に類似する焼土面を呈することから、焼土遺構の可能性もある。

第3節 遺構外出土遺物

諏訪岱Ⅱ遺跡では、調査区の面積4,300㎡内で遺構外からも遺物が出土している。これには平成11年度に実施された遺跡範囲確認調査の際に出土した遺物も含まれる。これらの遺物を第32図から第35図に掲載した。内訳は縄文土器17点、石器12点、平安時代の土師器4点、中世陶器1点の合計34点である。

1. 縄文時代の遺構外出土遺物（第32～35図、図版20・21）

（1）土器（第32図、図版20－1）

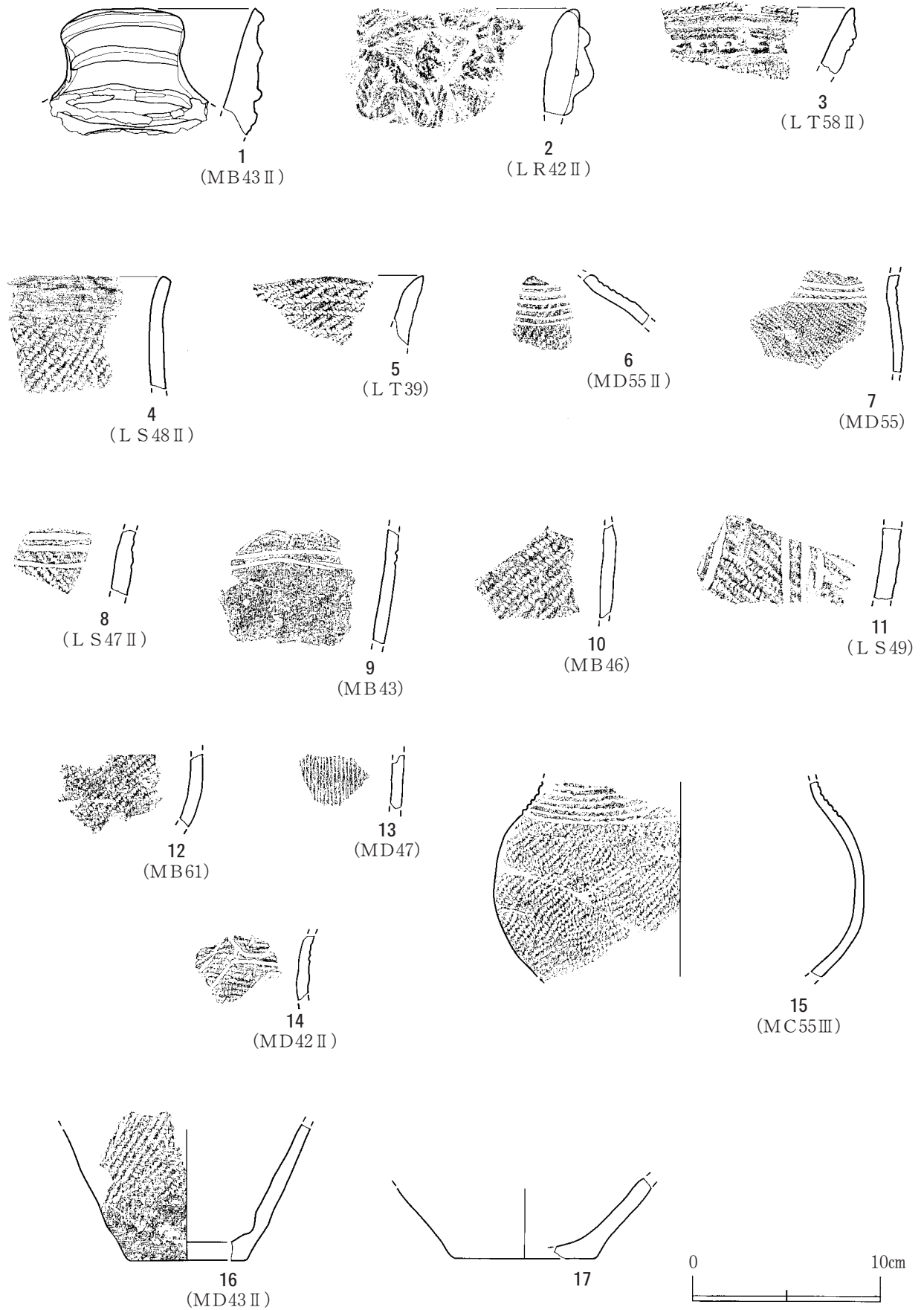
第32図1（図版20－1）は、MB43区から出土した深鉢形土器の口縁部突起である。2～5は深鉢形土器の口縁部破片である。2は粘土紐が貼り付けられた円筒土器。6は注口土器または浅鉢形土器の胴部破片である。6～14は胴部破片である。15は壺形土器の胴部破片である。16・17は底部破片である。

（2）石器（第33・34図、図版20－2）

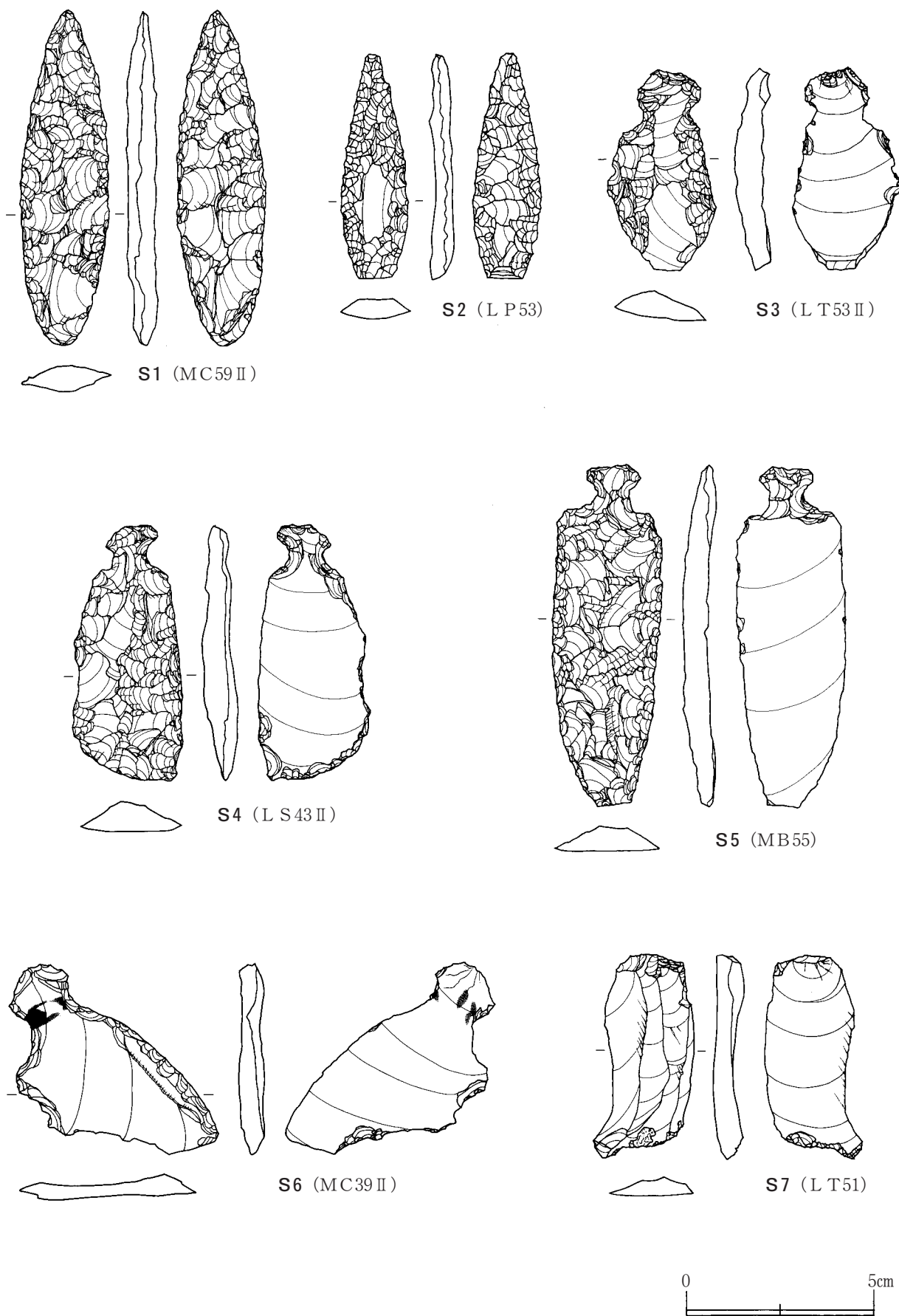
第33～34図は縄文時代の石器を図示した。S1・2は石鏃である。S3～6は石匙で、3～5は縦型、6は横型のものである。S7～10は石筥である。S9は磨製石斧で刃部の先端部分のみ出土した。蛤形の円刃で多数の使用痕が認められる。S12は三脚石器に似た形状の異形石器である。用途は不明であるが、先端のやや下部に紐を括り付けられるよう抉りの調整が施されている。表裏両面に磨り面が見られる。

2. 古代～中世の遺構外出土遺物（第35図、図版21－1）

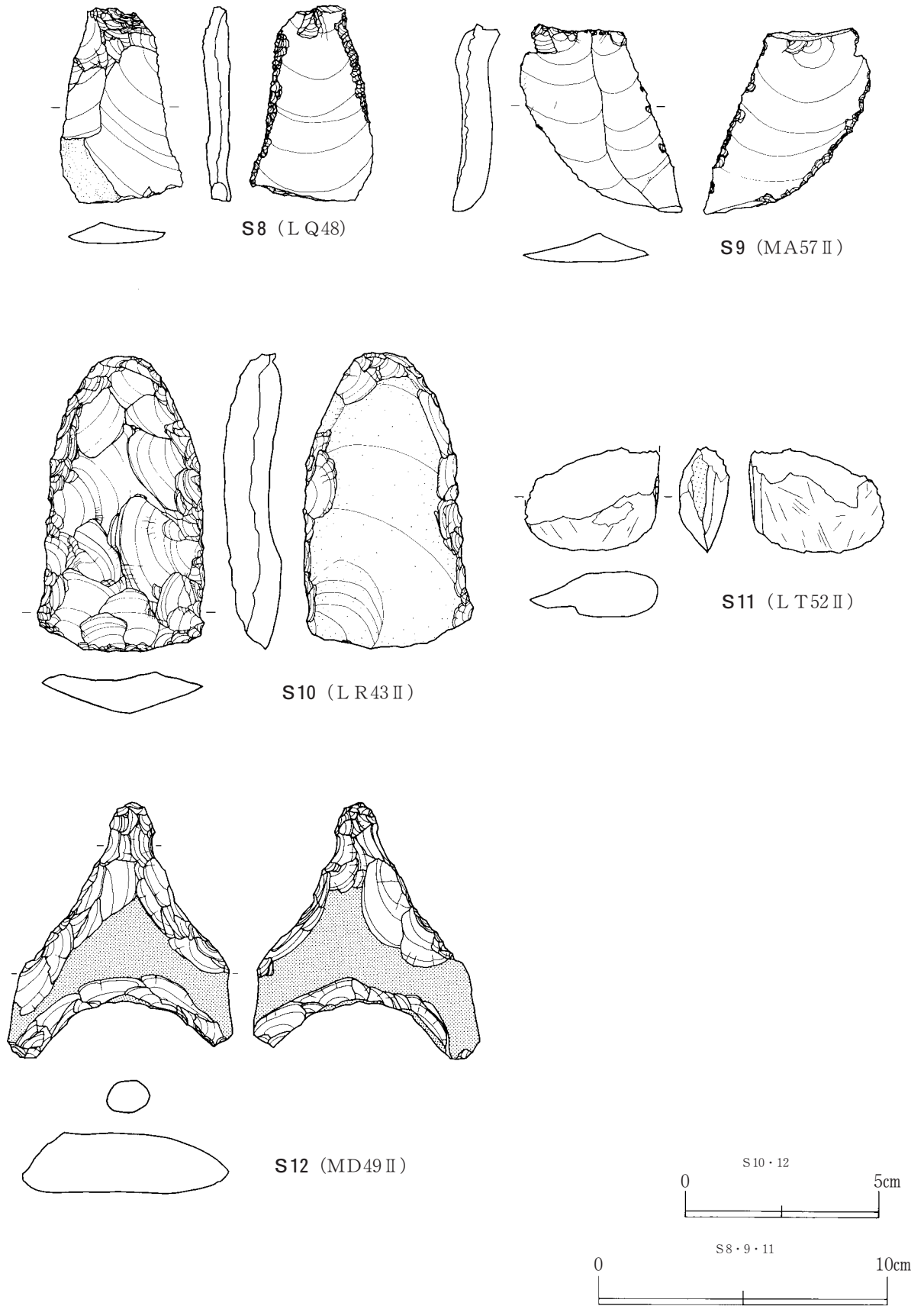
第35図1は土師器甕の口縁部破片である。2は土師器壺の口縁部破片、3土師器甕の胴部破片で底部に近いもの、4は土師器甕の胴部破片である。5は中世陶器の口縁部破片である。時期は1～4が平安時代後半、5は室町時代以降と考えられる。



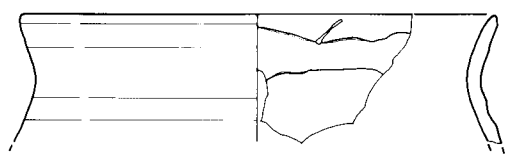
第32図 遺構外出土土器



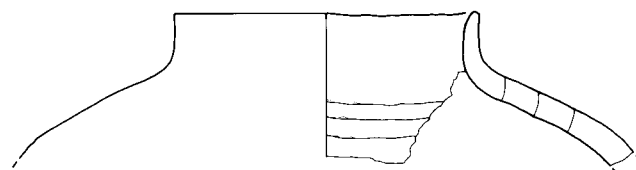
第33図 遺構外出土石器 (1)



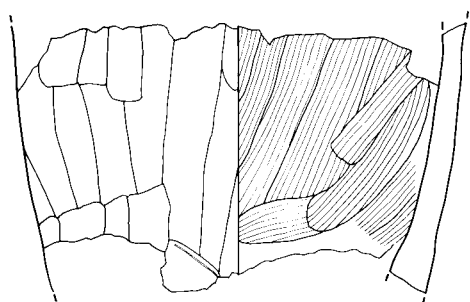
第34図 遺構外出土石器 (2)



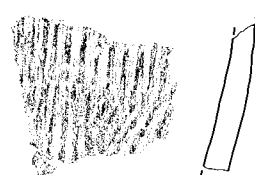
1
(MB38Ⅱ)



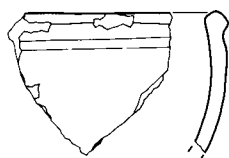
2
(MA39Ⅱ)



3
(MA39Ⅱ)



4
(MA39Ⅱ)



5
(LO58Ⅱ)



第35図 遺構外出土土器

第3章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

1. はじめに

諏訪岱Ⅱ遺跡より検出された炭化材および炭化種子の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、S I 113から出土した炭化材3点、S I 114から出土した炭化材2点、S I 115から出土した炭化材1点および炭化種子2点、S I 116から出土した炭化材1点、S I 122から出土した炭化材1点の併せて10点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

第2表に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（Onesigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期5,730 \pm 40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB4.3（CALIB3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。

1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

第2表 諏訪岱Ⅱ遺跡放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-1360 (AMS)	炭化材 No.1 (スギ) SI113-RC1	-27.7	1070 ± 30	cal AD 985	cal AD 905 - 915 (20.0%) <u>cal AD 965 - 1000 (72.8%)</u>
PLD-1361 (AMS)	炭化材 No.2 (スギ) SI113-RC2	-25.8	1150 ± 30	cal AD 890	cal AD 865 - 905 (34.6%) <u>cal AD 915 - 965 (55.1%)</u>
PLD-1362 (AMS)	炭化材 No.3 (スギ) SI113-RC3	-25.4	1070 ± 30	cal AD 985	cal AD 905 - 915 (20.0%) <u>cal AD 965 - 1000 (72.8%)</u>
PLD-1363 (AMS)	炭化材 No.4 (スギ) SI114-RC1	-26.4	1240 ± 30	cal AD 775	<u>cal AD 715 - 750 (37.2%)</u> cal AD 765 - 780 (20.1%) cal AD 790 - 820 (24.9%) cal AD 840 - 860 (12.5%)
PLD-1364 (AMS)	炭化材 No.5 (スギ) SI114-RC2	-23.9	1160 ± 20	cal AD 890	cal AD 830 - 840 (10.1%) <u>cal AD 865 - 900 (44.4%)</u> cal AD 920 - 945 (32.6%)
PLD-1365 (AMS)	炭化材 No.6 (コナラ節) SI115-RC1	-27.4	480 ± 20	cal AD 1435	<u>cal AD 1425 - 1440 (100%)</u>
PLD-1366 (AMS)	炭化材 No.7 (クリ) SI116-RC1	-25.7	920 ± 30	cal AD 1060 cal AD 1085 cal AD 1125 cal AD 1140 cal AD 1155	<u>cal AD 1040 - 1100 (65.4%)</u> cal AD 1115 - 1140 (26.5%)
PLD-1367 (AMS)	炭化材 No.8 (針葉樹) SI122-RC1	-22.4	950 ± 20	cal AD 1035 cal AD 1145 cal AD 1150	cal AD 1025 - 1045 (25.2%) <u>cal AD 1090 - 1120 (48.0%)</u> cal AD 1140 - 1155 (26.7%)
PLD-1368 (AMS)	炭化種子 No.9 (アサ) SI115-RC2	-27.1	490 ± 30	cal AD 1430	<u>cal AD 1415 - 1440 (100%)</u>
PLD-1369 (AMS)	炭化種子 No.10 (ササゲ属近似種) SI115-RC3	-25.4	480 ± 20	cal AD 1435	<u>cal AD 1425 - 1440 (100%)</u>

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

《引用文献》

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第2節 諏訪岱Ⅱ遺跡から出土した炭化種実

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. 試料

諏訪岱Ⅱ遺跡は、秋田県秋田郡米内沢字諏訪岱111外に所在する。ここでは、S I 115-R C 2 (試料9)、S I 115-R C 3 (試料10) より出土した炭化種実を検討し、その同定結果を報告する。

2. 結果

検討した結果、試料9 (S I 115-R C 2) は、栽培植物のアサ炭化種子 (完形2個体、破片3個体) であった。また、表面の磨耗が著しく、同定には至らなかったが、外形からイネ炭化胚乳の可能性が考えられるものが1個体含まれていた。試料10 (S I 115-R C 3) は、栽培植物のイネ炭化胚乳 (1個体)、ササゲ属近似種炭化種子 (1個体) であった。なお、試料9のアサ炭化種子、試料10のササゲ属近似種炭化種子は、年代測定 (AMS法) 用試料に用いられた。

3. 形態記載

イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

試料10出土のものは、長さ約4.7mm、幅約3.3mm。

アサ *Cannabi ssativa* Linn. 炭化種子

種子は楕円状レンズ形で下端には楕円形の臍があるが、臍の部分が欠損しているものもあった。長さ約3.2~4.4mm。

ササゲ属近似種 cf. *Vigna* 炭化種子

およその大きさは、長さ5.8mm、幅3.8mm、厚さ3.6mm。一方にずれた位置に長さ約2.1~2.2mmの細長い臍があり、不明瞭であるが、臍の周囲はやや隆起しているように見える。

第3節 諏訪岱Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

北秋田郡森吉町米内沢字諏訪岱に所在する当遺跡の住居跡から出土した、炭化材8点の樹種同定結果を報告する。

2. 同定の方法

炭化材の3方向の断面を走査電子顕微鏡で材組織を拡大し、観察を行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柁目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

S I 113の3点とS I 114の2点は、スギであった。S I 115の試料6はコナラ節、S I 116の試料7はクリであった。S I 122の試料7は、ヒノキ科の材に似るが、アテ材であった為に、正常な分野壁孔の特徴が捕えられなかった。

第3表 諏訪岱Ⅱ遺跡出土炭化材樹種同定結果

試料番号	採取地点	樹種
1	S I 113-R C 1	スギ
2	S I 113-R C 2	スギ
3	S I 113-R C 3	スギ
4	S I 114-R C 1	スギ
5	S I 114-R C 1	スギ
6	S I 115-R C 1	コナラ節
7	S I 116-R C 1	クリ
8	S I 122-R C 1	針葉樹

4. 材組織記載

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 図版27 1a-1c (試料2)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は急である。未炭化材では晩材の仮道管壁は極めて厚いが、当遺跡の炭化材ではあまり目立たず晩材部の量も少なかった。分野壁孔は壁孔縁の幅が極めて狭く、孔口が大きく開いたスギ型で1分野に2~3個が並ぶ。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*.subgen.*Quercus* sect.*Prinus* ブナ科 図版27 2a-2c (試料6)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部では薄壁・角形で極めて小型の管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列と複合状がある。

クリ *Castanea crenata* Sieb.et Zucc. ブナ科 図版27 3a-3c (試料7)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、2細胞幅のものも見られた。

4. まとめ

同定試料は住居跡から出土した炭化材であることから建築材と考え、スギ・コナラ節・クリが利用されていた。特にS I 113とS I 114の試料から、スギが多く検出された。

第4章 まとめ

発掘調査の結果、諏訪岱Ⅱ遺跡では、縄文時代の遺構を3遺構と、古代（平安時代）から中世の遺構を28遺構、合計31遺構を検出した。以下、遺跡の時期や性格について述べる。

【縄文時代の遺構と遺物】土坑1基（S K124）、土器埋設遺構（S R02）1基、陥し穴（S K T128）1基の計3基を検出した。調査区南端で検出したS K124土坑は、遺構内出土遺物がないため詳細は不明である。調査区北側で検出したS R02土器埋設遺構は、土器の埋設状況から墓である可能性が高い。その南東約10m地点で検出したS K T128陥し穴は溝状の形態を呈し、軸線は北東－南西方向を向く。この土器埋設遺構および陥し穴の存在は、本遺跡が墓域および狩猟場であった時期があることを示している。また、遺構外から出土した縄文時代の遺物は、概ね縄文時代中期前葉から晩期末葉までに比定される。

【古代（平安時代）～中世の遺構と遺物】竪穴住居跡7軒（S I 01・113・114・115・116・122・125）、土坑13基（S K04・05・07・09・102・103・104・105・106・107・108・110・111）、焼土遺構7基（S N117・118・119・123・126・129・130）、性格不明遺構1基（S X101）の計28遺構を検出した。調査区南側中央に位置するS I 113・114竪穴住居跡は検出状況や出土遺物から、いずれも焼失家屋であり、その時期は出土した土師器から平安時代後半以降、少なくとも10世紀後半以後の時期に比定される。調査区南西で検出したS I 115竪穴住居跡からは4種（天聖元寶・治平元寶・政和通寶・洪武通寶）5点の銭貨が出土した。いずれも宋銭・明銭であることを示すものの、粗製であり模鑄銭である可能性が高い。よって住居跡の時期は、遡っても、出土銭貨のうち最も新しい鑄造年である1368（洪武元年）以降であると想定され、国内では南北朝～室町期以後に比定される。これら以外の竪穴住居跡では、明確な時期を示す遺物が出土したものがなく、詳細は不明であるが、自然科学的分析の結果や検出状況および規模・形態からS I 116竪穴住居跡は平安時代後半、S I 122・125竪穴住居跡は平安時代後半以降中世までの時期に比定される。S I 125竪穴住居跡は住居の軸線に平行する柱穴が壁外にあるため、竪穴住居と組み合わされた掘立柱建物が併存した可能性がある。

土坑は、検出した13基のうち8基が調査区南東隅に集中しており、調査区内の分布に偏りが見られる。出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出位置や規模・形態から平安時代のものと考えられる。焼土遺構も検出した7基のうち6基が調査区南半に位置し、土坑と同様に分布の偏りがある。なかでもS N117・118焼土遺構は最も規模が大きく、覆土中および周辺から出土した土師器により平安時代後半の時期に比定され、近接するS I 113竪穴住居跡と同時期に存在した遺構と考えられる。

以上の調査結果から、本遺跡は縄文時代（中期前葉～晩期末葉）と古代（平安時代後半）～中世に渡る複合遺跡であり、縄文時代は狩猟場および墓域としての性格を持ち、平安時代後半から中世までは主に集落跡としての性格を有する遺跡であると考えられる。よって、縄文期の集落は近接する狐岱遺跡や冷水岱遺跡にあったことが想定され、平安時代以降になると本遺跡は諏訪岱遺跡と併存して集落が営まれた可能性がある。

なが の たい さん い せき
長 野 岱 Ⅲ 遺 跡

(遺跡略号：2NNT-Ⅲ)

所在地：秋田県北秋田郡森吉町米内沢字長野岱149-2外

調査期間：平成13年（2001）7月27日～10月4日

調査面積：3,200㎡

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

長野岱Ⅲ遺跡は、北秋田郡を貫流する阿仁川と出羽山地の北東辺に立地し、その標高は62～65m前後である。本遺跡の発掘調査区は国道105号（米内沢バイパス）線の工事路線区域にあたり、南北方向に細長い3,200㎡の広さである（第3図）。

発掘調査区は、秋田県立米内沢高等学校向かいの長野岱工業団地から西に工業団地道路を約200m、建設資材置き場に進み、その脇の舌状台地先端部が国道105号（米内沢バイパス）線の建設予定地となっている。調査前の現況は杉林である。バイパス道路の工事路線に合わせた道路上の平面形を呈し、南北方向に長く東西方向に短い。

検出した遺構は、竪穴住居跡を主体として土坑・フラスコ状土坑・焼土遺構・炭窯・鍛冶炉である。調査区内での遺構分布は、調査区西側で住居跡を中心に遺構が集まって検出された。調査区北側でも遺構を検出したが、その密度は南側に比べて希薄である。出土した遺物は、ほとんどが縄文時代中期～晩期および平安時代に属するものであった。

第2節 調査の方法

調査の方法は、国道105号国道道路改築工事の路線中心杭S T A-No.103を基点として真北方向をとり、4m四方の方眼（以下、グリッドと呼称する）杭を打設して、検出した遺構の位置を把握するグリッド法に拠った。基点杭にはMA50の名称を付し、西に行くに従いMB・MC・MD…、東に行くに従いLT・LS・LR…、北に行くに従い51・52・53…、南に行くに従い49・48・47…と、二桁のアルファベットおよび算用数字を組み合わせた番号を4mごとの各杭に明記した。この組み合わせた番号を示した各グリッドの名称は、南東隅の杭の番号を用いた。調査によって検出した遺構は、発見順に一連の番号を付して把握した。発掘調査中、精査による新知見によって欠番となった遺構番号もある。

第3節 調査の経過

長野岱Ⅲ遺跡の発掘調査は平成13年7月27日～10月4日の間実施した。以下、調査日誌を元に調査の経過を簡略に記述する。

第1週（7月27日）発掘調査を開始した。

第2週（7月30日～8月3日）表土除去および粗掘りの時点で、遺構外遺物が出土した。遺物は縄文土器片と剥片である。

第3週（8月6日～8月10日）S I 01とS I 02・03として遺構番号を付し検出遺構とした。

第4週（8月20日～8月24日）調査区北側から土坑、炭窯、焼土遺構2基、柱穴様ピット7基を検出した。なお、炭窯S W 07は土坑状のプランを呈し、半截の結果、伏せ窯と判明した。

第5週（8月27日～8月31日）S X 27～42・45～52・56の番号を付し検出遺構とした。ME 49グリットでは、鍛冶炉と思われる遺構S S 43を検出した、中央がくぼんだ鉄塊系遺物が出土している。精査・半截の結果、S K 06・08・09・13・17・18・54・55、S K T 11・12、S K P 20・24・26の14基が欠番になった。

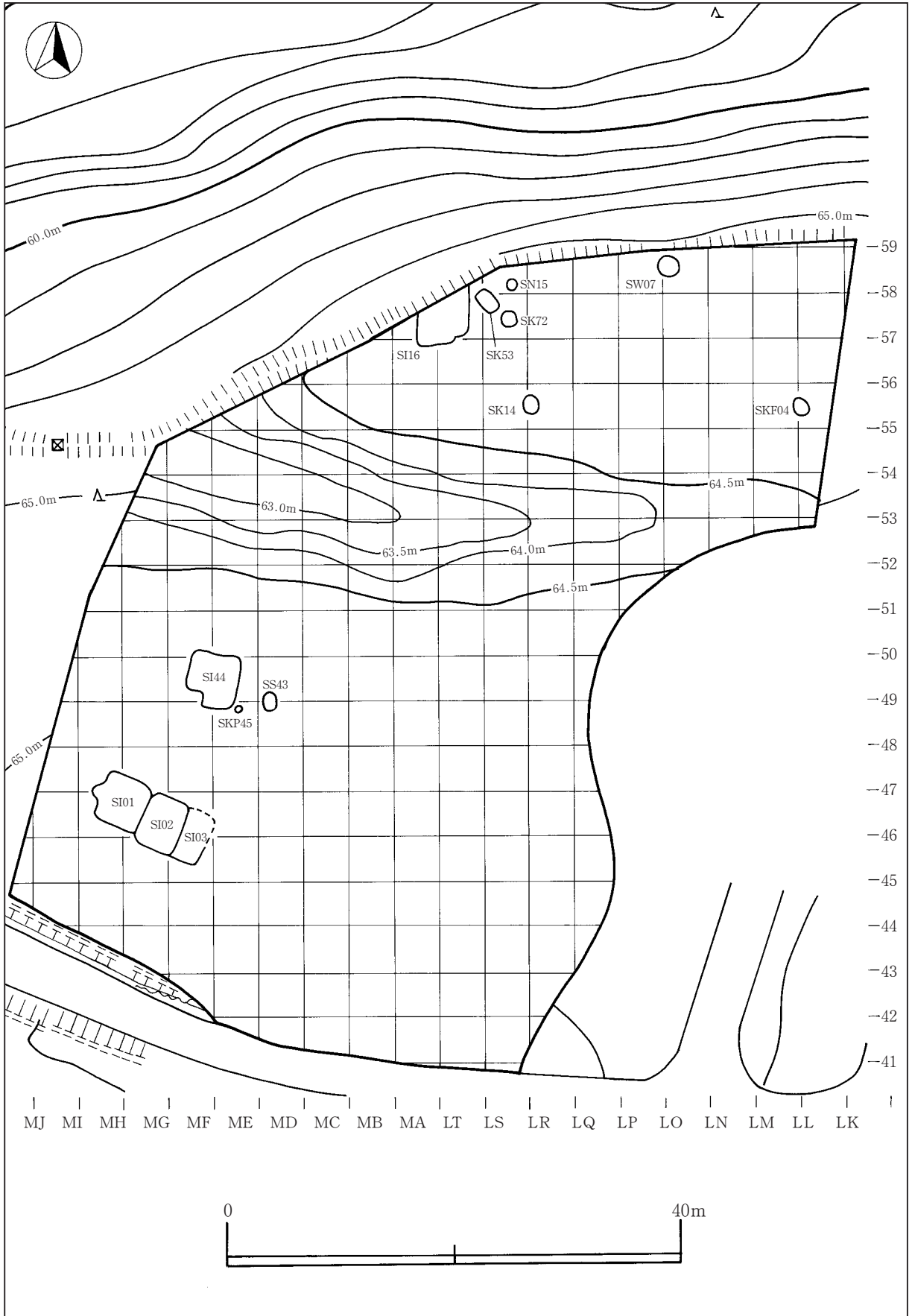
第6週（9月3日～9月7日）S S 43は、鍛冶炉の鉄滓周辺から粒状の鉄塊系遺物（径1cm前後）が多数出土した。S N 79、S K 72・85の遺構を検出した。S X 57～71を性格不明遺構として検出した。名称変更した遺構はS K 04→S K F 04、S N 16→S I 16、S K 53→S N 53の3基。

第7週（9月10日～9月14日）S X 73～78・80～87を性格不明遺構として検出した。

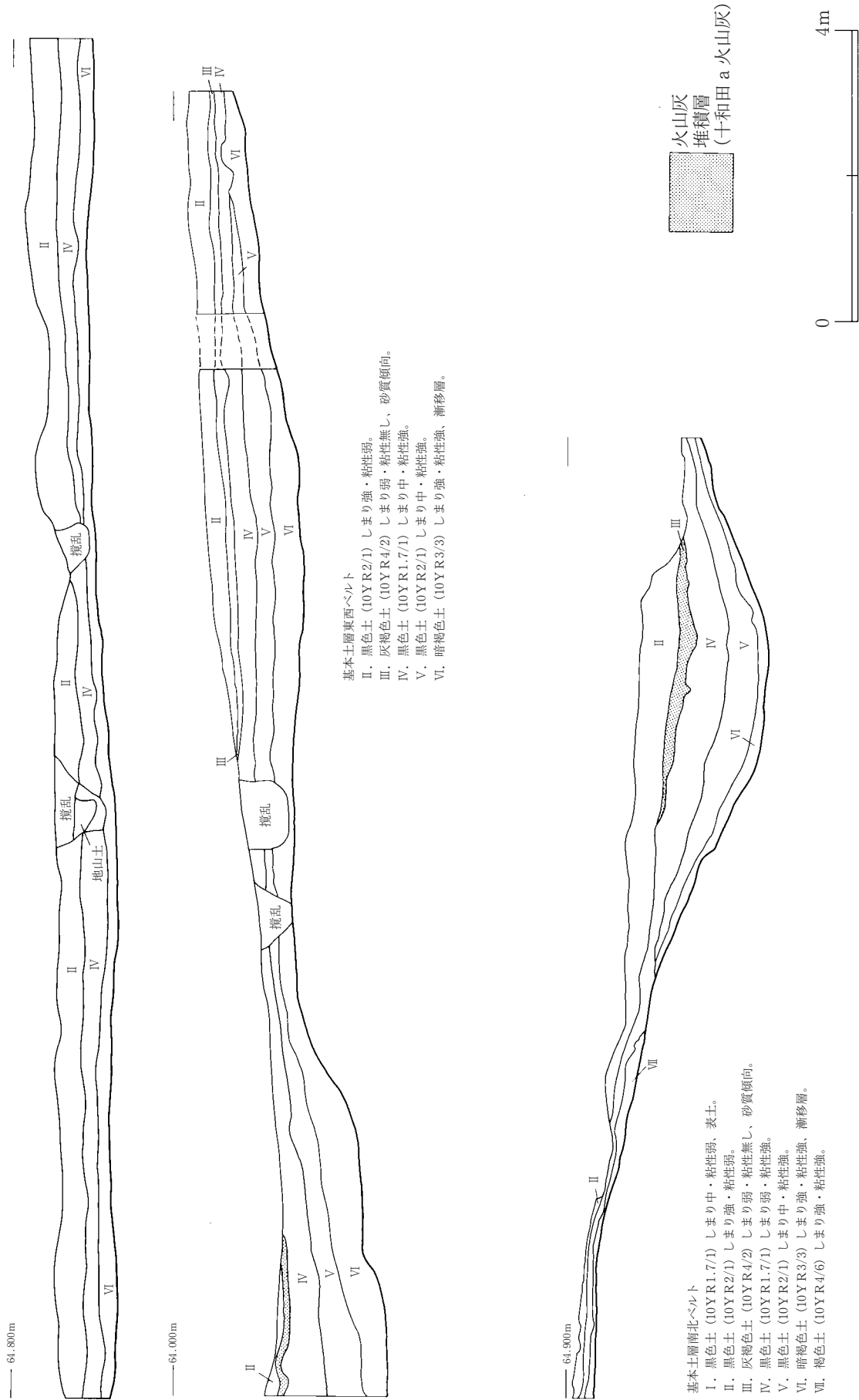
第8週（9月17日～9月20日）S S 43の鍛冶炉から北へ2mの地点で、刀子1点が出土した。9月19日に秋田県立米内沢高等学校生対象の長野岱Ⅲ遺跡見学会が行われた。午前中は3年生1クラスが来跡し、児玉征校長からごあいさつをいただいた。午後は2年生2クラスと教職員6名が来跡した。なお、米内沢高等学校側には、大館新報社の取材が来ており、遺跡を見学する生徒のようすを写真撮影していた。

第9週（9月25日～9月28日）検出遺構の主なものを精査終了に向け、写真撮影した。

第10週（10月1日～10月4日）調査終了確認と遺跡引き渡しを4日午前11:30に行った。



第36図 遺構配置図



第37図 基本土層図

第2章 調査の記録

第1節 基本層序

長野岱Ⅲ遺跡の基本層序は、前年度（平成12年12月）実施の範囲確認調査時に試掘されたトレンチを精査・観察して確認した。その確認地点は、調査区中央のMA50グリッド杭からMA57グリッド杭のラインである。このライン内に試掘トレンチの交差があるため土層の中央が一部欠けている。発掘調査前の現況は松および杉の林野であった。確認した基本層序は以下の通りである。

I層：黒色土（10YR 2/1）表土・盛土。

II層：黒色土（10YR 2/1）締まり中、粘性中、粒径2～3mmの炭化物微量混入。

III層：黒褐色土（10YR 2/3）締まりやや強、粘性やや強、粒径2～3mmの炭化物微量混入。

IV層：褐色土（10YR 4/4）締まりやや強、粘性やや強、地山粒土・黒褐色土が微量混入。

V層：黄褐色土（10YR 5/6）締まり強、粘性強、地山。

以上のうち、検出遺構の確認面は概ねIII層上面であった。

第2節 検出遺構と遺物

発掘調査の結果、長野岱Ⅲ遺跡で検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡や土坑などを中心とした計12遺構である。このうち1基のみだが縄文時代の遺構も検出した。出土した遺物は、平安時代の土器（10箱）、縄文時代の土器・石器（3箱）、鉄製品・鉄塊系遺物（1箱）、合わせて整理用コンテナ14箱分（大コンテナ換算、1箱の容量36ℓ）である。今回の発掘調査区（3,200m²）内で検出した遺構の内訳は以下の通りである。

縄文時代の遺構

フラスコ状土坑……1基（SKF04）

古代（平安時代）の遺構

竪穴住居跡……5軒（SI01・02・03・16・44） 土 坑………3基（SK14・53・72）

焼土遺構………1基（SN15） 炭 窯………1基（SW07）

鍛冶炉………1基（SS43）

1. 縄文時代の遺構

SKF04フラスコ状土坑（第38図、図版15-7・8）

《位置と確認》調査区北東のLL・LM55区に位置し、IV層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.10m、短軸0.90m、深さ0.82mで、平面形は楕円形を呈する。

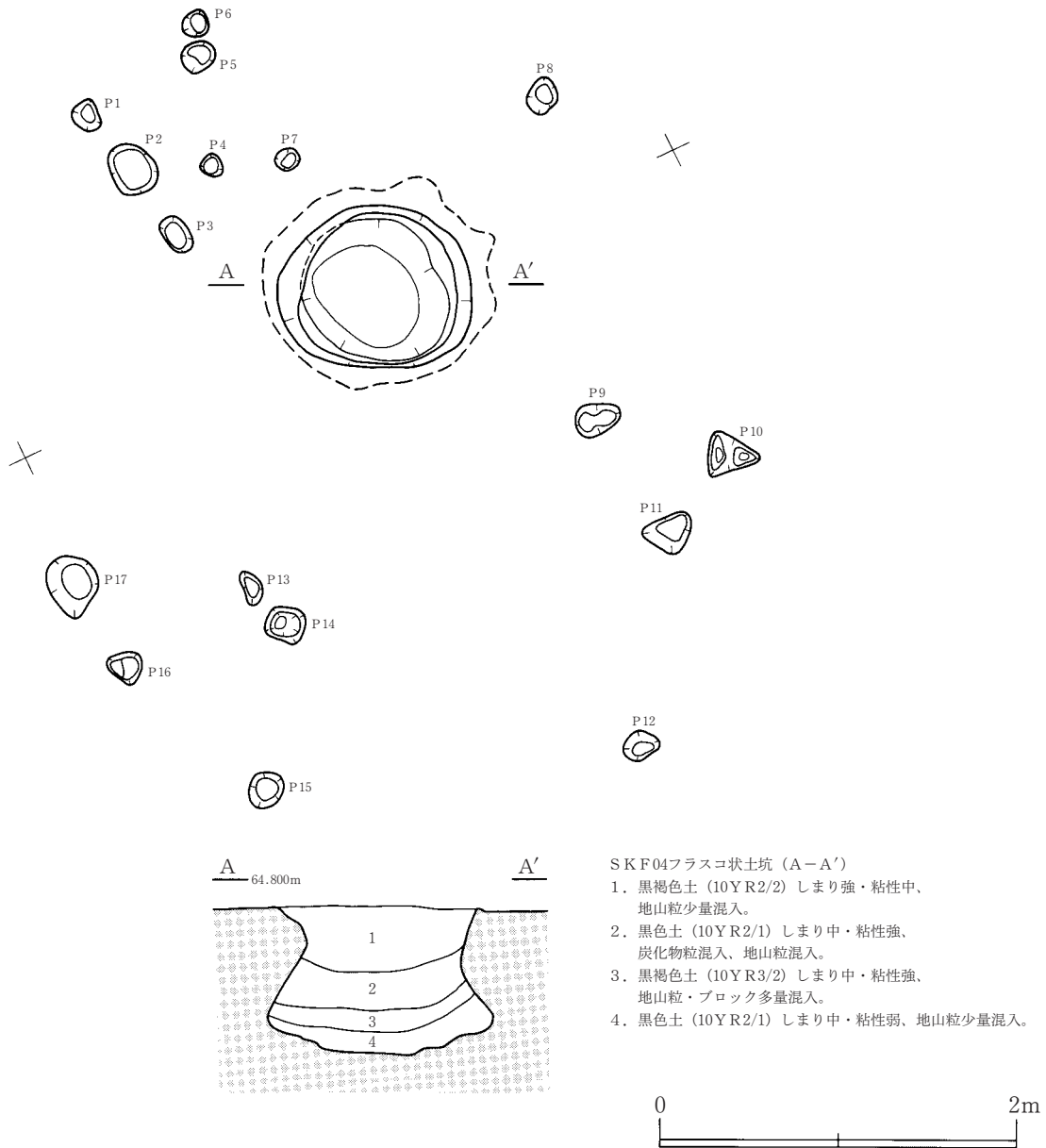
《重複》重複は見られなかった。

《土層》4層に分層した。掘り方の崩落土は見られず、覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・底面》北東側の開口角度が広く、南西側は緩い。底面は僅かながら3段の段差があり、外



S K F 04



第38図 S K F 04フラスコ状土坑

縁から中心に向かって深くなる。フラスコ中心の底面は平坦である。

《柱 穴》遺構に近接する17基を確認した。

《出 土 遺 物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時 期》遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、規模・形態から縄文時代の遺構と考えられる。周囲に確認された柱穴は、その配置が規則的でないがフラスコ状土坑に伴う柱穴と判断した。

2. 古代（平安時代）の遺構

（1）竪穴住居跡

S I 01竪穴住居跡（第39～41図、図版12-1～5、21-2）

《位置と確認》調査区南西のMG46・47、MH46・47区に位置し、IV層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸5.12m、短軸4.10mで、平面形は長方形を呈する。北西壁の中央に方形の張り出し（一辺約0.80m）がある。

《重複》S I 02と重複する。本住居の方が新しくS I 02を切っている。

《土層》8層に分層した。6層以外は覆土中にすべて炭化物が含まれ、4層にのみ焼土粒が認められた。カマド部分は焼土・炭化物が全面に見られる。

《壁》遺構確認面からの壁の深さは0.18mで、長さは北東壁3.96m、北西壁4.94m、南東壁5.00m、南西壁4.16mである。北東・南西壁の壁は4m前後の長さであり、北西・南東壁の長さ5m前後に対し約1m短い。四辺とも壁板の溝と思われる壁溝が認められた。北東・北西・南東壁の3方では壁溝がそのまま立ち上がりとなるが、南西壁のみは壁溝が壁の立ち上がりよりも0.20m前後住居の内側にあり、他と異なる様相を示す。また南東壁は、カマドの位置する場所で壁溝がほぼ直角に曲がって、南西壁と並行する。

《床面》住居の中央部分が僅かに高いが、ほぼ平坦である。

《柱穴》17基確認した。住居の壁際に配置されるものが9基（P17を含めると10基）、住居内に配置されるものが8基（P17を除くと7基）である。住居中央の2基（P12・13）が比較的大きい。

《カマド》南東壁に沿って2基確認した。北側カマドの最大径は1.05m、南側カマドは0.80mである。焼土範囲は南北両側のカマドにまたがっており、規模の小さい南側カマドの方が強く焼けている。カマド軸線は、北側がN-50°-Wで、南側がN-36°-Wである。

《出土遺物》第40図1・2・4はフイゴ羽口片である。3は土師器の底部破片である。このほか種子状炭化物2点が出土した。羽口片は部分的に溶解した鉄製分が表面に付着していた。土師器は内面に粗いハケ目、外面にヘラケズリが施されており、平安時代に比定される時期のものである。

《時期》出土した種子状炭化物2点を、種実同定および放射性炭素年代測定したところ、種子はトチノキ炭化子葉であることが判明し、暦年代範囲は西暦1040年-1100年という較正結果が出た。出土した遺物や分析の結果により、本遺構は平安時代後半の住居跡と考えられる。住居の軸線はN-31°-Eである。

S I 02竪穴住居跡（第39～41図、図版12-1～4、21-2）

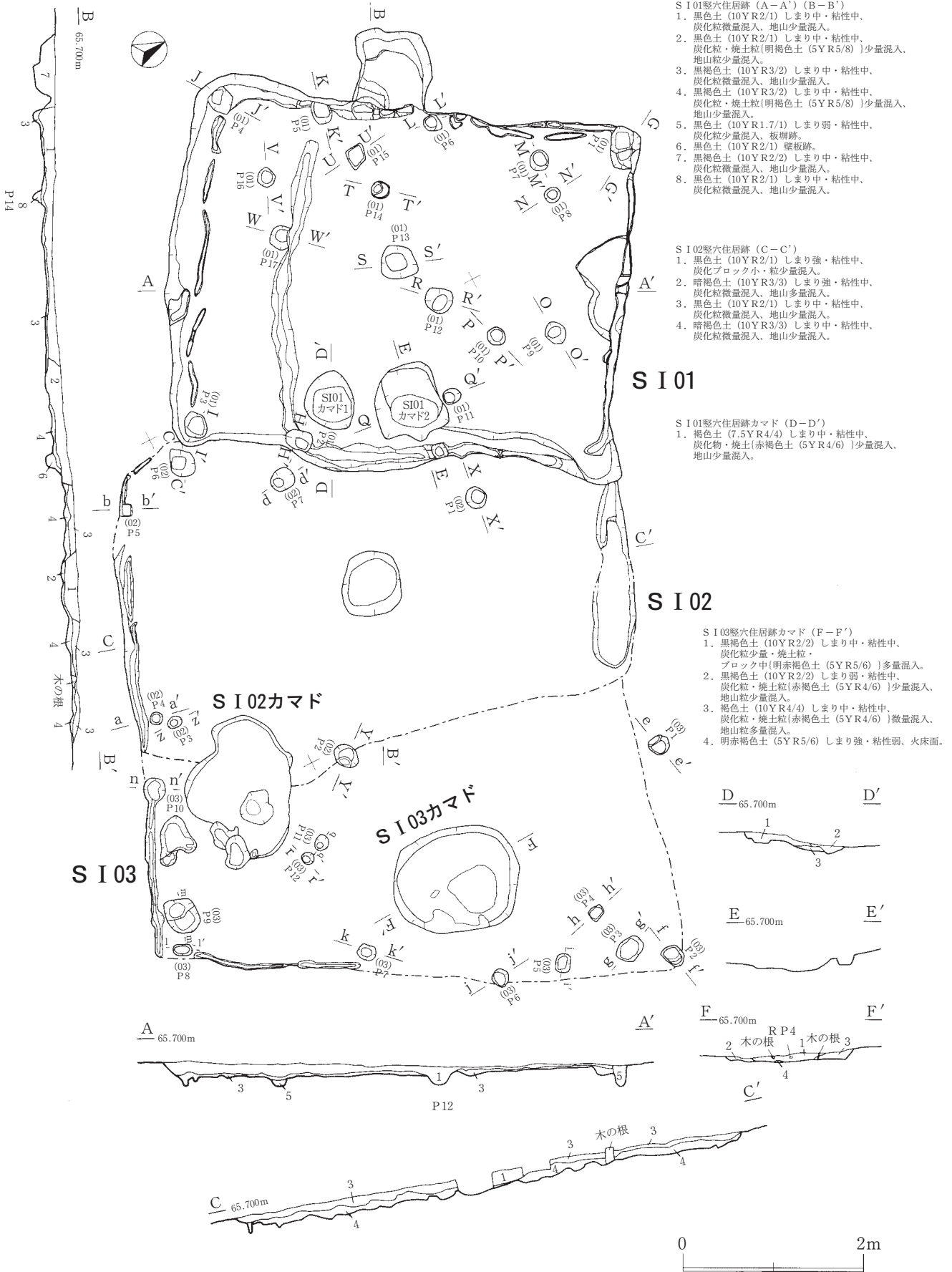
《位置と確認》調査区南西のMF45・46区、MG45・46区に位置し、IV層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸5.68m、短軸3.83m（残存値）で、平面形は長方形（残存部）を呈する。

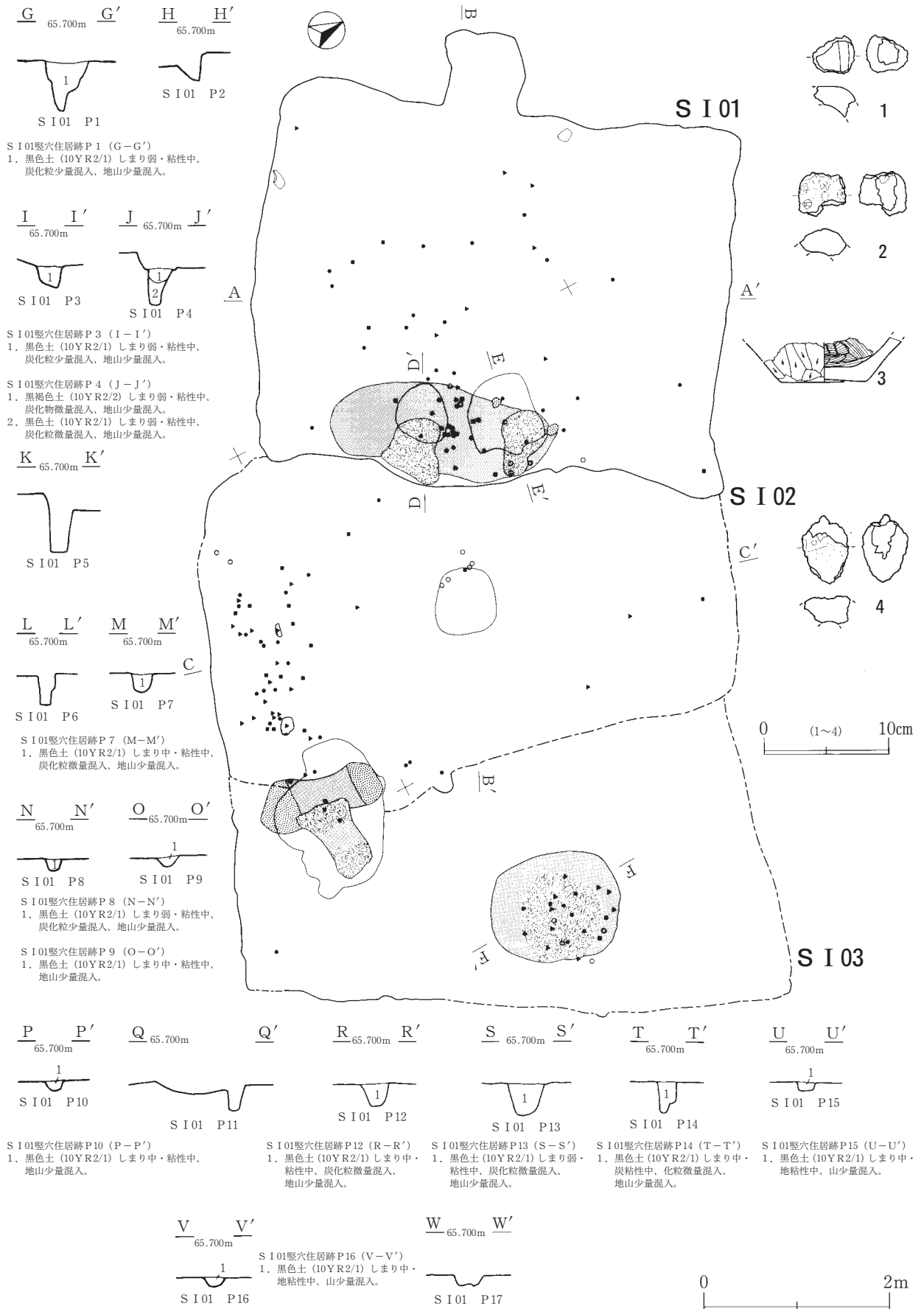
《重複》S I 01・03と重複する。S I 03を切るがS I 01に切られている。

《土層》4層に分層した。覆土中のすべてに炭化物が含まれる。

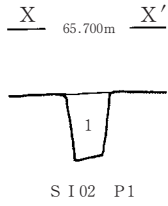
《壁》遺構確認面からの壁の深さは0.19mで、長さは北壁2.18m（残存値）、西壁5.38m（残存値）、東壁5.49m（推定値）、南壁3.33m（残存値）である。西・東壁が長辺で、北・南壁が短辺だが、西壁はS I 01によって切られているため、南側の角以外ほとんど残っていない。東壁は削平されていたため、確認面で捉えた壁の推定線を示した。



第39図 SI 01・02・03竪穴住居跡 (1)

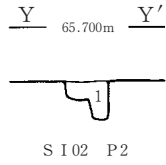


第40図 S I 01・02・03堅穴住居跡、出土土器(2)



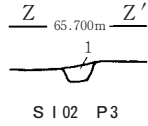
S I 02 竪穴住居跡 P 1 (X-X')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、地山少量混入。



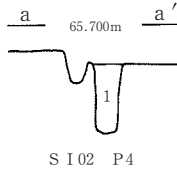
S I 02 竪穴住居跡 P 2 (Y-Y')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、炭化粒・焼土粒微量混入、地山微量混入。



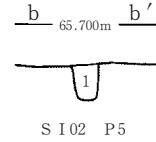
S I 02 竪穴住居跡 P 3 (Z-Z')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、炭化粒微量混入、地山少量混入。



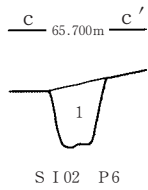
S I 02 竪穴住居跡 P 4 (a-a')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、炭化粒微量混入、地山少量混入。



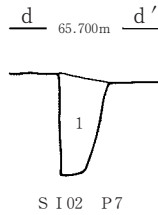
S I 02 竪穴住居跡 P 5 (b-b')

1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱・粘性中、炭化粒微量混入、地山少量混入。



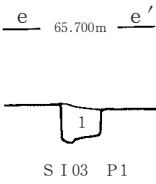
S I 02 竪穴住居跡 P 6 (c-c')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、炭化粒微量混入、地山少量混入。



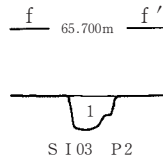
S I 02 竪穴住居跡 P 7 (d-d')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、炭化粒微量混入、地山少量混入。



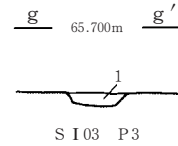
S I 03 竪穴住居跡 P 1 (e-e')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり強・粘性中、炭化粒微量混入、地山少量混入。



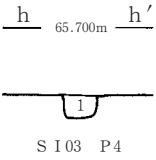
S I 03 竪穴住居跡 P 2 (f-f')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱・粘性中、炭化粒少量混入、地山少量混入。



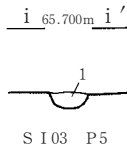
S I 03 竪穴住居跡 P 3 (g-g')

1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強・粘性中、地山少量混入。



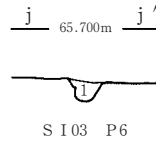
S I 03 竪穴住居跡 P 4 (h-h')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、地山少量混入。



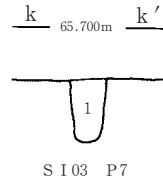
S I 03 竪穴住居跡 P 5 (i-i')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり強・粘性中、地山少量混入。



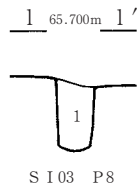
S I 03 竪穴住居跡 P 6 (j-j')

1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中・粘性中、炭化粒微量混入、地山少量混入。



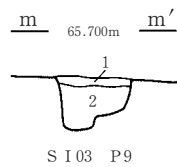
S I 03 竪穴住居跡 P 7 (k-k')

1. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中・粘性中、炭化粒少量混入、地山少量混入。



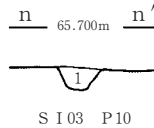
S I 03 竪穴住居跡 P 8 (l-l')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱・粘性中、地山微量混入。



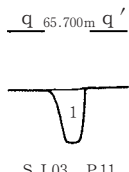
S I 03 竪穴住居跡 P 9 (m-m')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、炭化粒微量混入、地山少量混入。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中・粘性中、炭化粒微量混入、地山ブロック中少量混入。



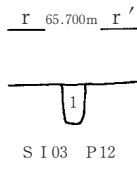
S I 03 竪穴住居跡 P 10 (n-n')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱・粘性中、地山微量混入。



S I 03 竪穴住居跡 P 11 (q-q')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、地山少量混入。



S I 03 竪穴住居跡 P 12 (r-r')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、地山微量混入。



第41図 S I 01・02・03 竪穴住居跡(3)

《床 面》住居の中央と南側部分が僅かに高く、全体的に凹凸がある。

《柱 穴》7基確認した。北西壁に沿うものが3基（P1・6・7）、南西壁に沿うものが3基（P3・4・5）、南東壁に沿うと推定されるものが1基（P2）である。

《カ マ ド》S I 03と切り合う東壁に1基確認した。カマド軸線はN-90°-Wである。

《出 土 遺 物》覆土中から種子状炭化物2点が出土した。

《時 期》重複関係からS I 01よりも古い住居であると考えられる。出土した種子状炭化物2点を、種実同定および放射性炭素年代測定したところ、種子はトチノキ炭化子葉であることが判明し、暦年代範囲は西暦1080年・1085年-1125年という較正結果が出た。住居の重複関係や分析の結果により、本遺構は平安時代後半の住居跡と考えられる。住居の軸線はN-24°-Eである。

S I 03 竪穴住居跡（第39～41図、図版12-1～4）

《位 置 と 確 認》調査区南西のME 45・46、MF 45・46区に位置し、IV層で確認した。平成12年度の確認調査時に試掘したトレンチによって検出された遺構である。北壁・東壁の北側は削平を受けており、南壁と東壁の南側のみ確認した。

《規模と平面形》規模は長軸5.83m（残存値）、短軸3.20m（推定値）で、平面形は長方形を呈すると推定される。

《重 複》S I 02と重複しており、S I 02に切られている。

《土 層》覆土は試掘トレンチによって残っていなかった。

《 壁 》長さは北壁3.26m（推定値）、西壁5.38m（推定値）、東壁5.80m（残存値）、南壁2.32m（残存値）である。

《床 面》削平を受けていたため詳細な時期は不明であるが、ほぼ平坦である。

《柱 穴》12基確認した。南壁と東壁に沿うものが8基（P2・3・4～10）、北壁に沿うと推定されるものが1基（P1）、住居内部に位置するものが3基（P4・11・12）である。

《カ マ ド》4層に分層した。カマドは焼土が僅かに残っているのみで、平面形は円形を呈する。カマド軸線はN-72°-Wである。

《出 土 遺 物》微細な土師器片が出土したものの磨滅が著しい。

《時 期》重複関係からS I 02よりも古い住居であると考えられる。また、この3軒の住居跡は時期が前後する一連の住居跡であると想定され、重複関係からS I 03→02→01の順で新しくなり、建て替えまたは増改築が行われたものと考えられる。住居の軸線はN-23°-Eである。

S I 16 竪穴住居跡（第42～44図、図版13-1～5、22-1）

《位 置 と 確 認》調査区北端のL T 56・57・58区、MA 56・57区に位置し、IV層で確認した。調査区北側境界線上にあり、住居の半分近くは調査区外にあるため、全体を調査することが出来なかった。

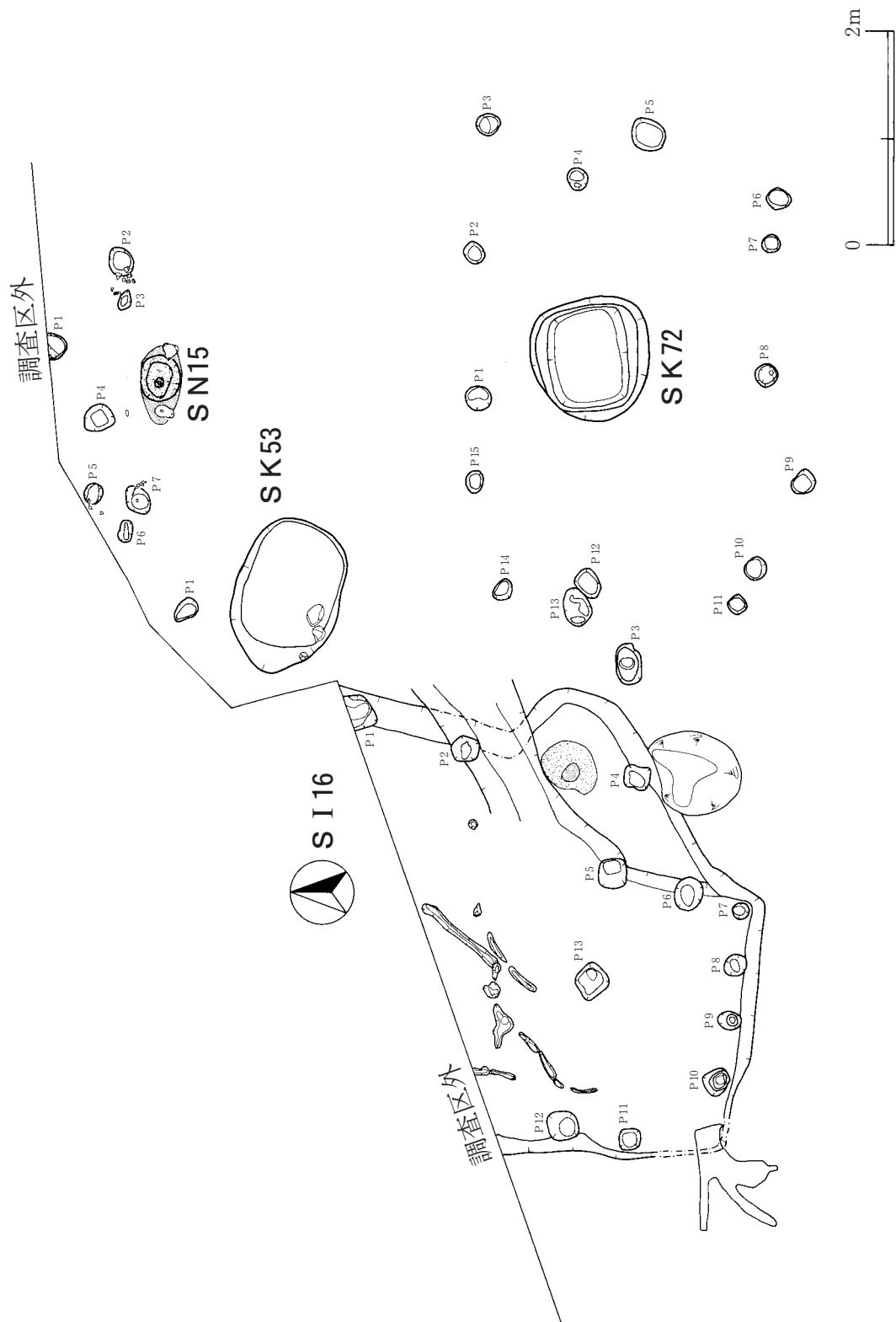
《規模と平面形》規模は長軸4.60m、短軸3.00mで、部分的ではあるが平面形は隅丸方形を呈するものと想定される。

《重 複》確認した部分での重複は見られなかった。

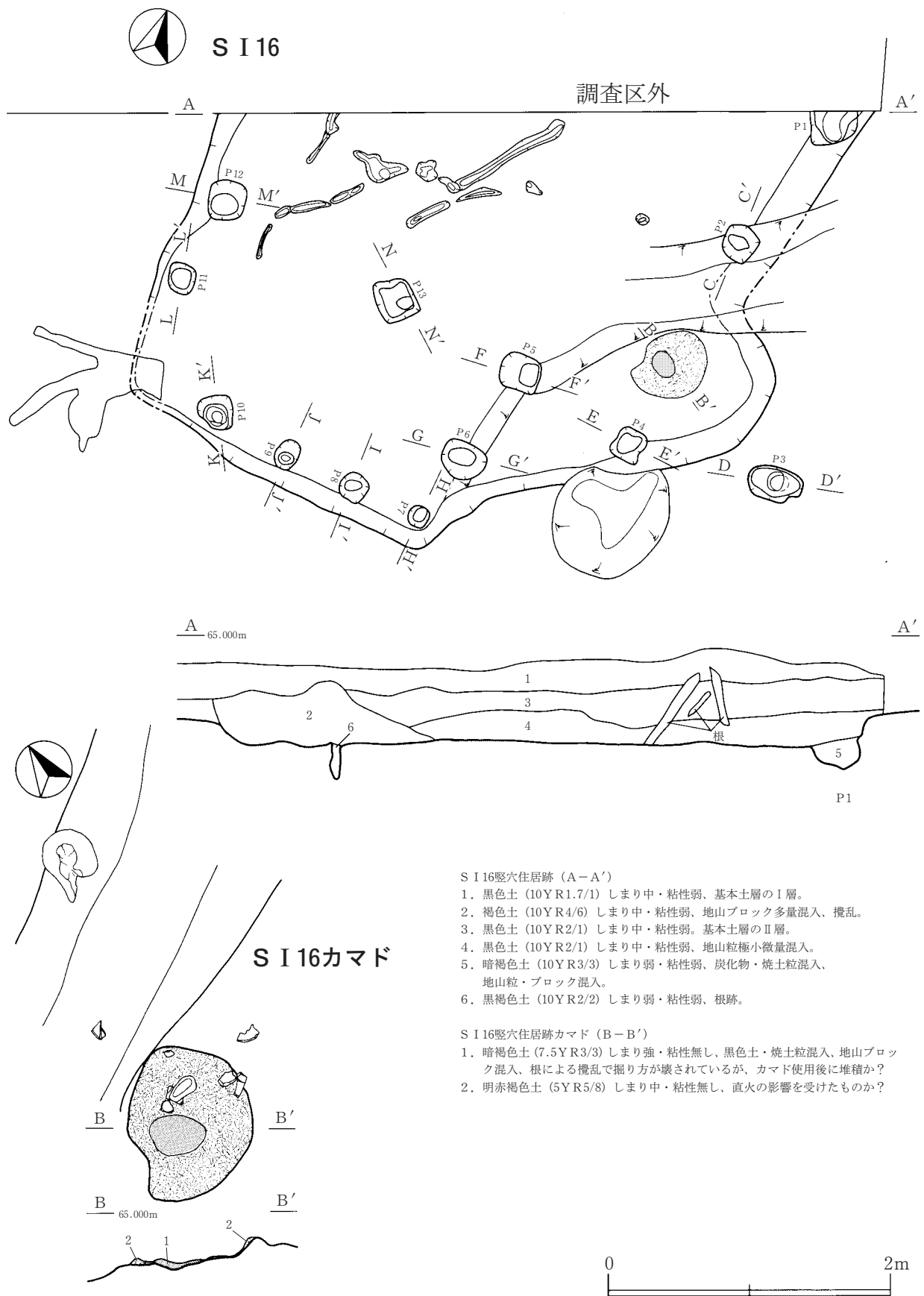
《土 層》6層に分層した。1・3・4層は自然な堆積状況であるが、2層は住居西壁の立ち上がりに沿う層である。

《 壁 》遺構確認面からの壁の深さは0.34mで、東壁4.48m、西壁2.06m、南壁2.30mである。

《床 面》平坦である。調査区境界の北側西寄りに溝状の穴が数カ所確認された。



第42図 S I 16竪穴住居跡(1)



S I 16竪穴住居跡 (A-A')

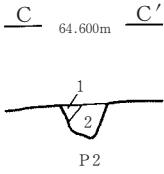
1. 黒色土 (10Y R1.7/1) しまり中・粘性弱、基本土層のI層。
2. 褐色土 (10Y R4/6) しまり中・粘性弱、地山ブロック多量混入、攪乱。
3. 黒色土 (10Y R2/1) しまり中・粘性弱。基本土層のII層。
4. 黒色土 (10Y R2/1) しまり中・粘性弱、地山粒極小微量混入。
5. 暗褐色土 (10Y R3/3) しまり弱・粘性弱、炭化物・焼土粒混入、地山粒・ブロック混入。
6. 黒褐色土 (10Y R2/2) しまり弱・粘性弱、根跡。

S I 16竪穴住居跡カマド (B-B')

1. 暗褐色土 (7.5Y R3/3) しまり強・粘性無し、黒色土・焼土粒混入、地山ブロック混入、根による攪乱で掘り方が壊されているが、カマド使用後に堆積か？
2. 明赤褐色土 (5Y R5/8) しまり中・粘性無し、直火の影響を受けたものか？

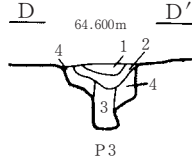
第43図 S I 16竪穴住居跡(2)

長野岱Ⅲ遺跡



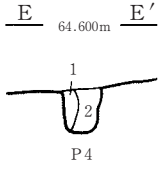
S I 16竪穴住居跡P 2 (C-C')

1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱・粘性弱、地山粒微量混入。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中・粘性強、地山ブロック多量混入。



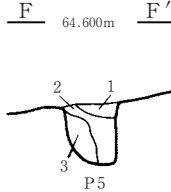
S I 16竪穴住居跡P 3 (D-D')

1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中・粘性弱。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強・粘性強、地山粒・ブロック微量混入。
3. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり弱・粘性弱、地山粒微量混入。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強・粘性中、地山粒・ブロック多量混入。



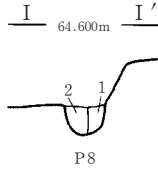
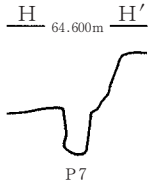
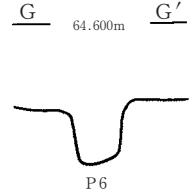
S I 16竪穴住居跡P 4 (E-E')

1. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱・粘性強、地山粒微量混入。
2. 褐色土 (10YR4/6) しまり強・粘性強。



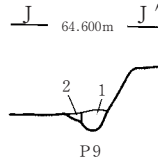
S I 16竪穴住居跡P 5 (F-F')

1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中・粘性中。
2. 褐色土 (10YR4/4) しまり強・粘性強。
3. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり強・粘性強。



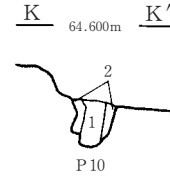
S I 16竪穴住居跡P 8 (I-I')

1. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱・粘性強、地山粒微量混入。
2. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり強・粘性強。



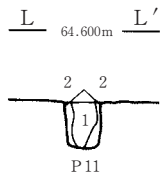
S I 16竪穴住居跡P 9 (J-J')

1. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱・粘性強、地山粒微量混入。
2. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり強・粘性強。



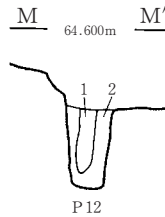
S I 16竪穴住居跡P10 (K-K')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱・粘性中、地山粒微量混入。
2. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり中・粘性弱、地山粒・ブロック多量混入。



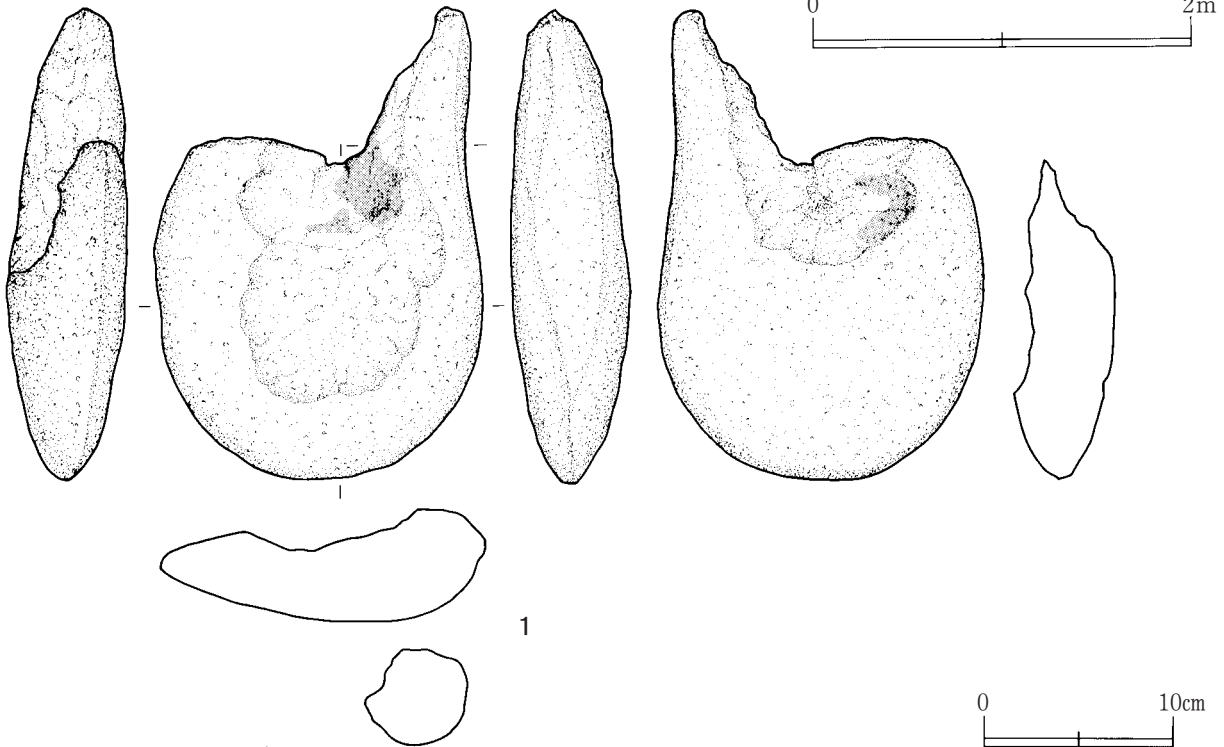
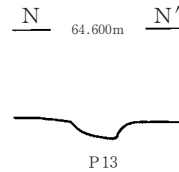
S I 16竪穴住居跡P11 (L-L')

1. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、地山粒微量混入。
2. 褐色土 (10YR4/6) しまり中・粘性中、地山粒・ブロック多量混入、地山土による根固めか？

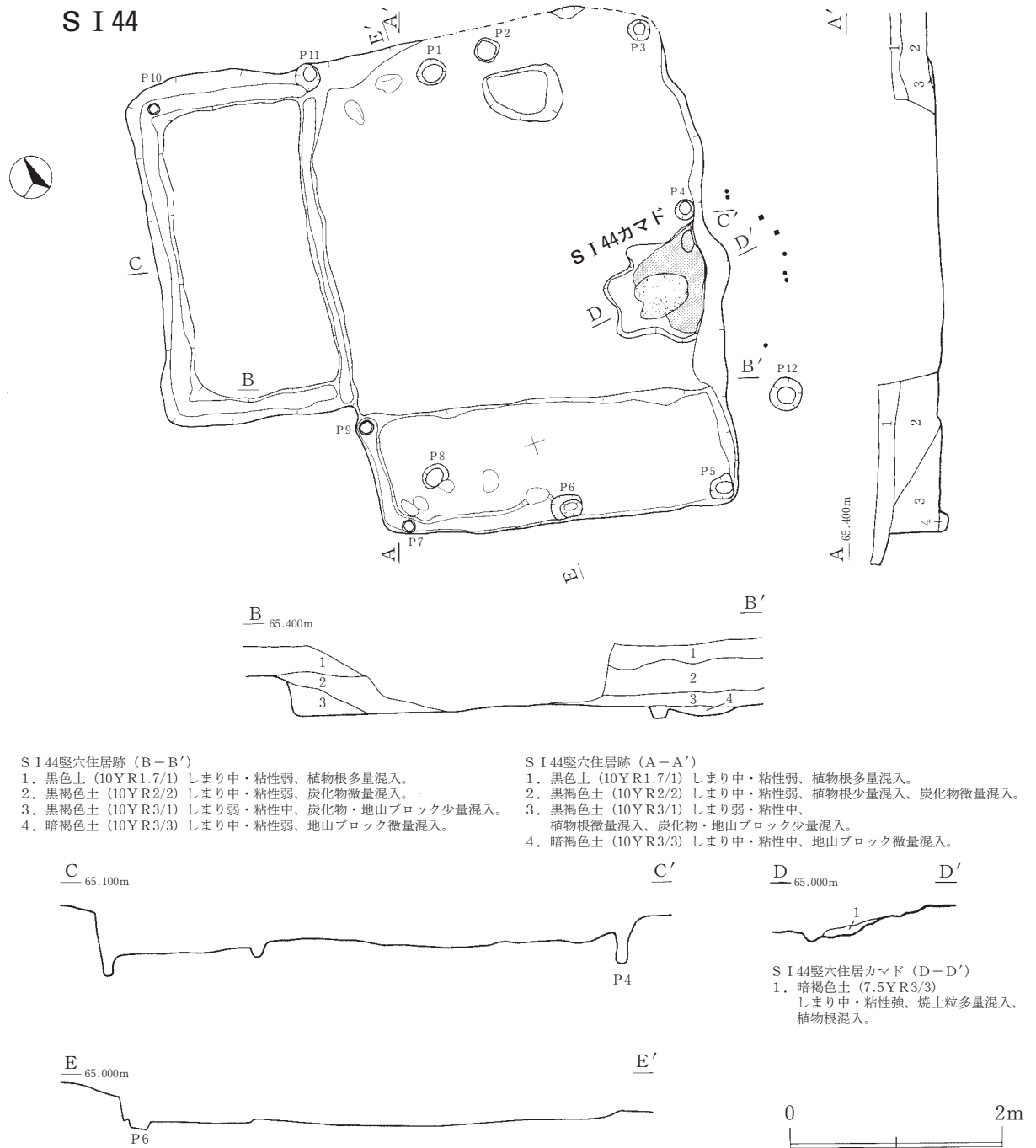


S I 16竪穴住居跡P12 (M-M')

1. 黒色土 (10YR2/3) しまり弱・粘性弱、地山粒微量混入。
2. 暗褐色土 (7.5YR3/4) しまり強・粘性強、地山ブロック多量混入。



第44図 S I 16竪穴住居跡(3)



第45図 SI 44 堅穴住居跡

《柱 穴》13基確認した。住居の西壁と南壁には、ほぼ等間隔に柱穴が並ぶ。

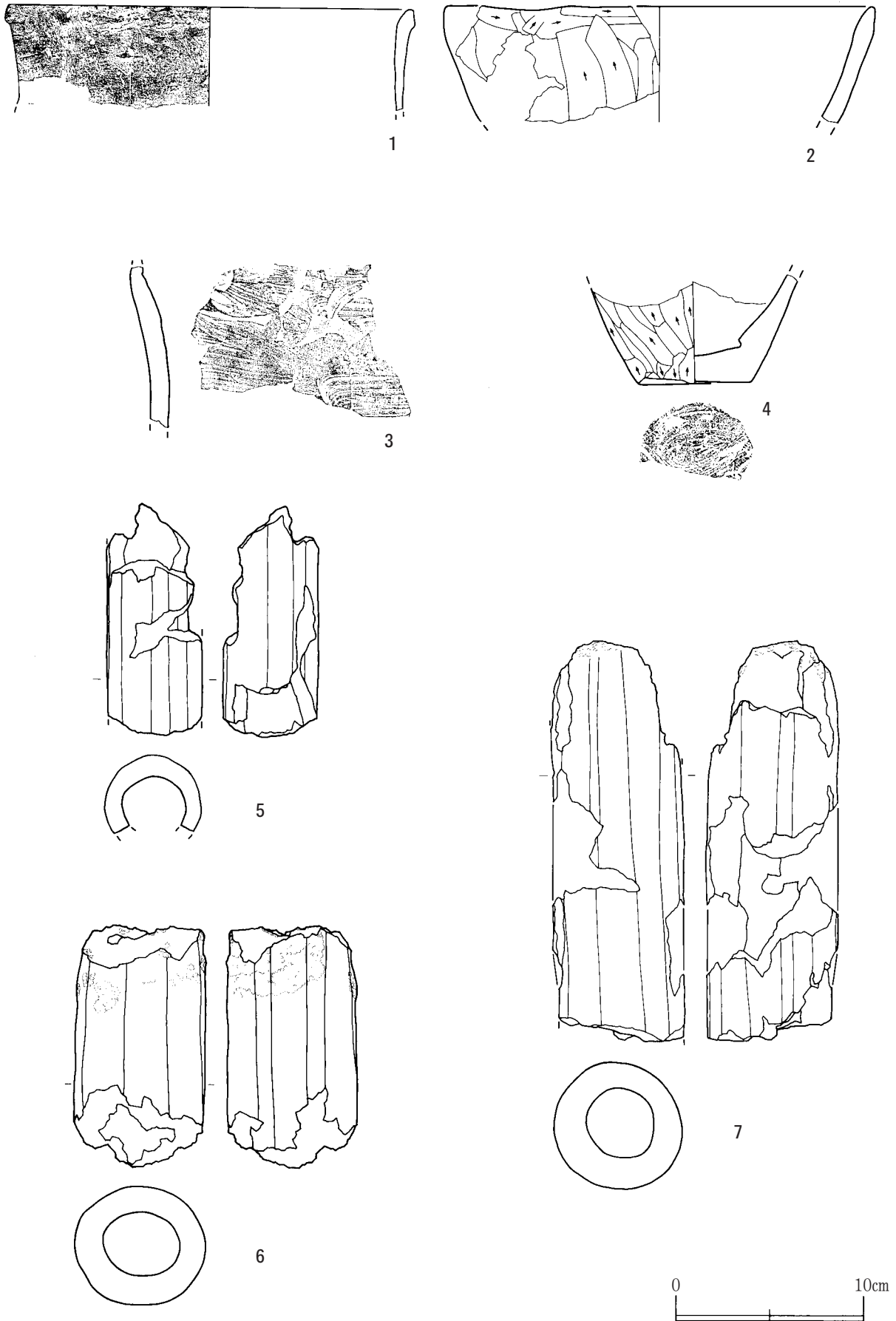
《カ マ ド》住居の東壁が張り出す位置にカマド1基を確認した。覆土は2層に分層した。カマド軸線はN-78°-Wである。

《出 土 遺 物》第44図の金床石1点と土師器破片数点が出土した。

《時 期》詳細な時期は不明であるが、規模・形態から古代(平安時代)の堅穴住居跡であると考えられる。住居の軸線はN-9°-Eである。

SI 44 堅穴住居跡(第45・46図、図版14-1~5、22-2、23-1)

《位 置 と 確 認》調査区中央南西寄りのME48・49・50、MF48・49・50区に位置し、IV層で確認した。



第46図 S I 44 竖穴住居跡出土遺物

《規模と平面形》規模は長軸5.42m、短軸4.83mで、平面形は方形を呈し、西側と南側に張り出しが付加された形態を示す。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》4層に分層した。1～3層には炭化物が含まれている。

《壁》遺構確認面からの壁の深さは0.56mである。長さは東壁4.63m、西壁4.37m（張り出し部分3.18m）、南壁5.27m（張り出し部分3.34m）、北壁4.98m（残存値）である。

《床面》ほぼ平坦である。西側と南側の張り出しは住居本体より僅かに低い。

《柱穴》11基確認した。

《カマド》東壁の南寄りに1基確認した。多量の焼土が壁に接して分布し、カマド軸線はN-85°-Wである。

《出土遺物》カマドの覆土中からフイゴ羽口と土師器片（第46図1～7）が出土した。1～4は土師器で5～7はフイゴ羽口である。1は土師器甕の口縁部破片、2は土師器坏の口縁部破片、3は土師器甕の胴部破片、4は土師器甕の底部で、時期は平安時代後半に比定される。

《時期》出土した土師器と羽口から、本遺構は平安時代後半の竪穴住居跡であると考えられる。カマドが付設されているが、この覆土中から土器以外にフイゴ羽口も出土しているため、隣接するSS43鍛冶炉と関連を持つ工房の可能性もある。住居の軸線はN-11°-Eである。

（2）土坑

SK14土坑（第47図、図版15-1・2）

《位置と確認》調査区北側のLR55、LS55区に位置し、IV層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.16m、短軸1.10m、深さ1.10mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》6層に分層した。覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・底面》南北両側とも垂直に近い急な立ち上がりである。底面は狭いがほぼ平坦である。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。底面に自然礫が2点確認された。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の土坑と考えられる。

SK53土坑（第47図、図版15-3・4）

《位置と確認》調査区北側のLS57・58、LT57・58区に位置し、IV層で確認した。南西にSI16竪穴住居跡が、北東にSN15焼土遺構が、南東にSK72土坑が隣接する。

《規模と平面形》規模は長軸1.47m、短軸1.00m、深さ0.82mで、平面形は楕円形を呈する。

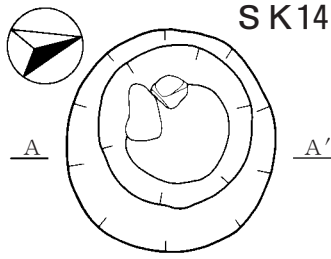
《重複》重複は見られなかった。遺構の上面は攪乱を受けている。

《土層》6層に分層した。2層以下の覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・底面》東側が垂直な立ち上がりなのに対し、西側は比較的緩やかに立ち上がる。底面は僅かながら西側に傾斜している。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。底面に自然礫3点が確認された。

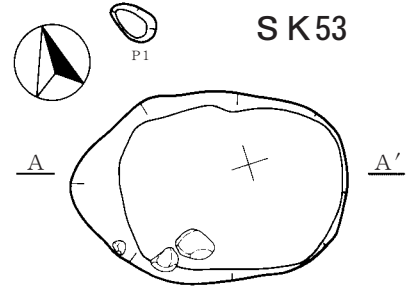
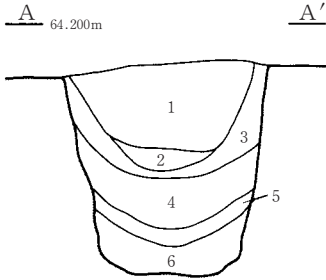
《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の土坑と考えられる。



SK14

SK14土坑 (A-A')

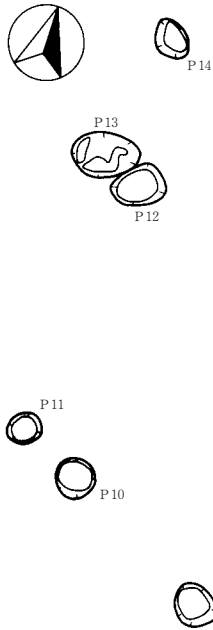
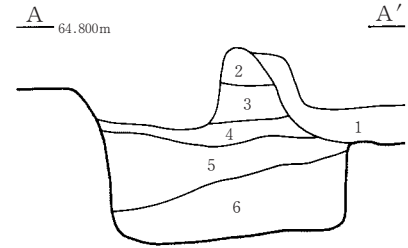
1. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり中・粘性強、細かい根が所々に見られる。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強・粘性強、地山粒・ブロック混入、砂質状粒混入。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中・粘性強。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強・粘性強、地山ブロック大混入。
5. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強・粘性強、南方に地山ブロック混入。
6. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強・粘性強。



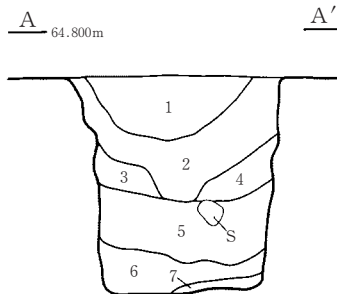
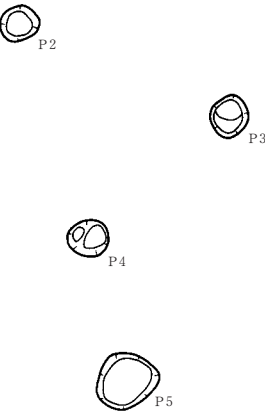
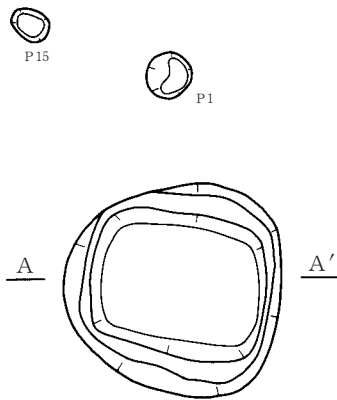
SK53

SK53土坑 (A-A')

1. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中・粘性中。近年の盛土造成時の掘り込みによる攪乱。
2. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり弱・粘性中。
3. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱・粘性中、地山粒微量混入。
4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱・粘性中、地山ブロック多量混入。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり中・粘性中、炭化物粒・ブロック混入、灰色砂質粒混入、地山粒・ブロック混入。
6. 黒色土 (10YR2/1) しまり中・粘性中、地山ブロック小微量混入。

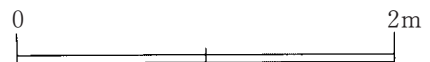


SK72

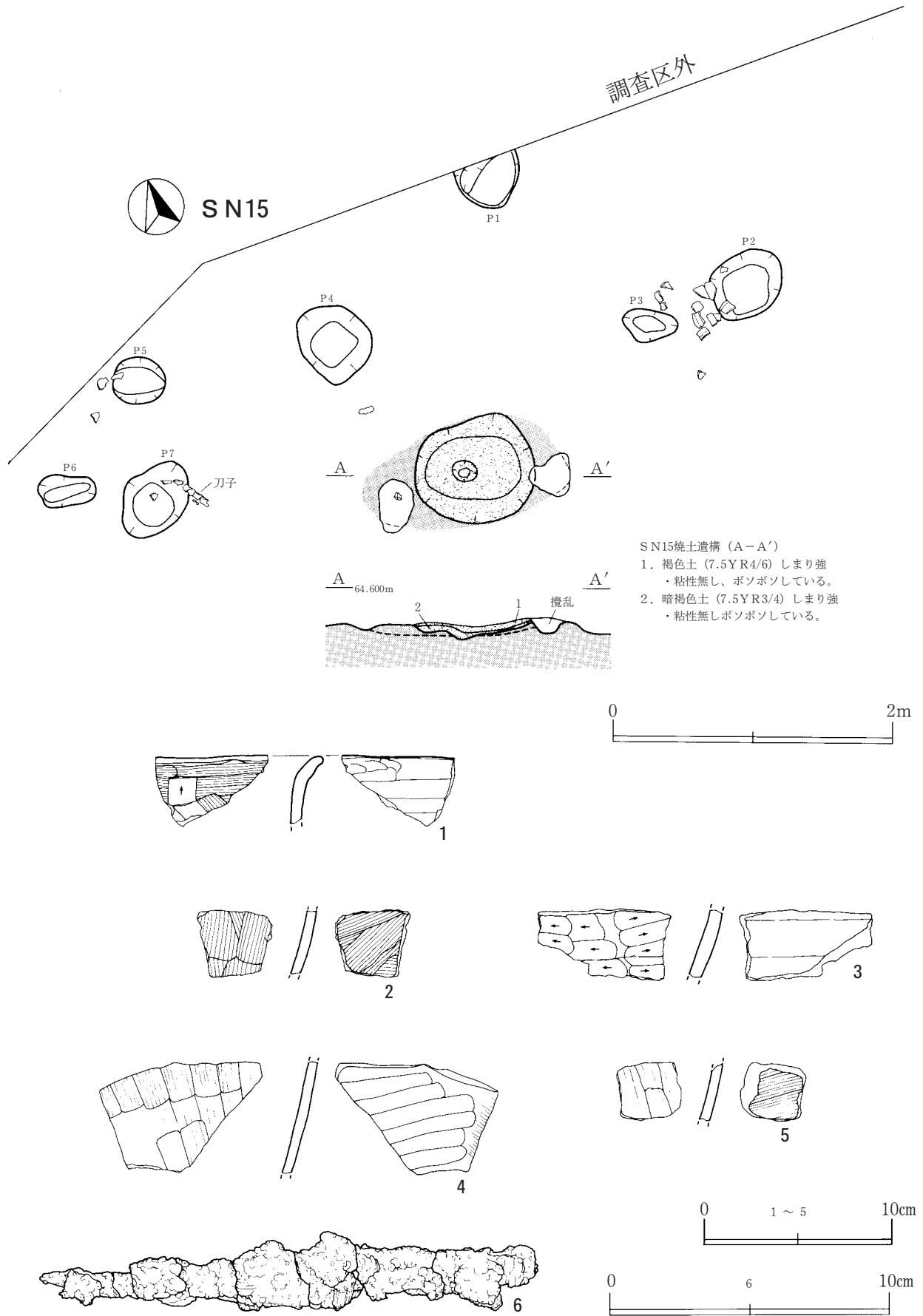


SK72土坑 (A-A')

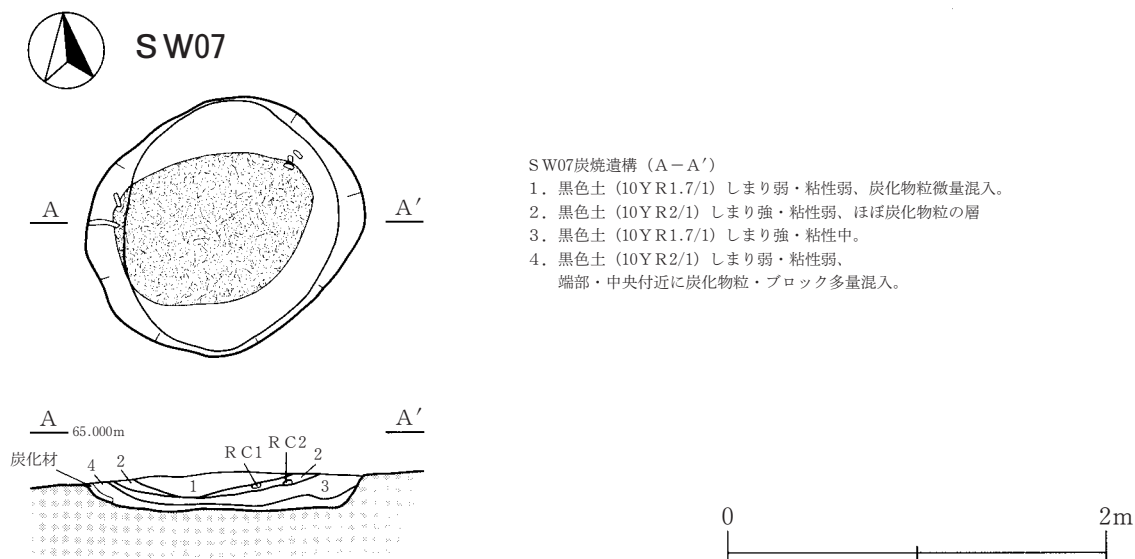
1. 黒色土 (10YR1.7/1) しまり強・粘性強、細かい根が入り込んでいる。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強・粘性強、地山粒混入。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強・粘性強、白灰色の砂質粒混入。
4. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強・粘性強、地山ブロック多量混入。
5. 黒色土 (10YR2/1) しまり強・粘性強、地山ブロック多量混入。
6. 明黄褐色土 (10YR6/6) しまり中 (水分を含んでいるため)・粘性強。
7. 極暗赤褐色土 (5YR2/3) しまり中 (水分を含んでいるため)・粘性強。



第47図 SK14・53・72土坑



第48図 SN15焼土遺構・出土遺物



第49図 SW07炭窯

SK72土坑 (第47図、図版15-5・6)

《位置と確認》調査区北側のLS57区に位置し、IV層で確認した。西にSI16竪穴住居跡が、北西にSK53土坑が、北にSN15焼土遺構が隣接する。

《規模と平面形》規模は長軸1.14m、短軸1.12m、深さ1.14mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》7層に分層した。覆土は自然な堆積状況である。

《断面形・底面》東西両側ともほぼ垂直な立ち上がりである。2～4層部分の立ち上がりに波形の段差が見られる。床面の平面形は隅丸方形を呈し、ほぼ平坦である。

《柱穴》本遺構の周囲を取り囲むように14基の柱穴様ピットが確認された。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。5層中に自然礫1点が確認された。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代(平安時代)の土坑と考えられる。

(3) 焼土遺構

SN15焼土遺構 (第48図、図版16-4・5、23-2)

《位置と確認》調査区北端のLS58区に位置し、IV層で確認した。本遺構に伴う柱穴様ピットの一部は調査区外にも及ぶ。なお、南西にSK53土坑が、南にSK72土坑が隣接する。

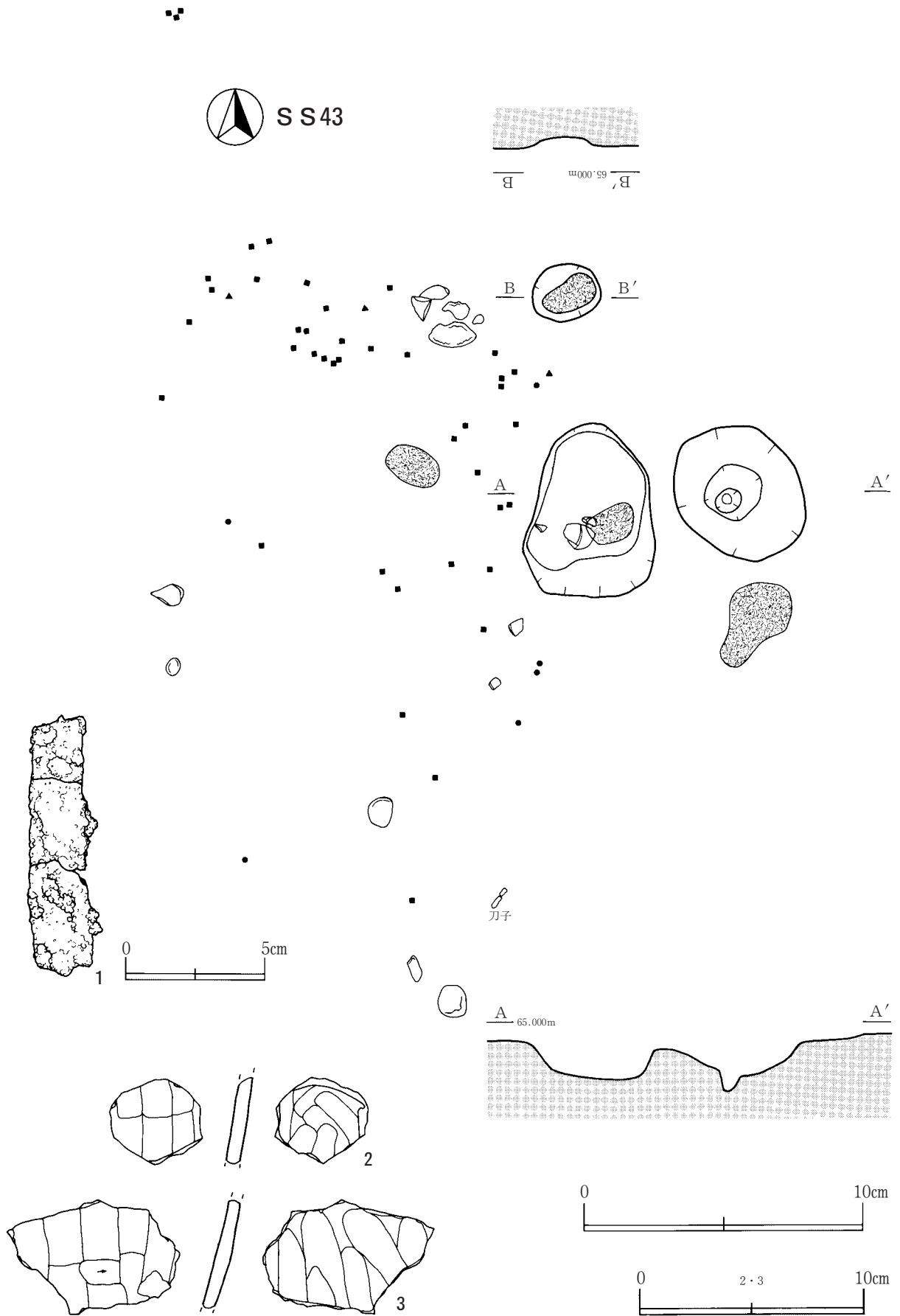
《規模と平面形》規模は長軸0.43m、短軸0.37m、深さ0.05mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

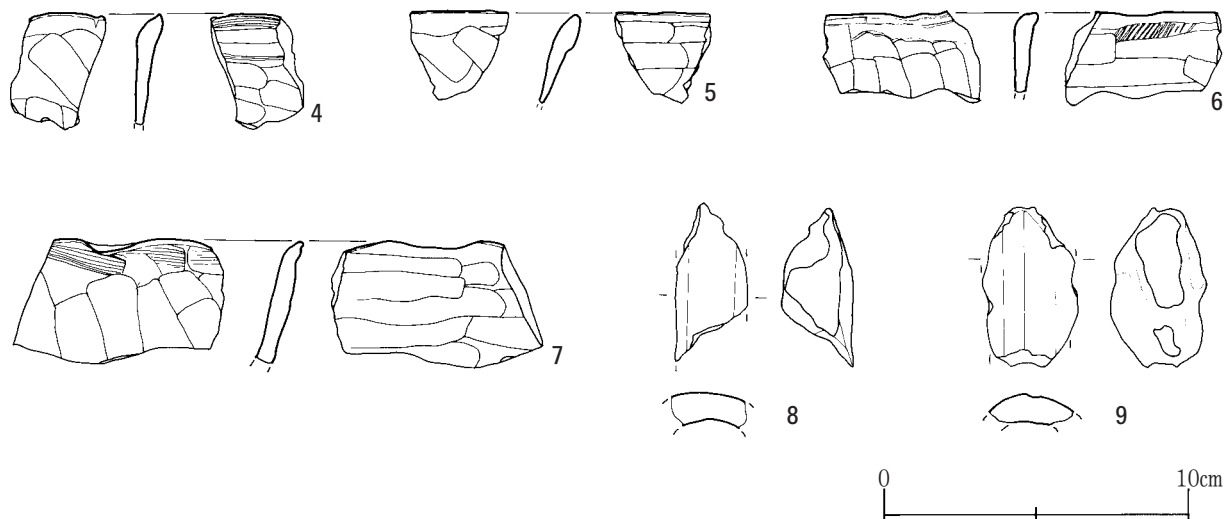
《土層》2層に分層した。いずれも全面が焼土であり、硬く締まっていた。

《断面形・底面》中央やや西寄りが窪んでいるほかは、浅く緩い立ち上がりである。

《柱穴》本遺構の北側に7基の柱穴様ピットが確認された。P1・2・4・7は等間隔な位置にある。



第50図 SS43鍛冶炉・出土遺物(1)



第51図 S S 43鍛冶炉出土遺物(2)

《出土遺物》第48図1～6に掲載した遺物が出土した。1は土師器甕の口縁部破片である。2～5は土師器甕または坏の胴部破片である。6は鉄製品の破片（6点）であり、これを接合した結果、刀子であることが判明した。また、焼土の周囲から微細な鉄滓が出土している。

《時期》出土した土師器から、本遺構は平安時代後半の焼土遺構であると考えられる。

（4）炭窯

SW07炭窯（第49図、図版16-1～3）

《位置と確認》調査区北端のL O 58、L P 58区に位置し、IV層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.44m、短軸1.22m、深さ0.18mで、平面形は円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土層》4層に分層した。すべての層に炭化物が含まれており、2層は全面的に炭化物に覆われていた。4層は東端部に炭化材が固まって確認された。

《断面形・底面》西側が緩い立ち上がりであるのに対し、東側はやや急に立ち上がる。底面は平坦であり、焼土が底面中心の大半を占める。

《出土遺物》覆土中から遺物は出土しなかった。

《時期》出土遺物がないため詳細な時期は不明である。検出位置や規模・形態から古代（平安時代）の遺構であると考えられる。

（5）鍛冶炉

S S 43鍛冶炉（第50・51図、図版17-1～3、23-2）

《位置と確認》調査区中央西寄りのMC 48・49、MD 48・49区に位置し、IV層で確認した。S I 44竪穴住居跡の東に隣接する。

《規模と平面形》規模は長軸1.24m、短軸0.96m、深さ0.39mで、平面形は楕円形を呈する。

《重複》重複は見られなかった。

《土 層》鉄滓が出土する範囲を掘り下げていった結果、焼土が集中する場所を4箇所確認し、炉であることが判明したが、覆土を掘り上げてしまい土層を記録することができなかった。

《断面形・底面》西側は緩く立ち上がり、東側はやや急に立ち上がる。

《出土遺物》第50図1～3および第51図4～9の遺物が出土した。1は炉の南側2mの地点で確認された鉄製品で、接合の結果、刀子と判明した。2と3は土師器の胴部破片、4～7は土師器の口縁部破片、8と9は羽口破片である。このほか鉄滓が中コンテナ換算で2箱分出土した。

《時 期》出土した土師器から、本遺構は平安時代後半の鍛冶炉であると考えられる。

第3節 遺構外出土遺物

長野岱Ⅲ遺跡では、調査区の面積3,200㎡内で遺構外からも遺物が出土している。これは、平成11年度に実施された遺跡範囲確認調査の際に出土した遺物も含まれる。これらの遺物を第52図から第57図に掲載した。内訳は縄文土器15点、石器6点、平安時代の土師器2点、土製品2点の合計25点である。

1 縄文時代の遺構外出土遺物

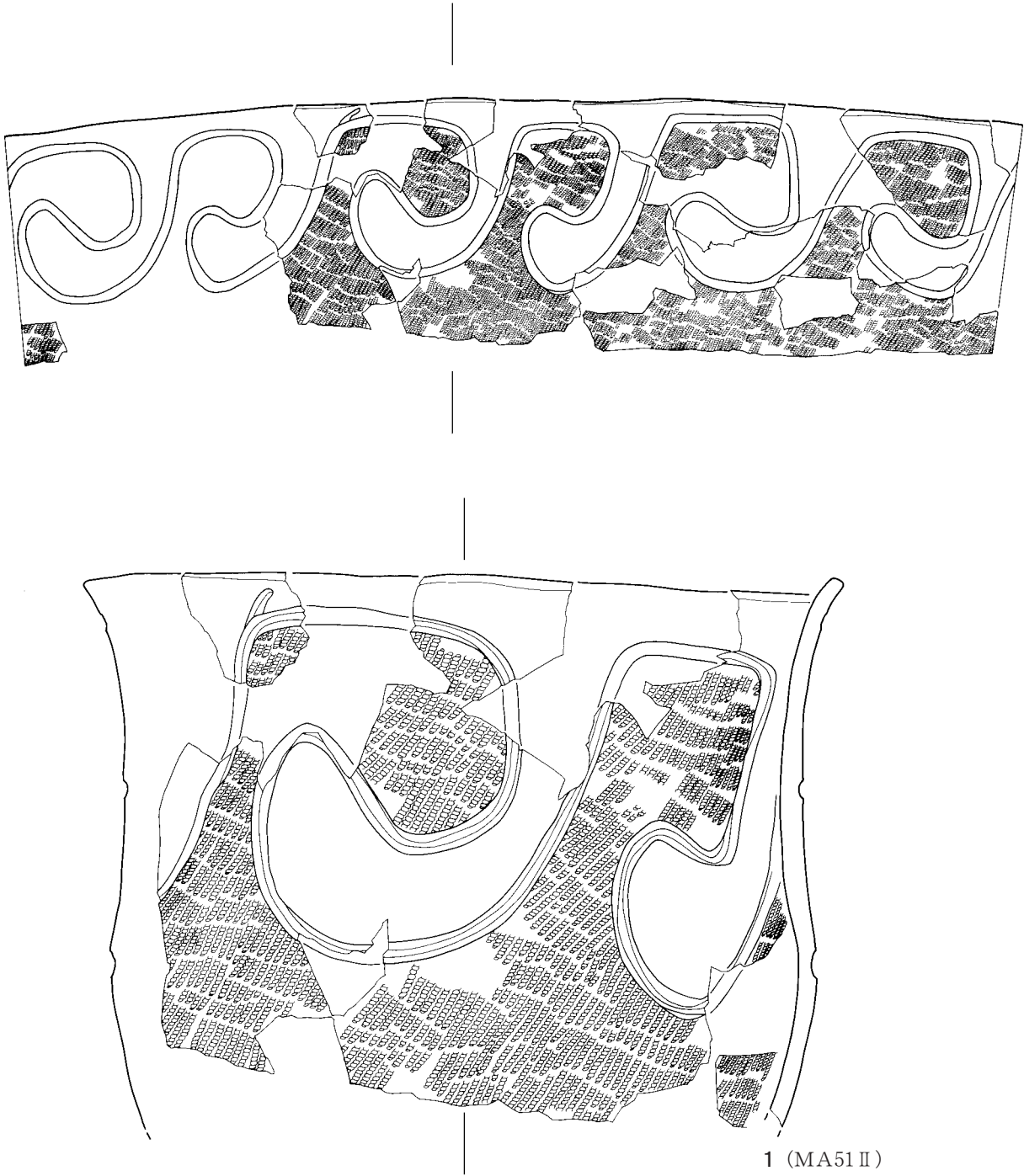
(1) 土器 (第52図～第54図)

第52図1 (図版26-4) は、調査区中央部よりやや北の沢部分に接するMA51の基本層序Ⅱ層で出土した中期大木式土器である。口縁部が僅かに外反し、胴部中央がやや膨らむ深鉢形土器で、胴部下半から底部は欠損している。口縁部に並行する沈線から「J」字状の文様が5単位認められ、欠損している部位があるものの、口径から判断して計6単位で構成される文様帯であると考えられる。口唇部および口縁部から「J」字状文の内側が磨り消されており、磨消縄文手法を用いて製作されている。土器内面には、篋状の工具によって削った跡が明瞭に見られる。これらの特徴から、中期末葉の大木10式土器であると考えられる。

第53図2 (図版26-5) は、調査区南端に近いMD43の基本層序Ⅳ層で出土した。口縁部が内彎し、胴部上半に最大径を持つ深鉢形土器である。口唇部は小刻みの連続波状を呈し、口縁外面は縄文が磨り消されている。口縁部と胴部の間は一条の沈線で区画されており、この沈線から胴部全面に縄文が施される。なお底部は欠損している。土器の内外面に黒斑や煤状炭化物が付着しており、煮沸に使用された痕跡を留める。晩期中葉の大洞C1式土器であると考えられる。第53図3 (図版24-1) は深鉢形土器の胴部である。筒型の胴部ではほぼ垂直に立つ。第54図4は深鉢形土器の口縁部である。口唇は水平で口縁部は僅かに内彎する。5～14 (図版24-2) は深鉢形土器の胴部破片である。5は沈線によって描かれる文様帯に近い部位であり、12・13は胴部下半の破片である。15のみ底部破片である。

(2) 石器 (第55図～第56図、図版25-1)

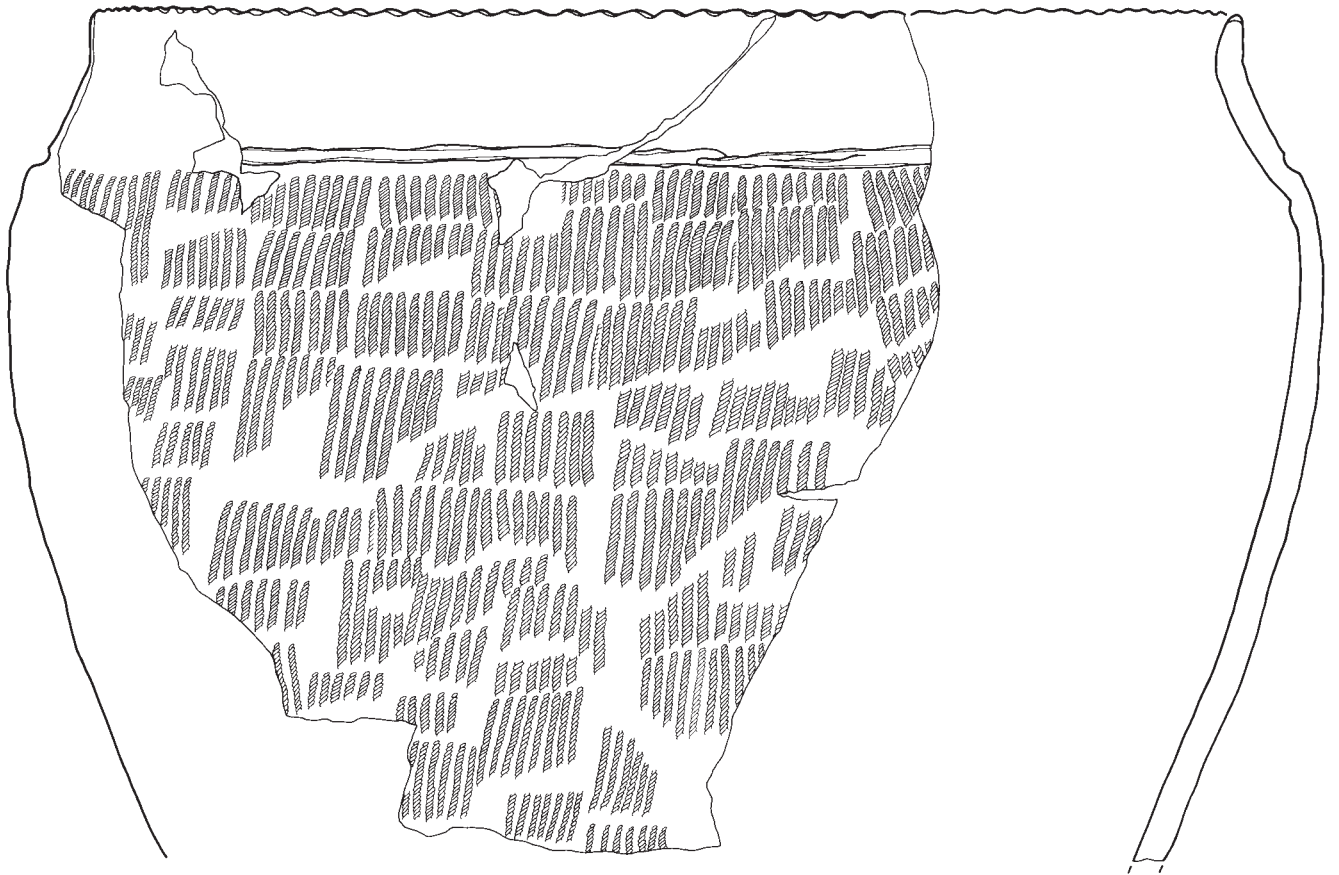
第55図S1と2は石匙である。S1は横形の石匙で三角形状を呈する。S2は縦形の石匙で右側が傾く台形状を呈する。S3と4は打製石斧である。S3は撥形を呈し、裏面に自然面を残す片刃で、刃部には打撃による使用痕が見られる。S4は中央がくびれた分銅形を呈し、握り部の末端が欠損している。刃部の欠損も著しい。第56図S5と6は磨製石斧である。S5は両側縁および頭部が研磨された円刃の定角式磨製石斧である。S6は折損しており片側のみ出土した。



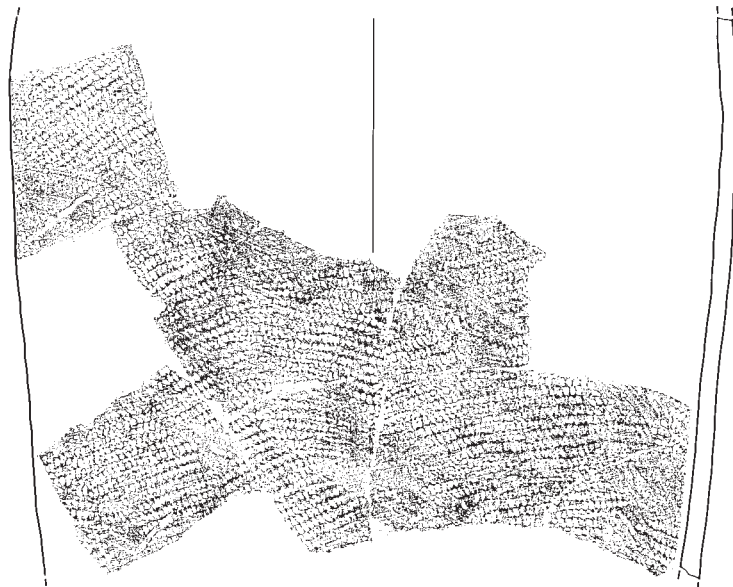
1 (MA51 II)



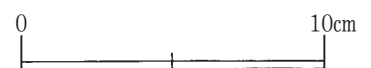
第52図 遺構外出土土器(1)



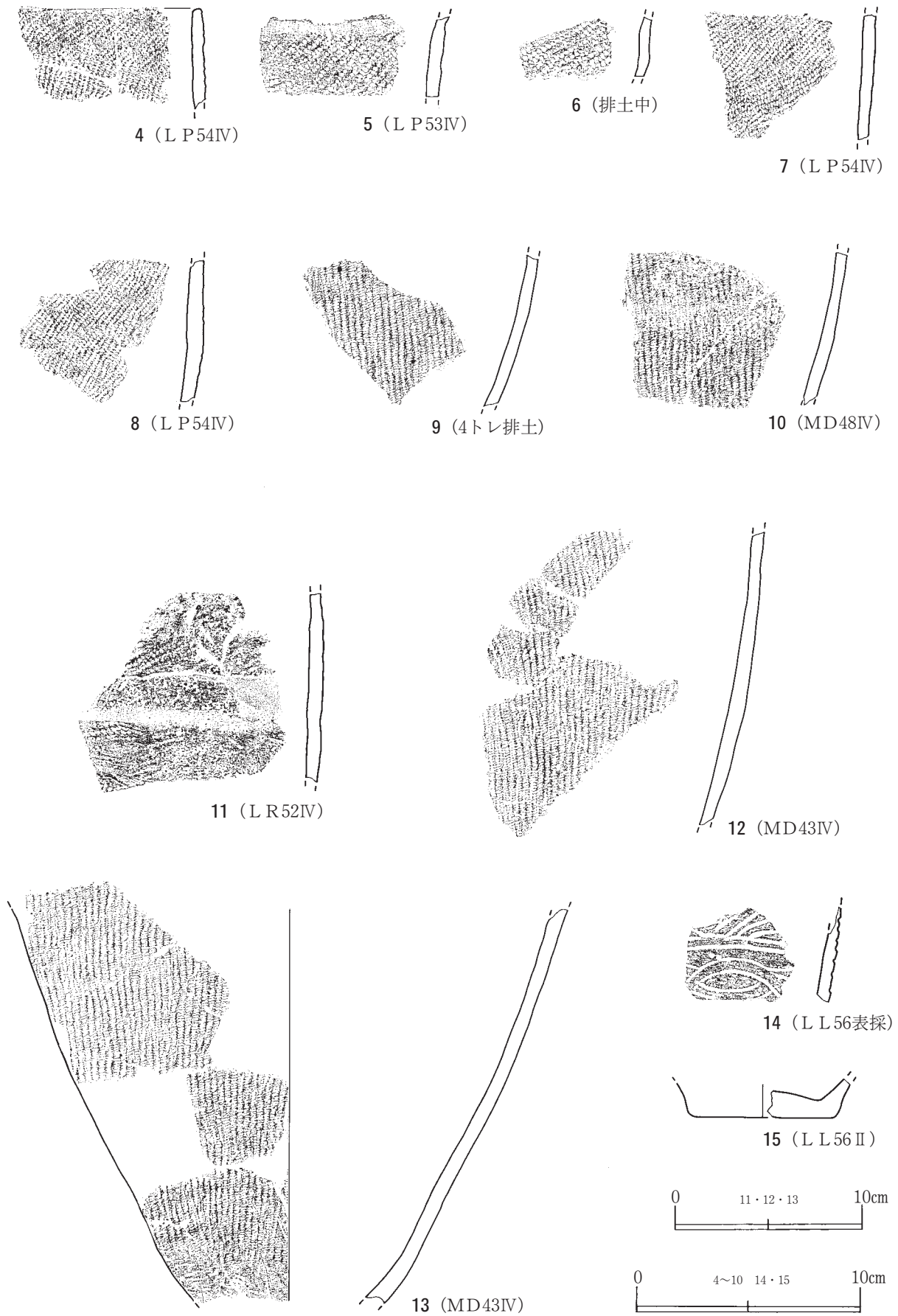
2 (MD43IV)



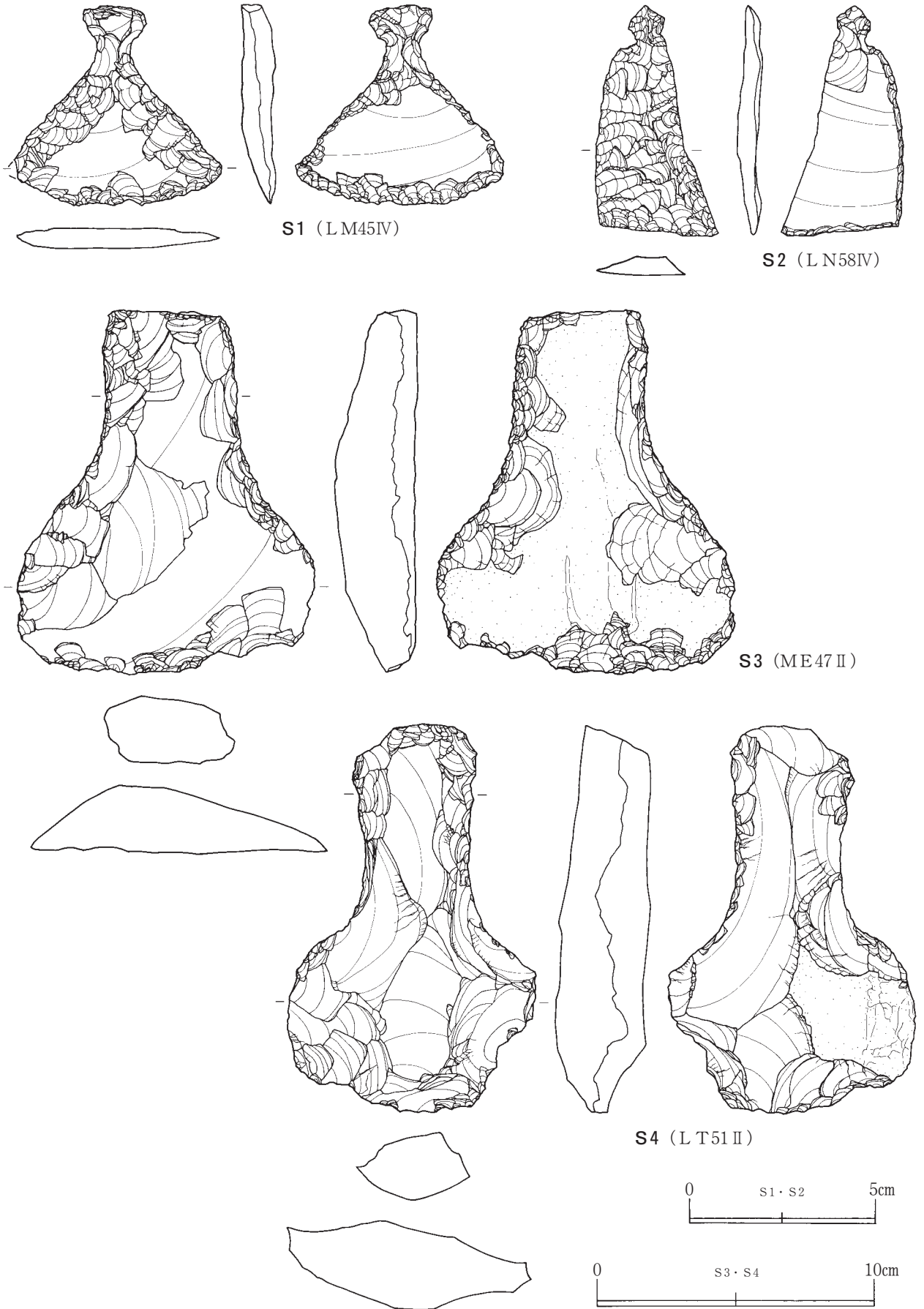
3 (LQ53IV)



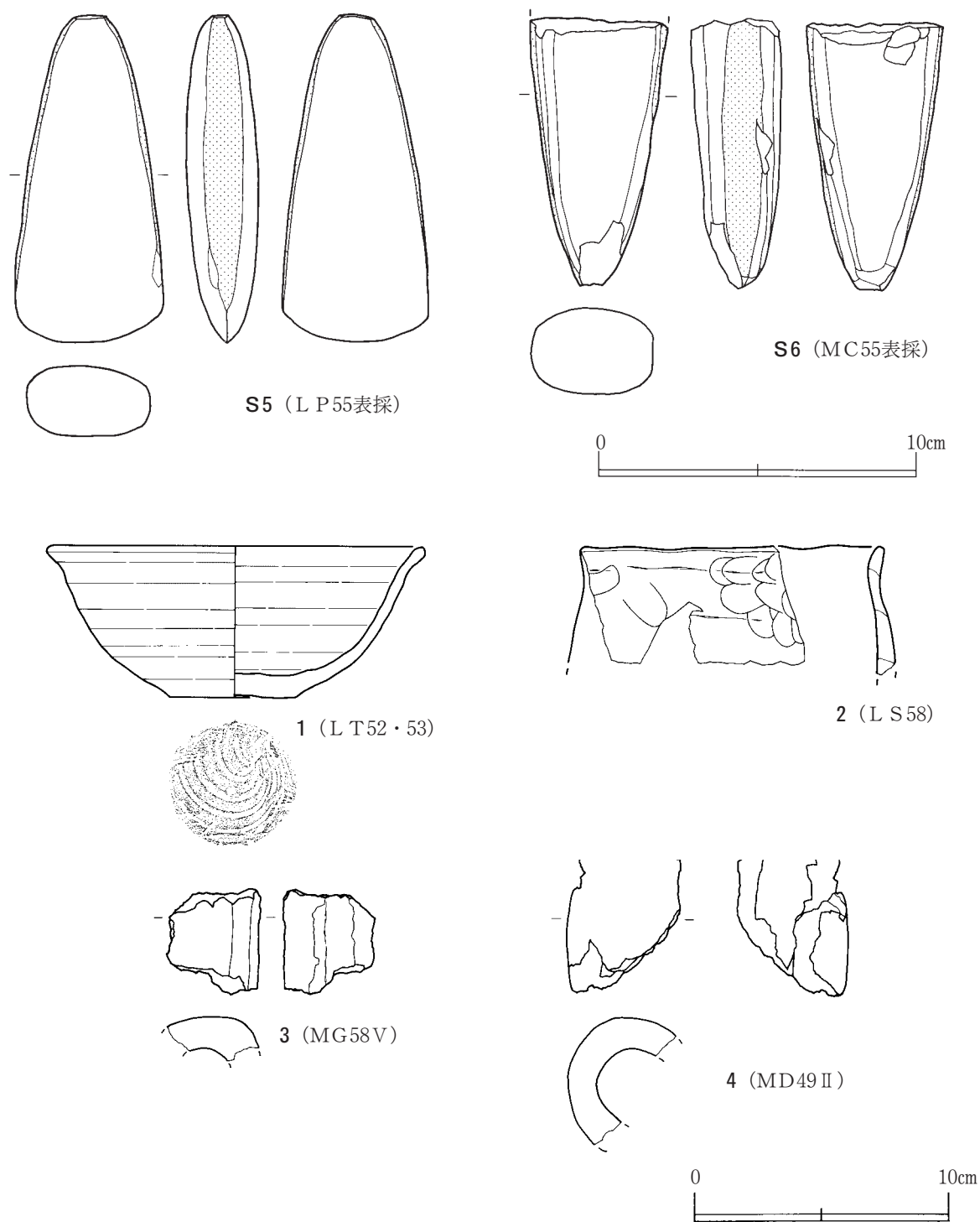
第53図 遺構外出土土器(2)



第54図 遺構外出土土器(3)



第55図 遺構外出土石器(1)



第56図 遺構外出土遺物

2 古代～中世の遺構外出土遺物

(1) 土器 (第56図、図版25-2)

第57図1・2は土師器である。1は土師器の坏で底面に回転糸切りの跡が見られる。2は土師器甕の口縁部破片である。輪積みの痕跡がありヘラケズリによって器形・器厚を整えている。

(2) 土製品 (第56図、図版25-2)

第57図3・4はフィゴの羽口である。3は口径の4分の1ほどの破片で僅かに焼けている。4は羽口端部で著しく焼けている。

第3章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

1. はじめに

長野岱Ⅲ遺跡より検出された炭化物、植物片、および土壌有機物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、基本土層Ⅲ層採取火山灰中から採取した土壌有機物1点と炭化物1点、調査区北西角採取火山灰中から採取した炭化物1点、S I 01から採取した炭化種子（トチノキ炭化子葉）2点、S I 02から採取した炭化種子（トチノキ炭化子葉）2点、S I 16カマド内部から採取した植物片1点、S I 44カマド内部から採取した土壌有機物1点の併せて9点である。

土壌有機物試料は、125 μ mのフルイを用いて湿式篩い分けを行ない、フルイを通過したものだけを用い、酸洗浄を施して不純物を除去した。その他の試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した。これら前処理された試料を石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

第4表に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期5,730 \pm 40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさを確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

暦年代較正は約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を**
***またはModernと表記した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさを確

率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

《引用文献》

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第4表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	δ ¹³ C (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1413 (AMS)	土壌有機物 No.1 基本土層Ⅲ層採取 火山灰①	-22.2	1680 ± 30	cal AD 390	cal AD 340 - 410 (97.8%)
PLD-1414 (AMS)	炭化物 No.2 基本土層Ⅲ層採取 火山灰②	-26.7	1230 ± 30	cal AD 780	cal AD 720 - 745 (21.8%) cal AD 770 - 785 (14.8%) cal AD 790 - 830 (39.6%) cal AD 840 - 865 (23.8%)
PLD-1415 (AMS)	炭化物 No.3 調査区北西角採取 火山灰①	-27.5	1120 ± 20	cal AD 900 cal AD 920 cal AD 960	cal AD 895 - 905 (16.3%) cal AD 915 - 925 (18.0%) cal AD 935 - 975 (65.7%)
PLD-1416 (AMS)	炭化種子 No.4 (トチノキ炭化子葉) SI01-RC1	-23.5	920 ± 30	cal AD 1060 cal AD 1085 cal AD 1125 cal AD 1140 cal AD 1155	cal AD 1040 - 1100 (65.4%) cal AD 1115 - 1140 (26.5%)
PLD-1417 (AMS)	炭化種子 No.5 (トチノキ炭化子葉) SI01-RC2	-25.0	910 ± 30	cal AD 1070 cal AD 1080 cal AD 1130 cal AD 1135 cal AD 1160	cal AD 1040 - 1100 (60.0%) cal AD 1115 - 1140 (25.5%) cal AD 1150 - 1165 (10.6%)
PLD-1418 (AMS)	炭化種子 No.6 (トチノキ炭化子葉) SI02-RC1	-22.4	940 ± 30	cal AD 1040 cal AD 1100 cal AD 1115 cal AD 1140 cal AD 1150	cal AD 1035 - 1065 (34.2%) cal AD 1085 - 1125 (44.2%) cal AD 1135 - 1155 (21.6%)
PLD-1419 (AMS)	炭化種子 No.7 (トチノキ炭化子葉) SI02-RC2	-23.3	930 ± 20	cal AD 1045 cal AD 1090 cal AD 1120 cal AD 1140 cal AD 1155	cal AD 1040 - 1065 (35.2%) cal AD 1080 - 1125 (49.8%)
PLD-1420 (AMS)	植物片 No.8 SI16 カマド内部	-27.3	Modern	Modern	*****
PLD-1421 (AMS)	土壌有機物 No.9 SI44 カマド内部	-31.4	Modern	Modern	*****

第2節 長野岱Ⅲ遺跡の火山灰分析

黒澤一男 (パレオ・ラボ)

1. 試料と分析方法

秋田県北秋田郡森吉町の長野岱Ⅲ遺跡から採取された堆積物試料3点を分析対象とした。試料2は南北トレンチMB52・53の基本層序Ⅲ層から採取され、試料1はその試料2とほぼ同一の地点の基本層序Ⅲ層から採取、試料3は北西角の沢覆土から採取された。以上の試料を用いて以下の分析をおこなった。

(1) 火山ガラス比分析

- ① 各試料について篩を用い水洗を行った。1φ (0.5mm : 30メッシュ)、2φ (0.25mm : 60メッシュ)、3φ (0.125mm : 120メッシュ)、4φ (0.063mm : 250メッシュ)、の4枚のふるいを重ね、流水下でふるい分けをおこなった。各ふるいの残渣について、それぞれを乾燥・秤量して粒度組成としてあらわした。
- ② 4φの残渣 (粒径0.125~0.063mm) については、重液 (テトラブロモエタン、比重2.96) を用いて重鉱物 (有色鉱物) と軽鉱物 (無色鉱物) に分離した。

③ 分離した軽鉱物それぞれについて封入剤レークサイトセメントを用いてプレパラートを作成した。それらを偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定、計数し、軽鉱物組成を求めた。軽鉱物は火山ガラスと長石類に分類した。なお、軽鉱物中に含まれる未分解のローム粒子や風化粒子については試料の洗浄のしかたによって含有率が異なる場合があるので、計数の対象から除いた。また、軽鉱物中の火山ガラスの形態については、町田・新井（1992）の分類基準に従い形態分類をおこなった（第57図）。

(2) 屈折率測定

火山ガラスの屈折率については、横山ほか（1986）の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置（RIMS 86）を用いて屈折率（n）を測定し、その結果を範囲（range）であらわした。

2. 結果

長野岱Ⅲ遺跡において鉱物組成分析、屈折率測定をおこなった結果を以下に述べる。

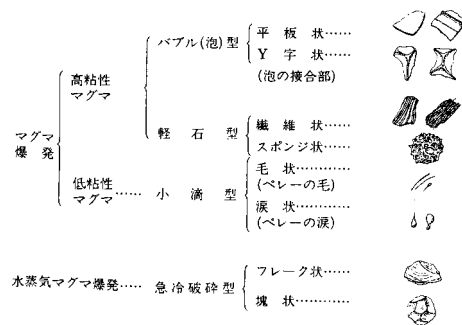
(1) テフラ組成分析（第7表）

砂粒分の粒度組成は、3試料ともほとんど同様な傾向を示し、1φ残渣が30%前後、2φ残渣が50%前後、3φ残渣が15%前後、4φ残渣が2～4%と2φ残渣がもっとも高い値を示す。

重・軽鉱物比は、軽鉱物が93～95%、重鉱物が5～7%となる。

軽鉱物は、93%以上が火山ガラスである。

火山ガラスの形態は、スポンジ状の軽石型が多く見られ、全体の半分近くを占める。また、繊維状軽石型が次いで多く見られる。



第57図 火山ガラスの形態区分(町田・新井, 1992)

(2) 屈折率測定（第6表）

試料1の屈折率は範囲1.4996-1.5044、平均1.5022、試料2の屈折率は範囲1.4997-1.5036、平均1.5020、試料3の屈折率は範囲1.4991-1.5037、平均1.5016と3試料とも同様な値を示す。

3. 堆積物中の指標テフラの検討

今回の分析から、長野岱Ⅲ遺跡において見られた堆積物から検出されたテフラについて、その特徴と噴出起源及び年代について述べる。

【To-a：十和田a火山灰】

試料1～3は、火山ガラス形態とその屈折率の値から十和田a火山灰（Towada-a：To-a；大池、1972）と考えられる。火山ガラスを用いた屈折率測定結果は範囲1.499-1.505、平均1.502となり、従来の十和田a火山灰の値（範囲1.496-1.504；町田・新井、1992）と重なることから、To-aに同定される。

To-aは東北の十和田カルデラを噴出源とし、東北地方のほぼ全域に分布している。また、噴出時代は、古文書から西暦915年（平安時代前期）であると考えられている（町田ほか、1981）。

第5表 堆積物の鉱物分析結果一覧

試料名		砂粒分の粒度組成 (重量%)			
		1φ	2φ	3φ	4φ
試料1	基本土壌Ⅲ層採取火山灰①	25.6	55.3	16.8	2.3
試料2	基本土壌Ⅲ層採取火山灰②	34.8	41.3	19.9	4.0
試料3	調査区北西角採取火山灰①	36.6	47.7	13.8	1.9

試料名		重・軽鉱物組成 (重量%)		軽鉱物組成(粒数)	
		軽鉱物	重鉱物	長石 Pl	火山ガラス Vg
試料1	基本土壌Ⅲ層採取火山灰①	94.1	5.9	12	172
試料2	基本土壌Ⅲ層採取火山灰②	93.3	6.7	9	195
試料3	調査区北西角採取火山灰①	94.9	5.1	13	184

試料名		火山ガラス形態分類(粒数)				
		平板状 b1	Y字状 b2	繊維状 p1	スポンジ状 p2	破碎型 c0
試料1	基本土壌Ⅲ層採取火山灰①	17	8	52	85	10
試料2	基本土壌Ⅲ層採取火山灰②	23	6	46	99	21
試料3	調査区北西角採取火山灰①	29	7	33	103	12

第6表 火山ガラスの屈折率測定結果

試料名		範囲(range)	平均(mean)
試料1	基本土壌Ⅲ層 採取火山灰①	1.4996-1.5044	1.5022
試料2	基本土壌Ⅲ層 採取火山灰②	1.4997-1.5036	1.5020
試料3	調査区北西角 採取火山灰①	1.4991-1.5037	1.5015

4. まとめ

長野岱Ⅲ遺跡におけるテフラ分析をおこなった結果、指標テフラとして、十和田a火山灰(To-a)が認められた。十和田a火山灰は平安時代前期の西暦915年に噴出し、多くの遺跡において検出されていることから今回の分析が他の遺跡との対比にとっても重要な資料をなるであろう。

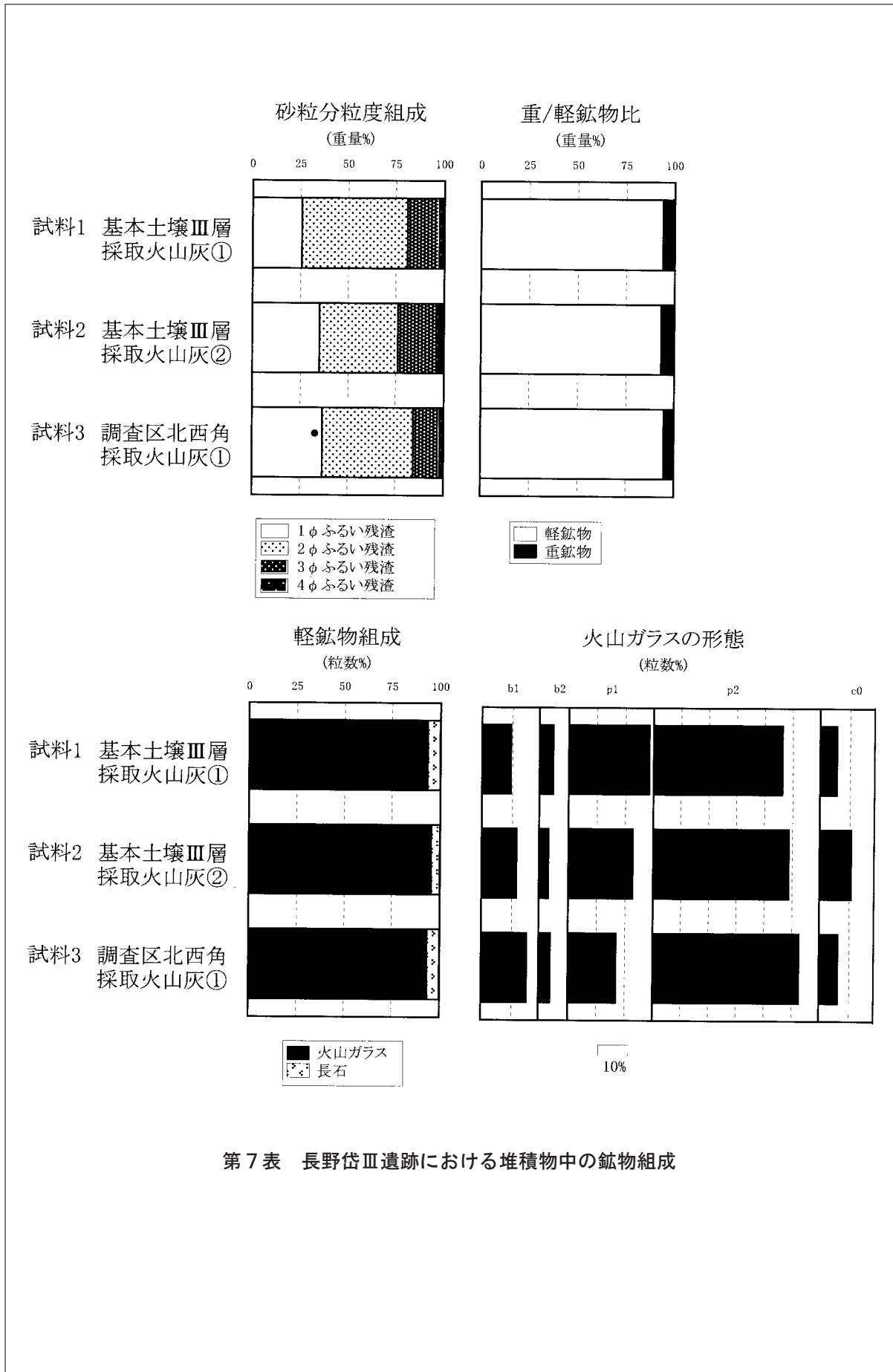
引用文献

町田洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」.東京大学出版会,277p.

町田洋・新井房夫・森脇広(1981)日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.

大池昭二(1972)十和田火山東麓における完新世テフラの編年.第四紀研究,11,228-235.

横山卓雄・檀原徹・山下透(1986)温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定.第四紀研究,25,21-30.



第7表 長野岱Ⅲ遺跡における堆積物中の鉱物組成

第3節 長野岱Ⅲ遺跡の花粉化石群集

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

長野岱Ⅲ遺跡は、秋田県北秋田郡森吉町米内沢字長野岱149-2外に所在する。ここでは、本遺跡周辺の古植生を明らかにする一端として花粉化石群集の検討を行った。

2. 試料と方法

花粉化石群集の検討は、試料8、9の2試料について行った。試料8はS I 16カマド内部土壌で褐色粘土質シルト、試料9はS I 44カマド内部土壌で黒褐色砂混じり粘土である。

花粉化石の抽出は、試料約4～5gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。

第8表 花粉化石一覧表

和名	学名	S I 16	S I 44
樹木			
スギ属	Cryptomeria	-	1
草本			
イネ科	Gramineae	-	2
オミナエシ属	Patrinia	-	1
ヨモギ属	Artemisia	-	2
樹木花粉	Arboreal pollen	0	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	0	5
シダ植物孢子	Spores	0	0
花粉・孢子総数	Totalpollen & Spores	0	6
不明花粉	Unknownpollen	0	0

3. 結果および若干の考察

試料9は花粉・孢子化石を全く産出しなかった。試料10は樹木では針葉樹のスギ属、草本ではイネ科、オミナエシ属、ヨモギ属が僅かに産出した。このように十分な花粉化石が産出しなかったため、古植生の推定は困難である。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、試料とした堆積物は、カマド内部の堆積物であり、酸化的な条件下で堆積したものと予想される。このように、酸化的な条件下で堆積した土壌のような堆積物は、炭化物は残るが、花粉化石などは分解・消失して保存され難い。

第4節 長野岱Ⅲ遺跡から出土した炭化種実

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. 試料

長野岱Ⅲ遺跡は、秋田県北秋田郡森吉町米内沢字長野岱149-2外に所在する。ここでは、S I 01-RC 1 (試料4)、S I 01-RC 2 (試料5)、S I 02-RC 1 (試料6) およびS I 02-RC 2 (試料7) より出土した炭化種実を検討し、その同定結果を報告する。なお、これらの炭化種実は、放射性炭素年代測定用試料に用いられた。

2. 結果

検討した結果、いずれもトチノキ, *Aesculus turbinata* Blume炭化子葉であった。試料5、7は完形であり、試料4、6は2分の1個程度かと思われ、大きさは約21~28mmである。トチノキ種皮は炭化状態がよいと表面には光沢があり、指紋状の模様がみられる。出土したものは、一部分に種皮が僅かに残っていたが、状態が悪く、光沢や指紋状の模様は認められなかった。

第5節 長野岱Ⅲ遺跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

北秋田郡森吉町に所在する当遺跡の、炭窯内出土炭化材 (試料No.10) の樹種同定結果を報告する。

2. 炭化材樹種同定の方法

樹種同定は、炭化材の3方向の断面を走査電子顕微鏡で拡大して材組織を観察し同定した。横断面 (木口) は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面 (板目) と放射断面 (柁目) は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡 (日本電子(株)製 JSM-T100型) で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

SW07-RC 1の炭化材は、クリであった。クリは、燃料材として有用材であり、炭用材としてもよく使用される樹種である。以下に同定の根拠とした材組織の特徴を記載する。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 1a-1c (試料10)

年輪の始めに中型の管孔が密に配列し、除々に径を減じ、晩材は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列同性である。

北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野や二次林に普通の落葉高木である。

第4章 まとめ

発掘調査の結果、長野岱Ⅲ遺跡では、縄文時代の遺構を1遺構と、古代（平安時代）の遺構を11遺構、合計12遺構を検出した。以下、遺跡の時期や性格について述べる。

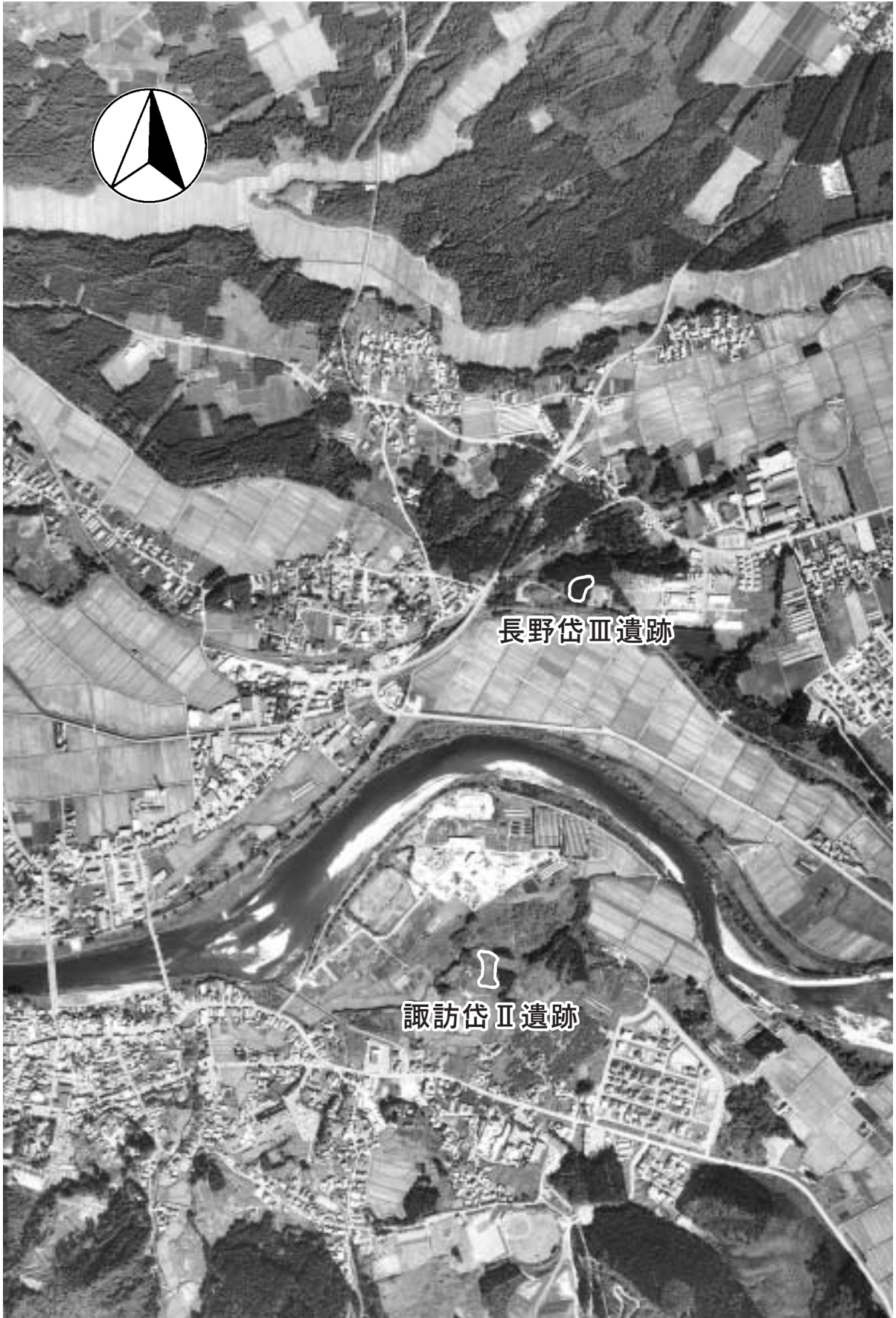
【縄文時代の遺構と遺物】 調査区北東でフラスコ状土坑（SKF04）1基を検出した。覆土中から遺物が出土していないため詳細は不明だが、規模・形態から縄文時代の遺構と考えられる。このフラスコ状土坑が検出されたことは、本遺跡が採集場であった時期があることを示している。このほか、遺構外から出土した縄文土器から、本遺跡の縄文時代の時期は、概ね中期末葉から晩期後葉までに比定される。

【古代（平安時代）の遺構と遺物】 竪穴住居跡5軒（SI01・02・03・16・44）、土坑3基（SK14・53・72）、焼土遺構1基（SN15）、炭窯1基（SW07）、鍛冶炉1基（SS43）の計11遺構を検出した。重複関係が見られたSI01・02・03竪穴住居跡を含むすべての住居跡に共通することは、製鉄・鍛冶関連の遺物が出土していることである。SI01竪穴住居跡からはフィゴの羽口破片が、SI16竪穴住居跡からは金床石が、SI44竪穴住居跡からはフィゴの羽口が出土し、いずれの住居も周囲から鉄滓が出土した。特にSN15焼土遺構と隣接するSI16竪穴住居跡と、SS43鍛冶炉と隣接するSI44竪穴住居跡は、内部にカマドが存在するものの、居住施設としての機能よりも製鉄・鍛冶に関連する作業の施設として使用された遺構と考えられる。なお、出土した土師器から遺構の時期は平安時代後半に比定される。SI01・02・03竪穴住居跡も、出土したフィゴの羽口破片から製鉄・鍛冶に関連するものと想定され、住居の新旧関係はSI03→02→01の順で新しくなる。詳細な時期は不明であるが、規模・形態や自然科学分析の結果により、平安時代後半の竪穴住居跡と考えられる。

調査区北端で検出したSN15焼土遺構は、SI16竪穴住居跡と同様、調査区外に接するため全容を調査することができなかったが、鉄製品（刀子）が出土したことにより、鍛冶関連の作業場としての性格を持つと考えられる。時期は出土した土師器から平安時代後半に比定される。その東に位置するSW07炭窯は土層のすべてに炭化物が含まれ、特に2層が全面炭化物であることから炭窯として検出した。詳細な時期は不明であるが規模・形態から平安時代と考えられる。SS43鍛冶炉は、SI44竪穴住居跡に隣接し、土師器と鉄製品（刀子）・鉄滓が出土した。鉄滓の集中的分布から、ここが主たる鍛冶作業場であったものと考えられる。出土した土師器から時期は平安時代後半に比定される。

このほか、基本土層の南北ベルトⅢ層に見られた火山灰（灰褐色土）を分析したところ、指標テフラの十和田a火山灰（To-a：西暦915年降下）に同定される結果を得た。遺構外から出土した遺物のうち縄文土器や石器は、表採遺物を除きⅢ層以下から出土しており、この分析結果と層位的に合致する。

以上の調査結果から、本遺跡は縄文時代（中期末葉～晩期後葉）と古代（平安時代後半）に渡る時期の複合遺跡であり、縄文時代は小規模な採集場としての性格を持ち、平安時代後半には集落跡としての性格を有すると考えられる。この平安時代後半の集落内では、鍛冶による鉄製品の生産活動が行われていたと思われる。



空から見た諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡(南→)



1. 諏訪岱Ⅱ遺跡遠景(南東→)



2. 諏訪岱Ⅱ遺跡調査区近景(南→)



1. SK124土坑
完掘(北→)

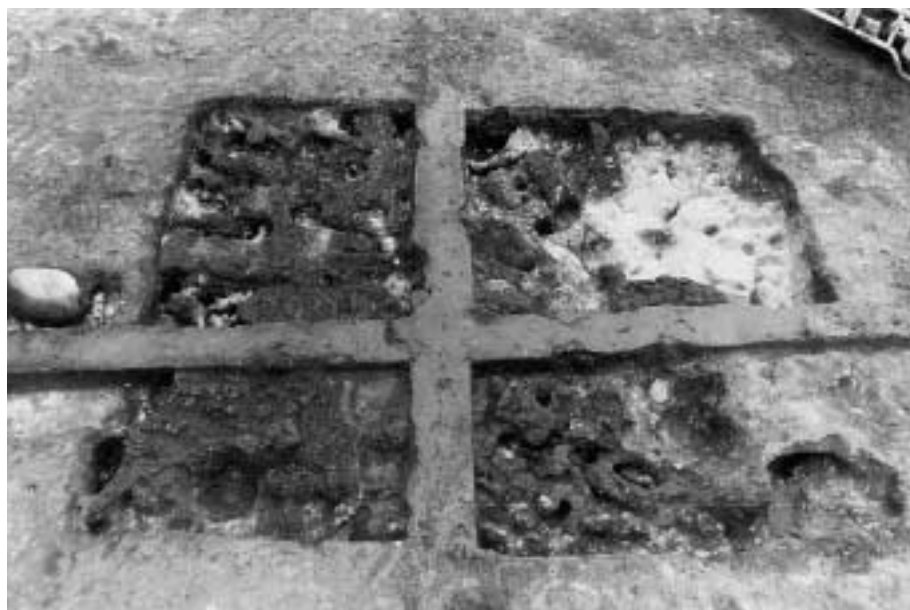


2. SR02土器埋設遺構
断面(西→)



3. SKT128陥し穴
完掘(南西→)

1. S I 113 竪穴住居跡
炭化材出土状況
(南西→)

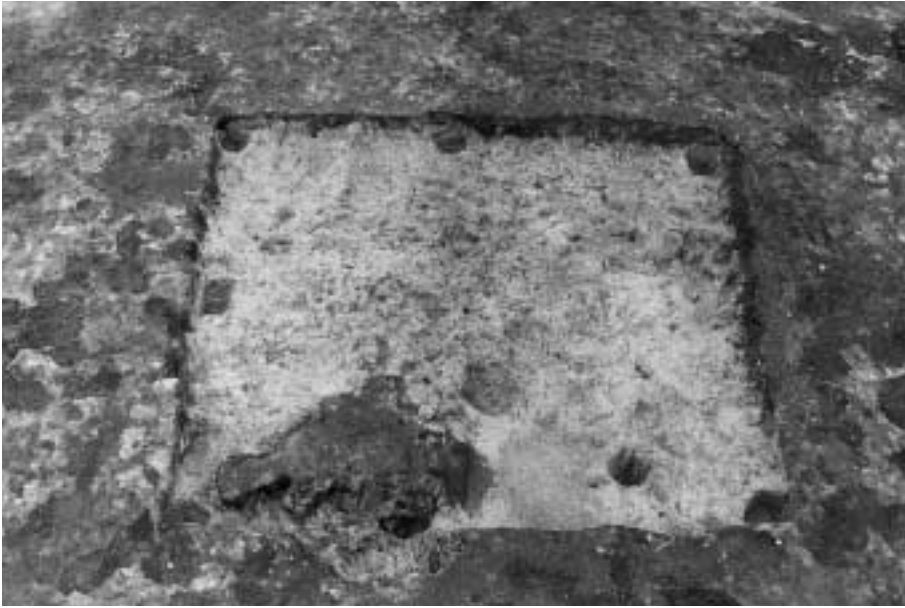


2. S I 113 竪穴住居跡
完掘(南西→)



3. S I 114 竪穴住居跡
炭化材出土状況
(南東→)





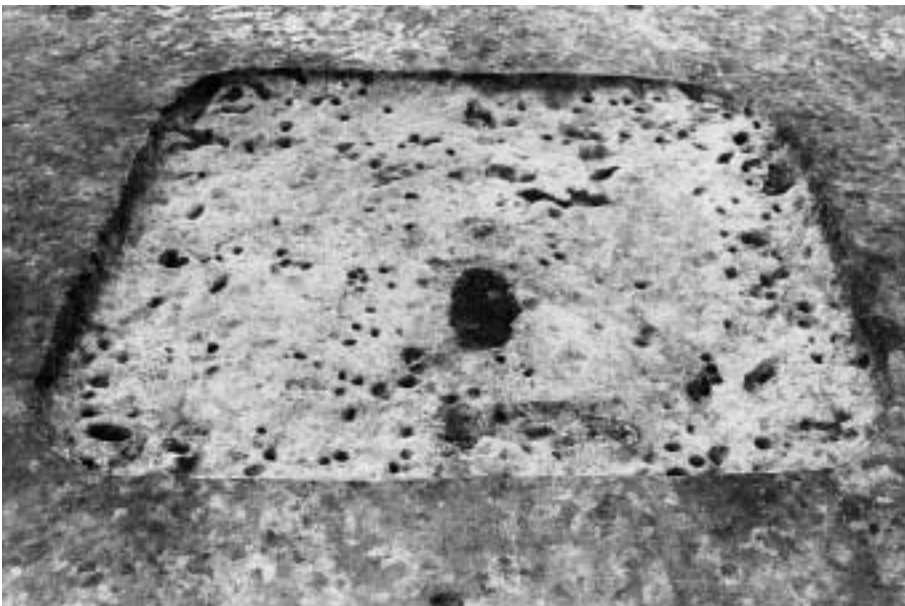
1. S I 114 竪穴住居跡
カマド確認状況
(南東→)



2. S I 114 竪穴住居跡
断面(北東→)



3. S I 115 竪穴住居跡
断面(南東→)

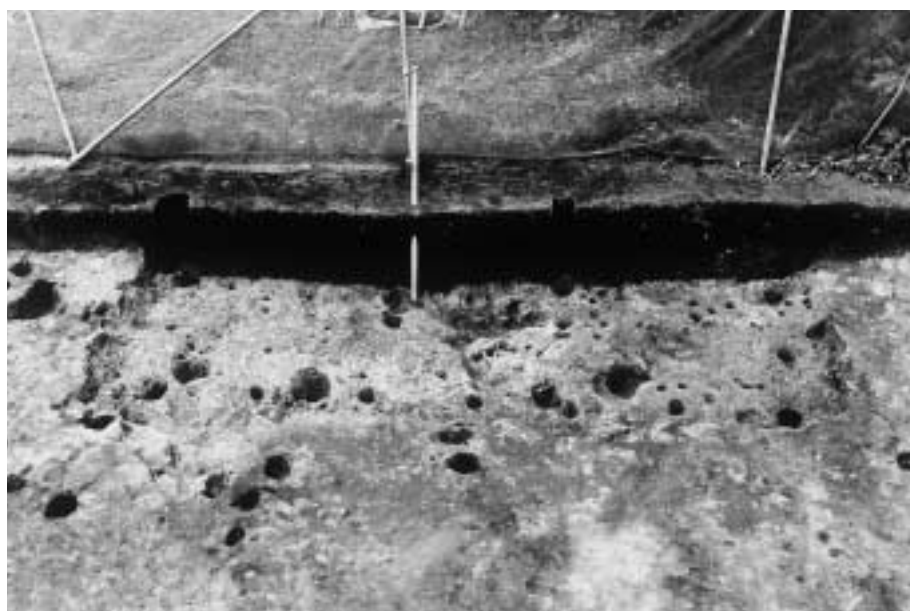


4. S I 115 竪穴住居跡
完掘(南東→)

1. S I 116 竪穴住居跡
断面(南→)

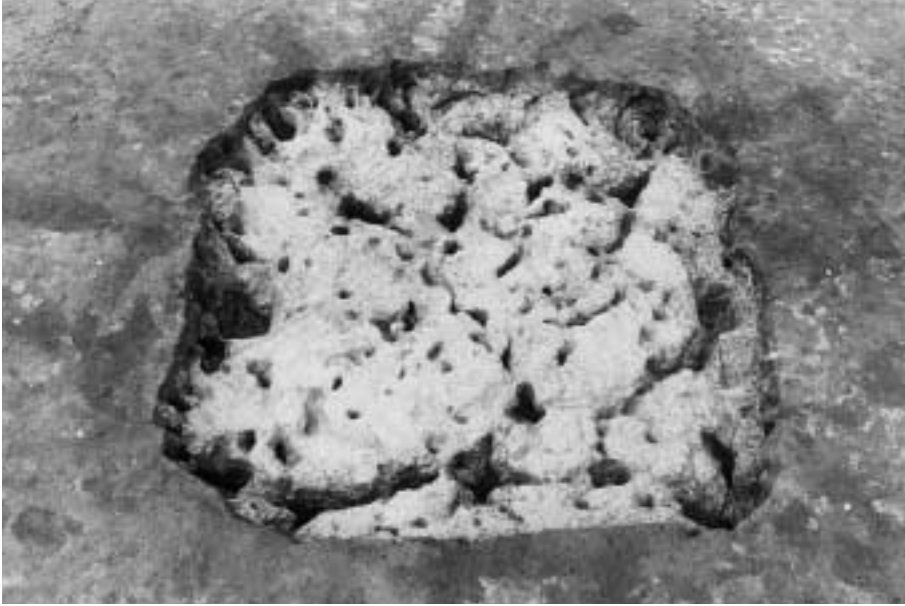


2. S I 116 竪穴住居跡
完掘(東→)



3. S I 122 竪穴住居跡
断面(南西→)





1. S I 122 竖穴住居跡
完掘(南西→)



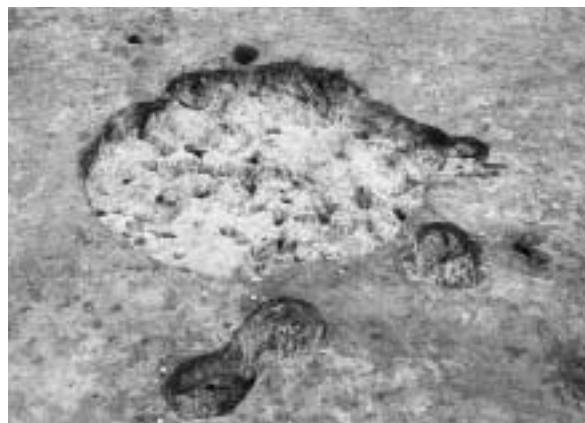
2. S I 125 竖穴住居跡
断面(南→)



3. S I 125 竖穴住居跡
完掘(西→)



1. SK04土坑完掘(北→)



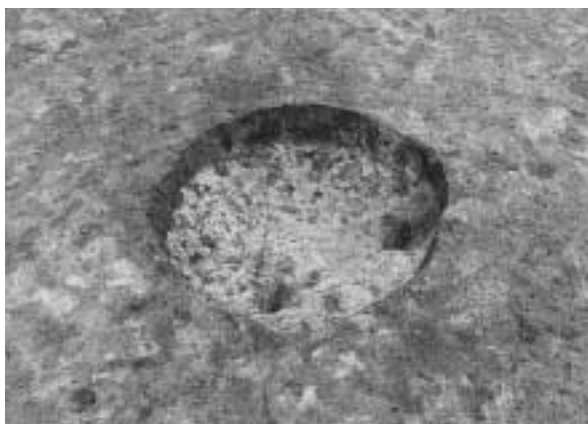
2. SK05土坑完掘(西→)



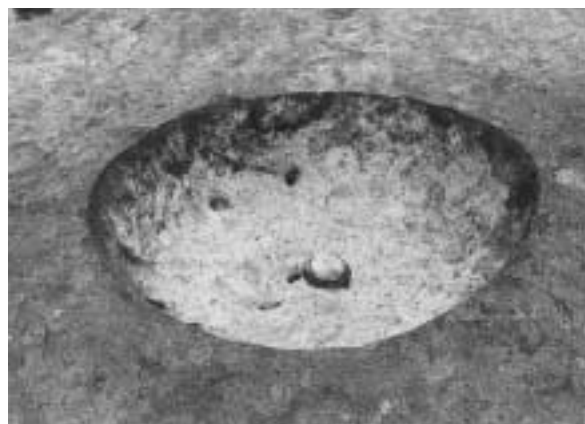
3. SK07土坑完掘(南→)



4. SK09土坑完掘(北西→)



5. SK102土坑完掘(西→)



6. SK103土坑完掘(西→)



7. SK104土坑完掘(西→)



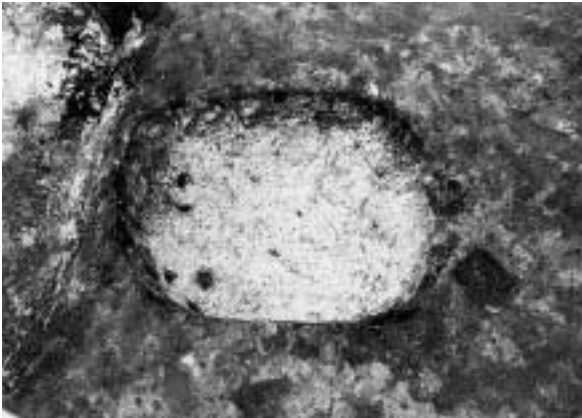
8. SK105土坑完掘(西→)



1. S K106土坑完掘(北西→)



2. S K107土坑完掘(西→)



3. S K108土坑完掘(南西→)



4. S K110土坑完掘(西→)



5. S K111土坑完掘(北西→)



6. S N117焼土遺構断面(北西→)



7. S N118焼土遺構断面(北西→)



8. S N119焼土遺構断面(西→)



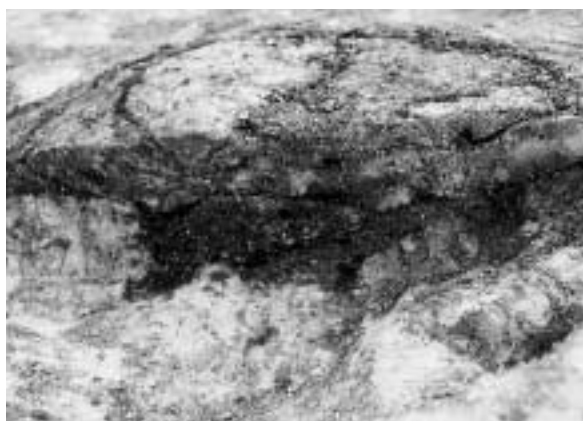
1. S N123焼土遺構断面(西→)



2. S N126焼土遺構完掘(西→)



3. S N129焼土遺構断面(南→)



4. S N130焼土遺構断面(西→)



5. S X101性格不明遺構確認状況(南西→)



6. S I 113竪穴住居跡土師器坏出土状況(北→)



7. S I 113竪穴住居跡土師器片出土状況(南東→)



8. S I 115竪穴住居跡錢貨出土状況(南西→)



1. 長野岱Ⅲ遺跡調査区近景(東→)



2. 長野岱Ⅲ遺跡調査区近景(南東→)



1. S I 01・02・03 竪穴住居跡完掘(南東→)



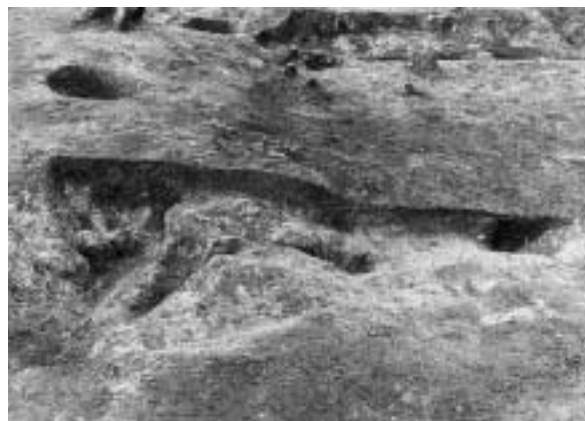
2. S I 01・02・03 竪穴住居跡確認(南東→)



3. S I 01・02・03 竪穴住居跡断面(南東→)



4. S I 01・02・03 竪穴住居跡断面(南西→)



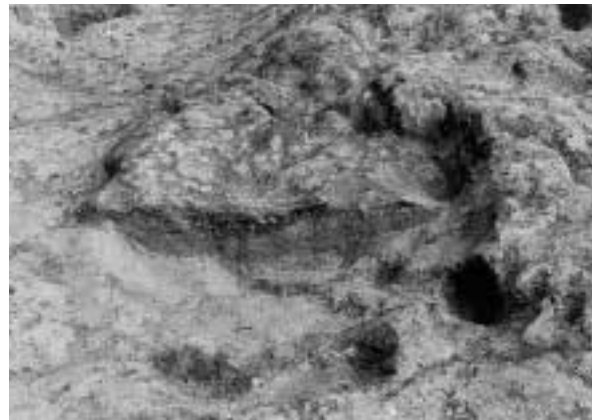
5. S I 01 竪穴住居跡カマド断面(北→)



1. S I 16 竪穴住居跡完掘(南→)



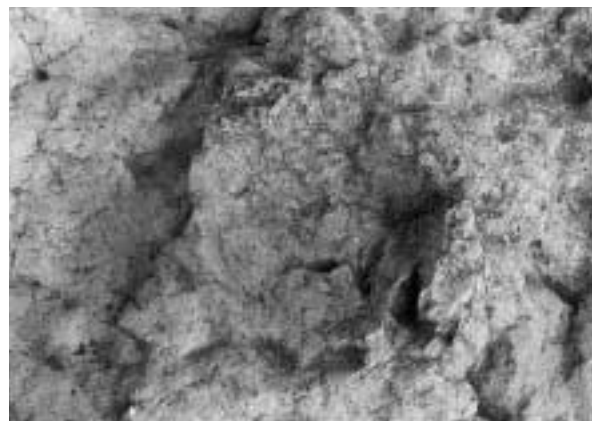
2. S I 16 竪穴住居跡断面(南東→)



3. S I 16 竪穴住居跡カマド断面(南西→)



4. S I 16 竪穴住居跡金床石出土状況(東→)



5. S I 16 竪穴住居跡カマド完掘(南西→)



1. S I 44 竪穴住居跡完掘(南→)



2. S I 44 竪穴住居跡断面東側(北→)



3. S I 44 竪穴住居跡断面西側(北→)



4. S I 44 竪穴住居跡断面南北側(東→)



5. S I 44 竪穴住居跡羽口出土状況(西→)



1. SK14土坑断面(東→)



2. SK14土坑完掘(東→)



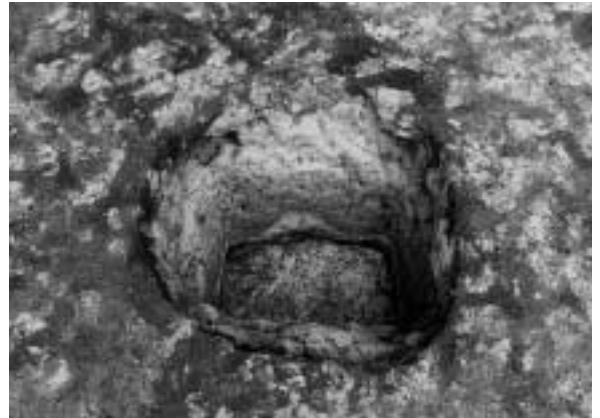
3. SK53土坑断面(南西→)



4. SK53土坑完掘(南西→)



5. SK72土坑断面(南東→)



6. SK72土坑完掘(南東→)



7. SKF04フラスコ状土坑断面(北西→)



8. SKF04フラスコ状土坑完掘(北西→)



1. SW07炭窯完掘(南→)



2. SW07炭窯確認(南東→)



3. SW07炭窯断面(南→)



4. SN15焼土遺構確認(南→)



5. SN15焼土遺構断面(南→)



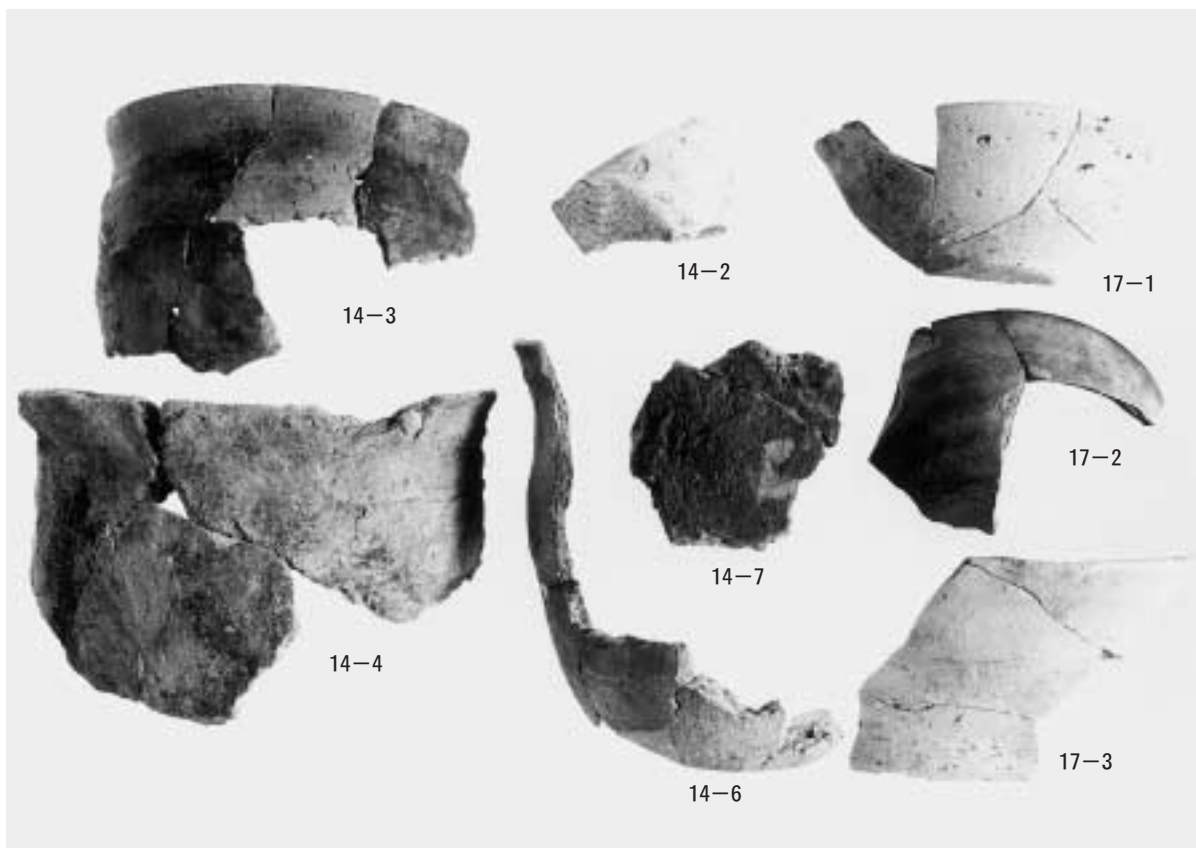
1. S S43鍛冶炉
鉄滓出土状況
(北東→)



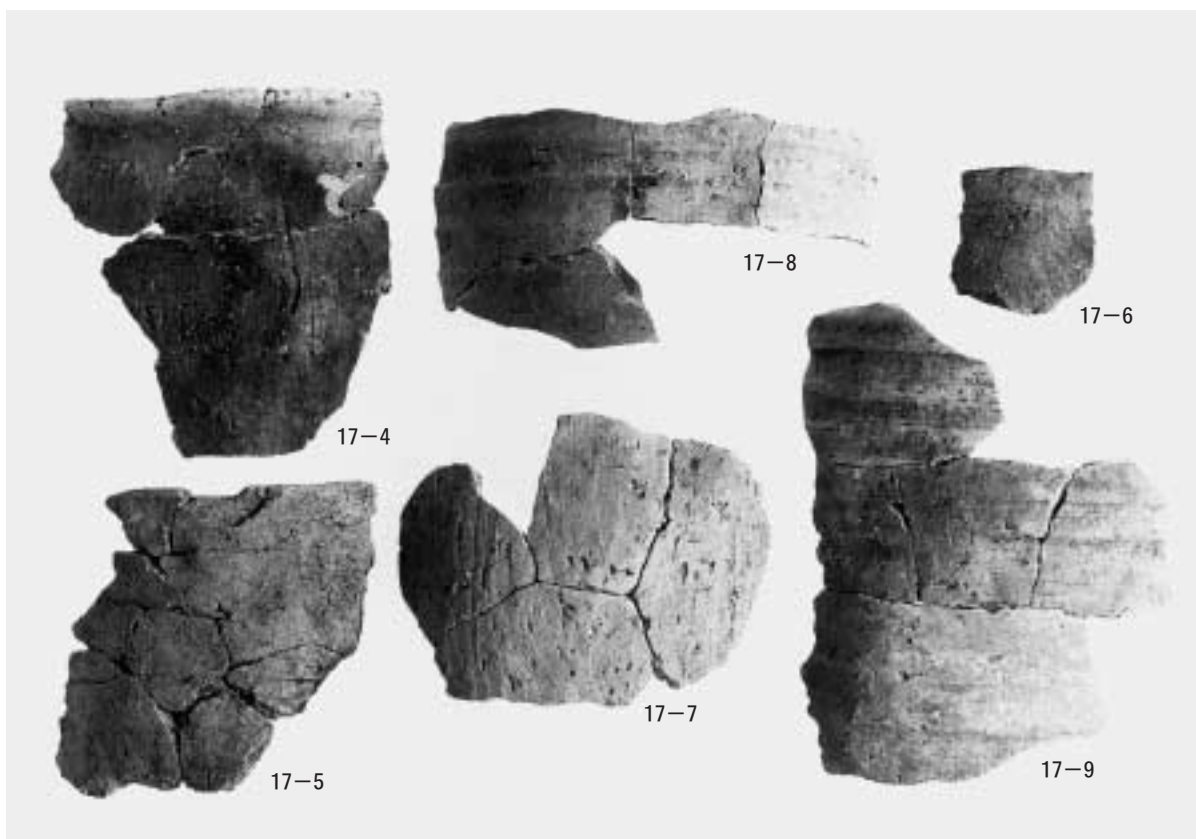
2. S S43鍛冶炉
確認状況
(東→)



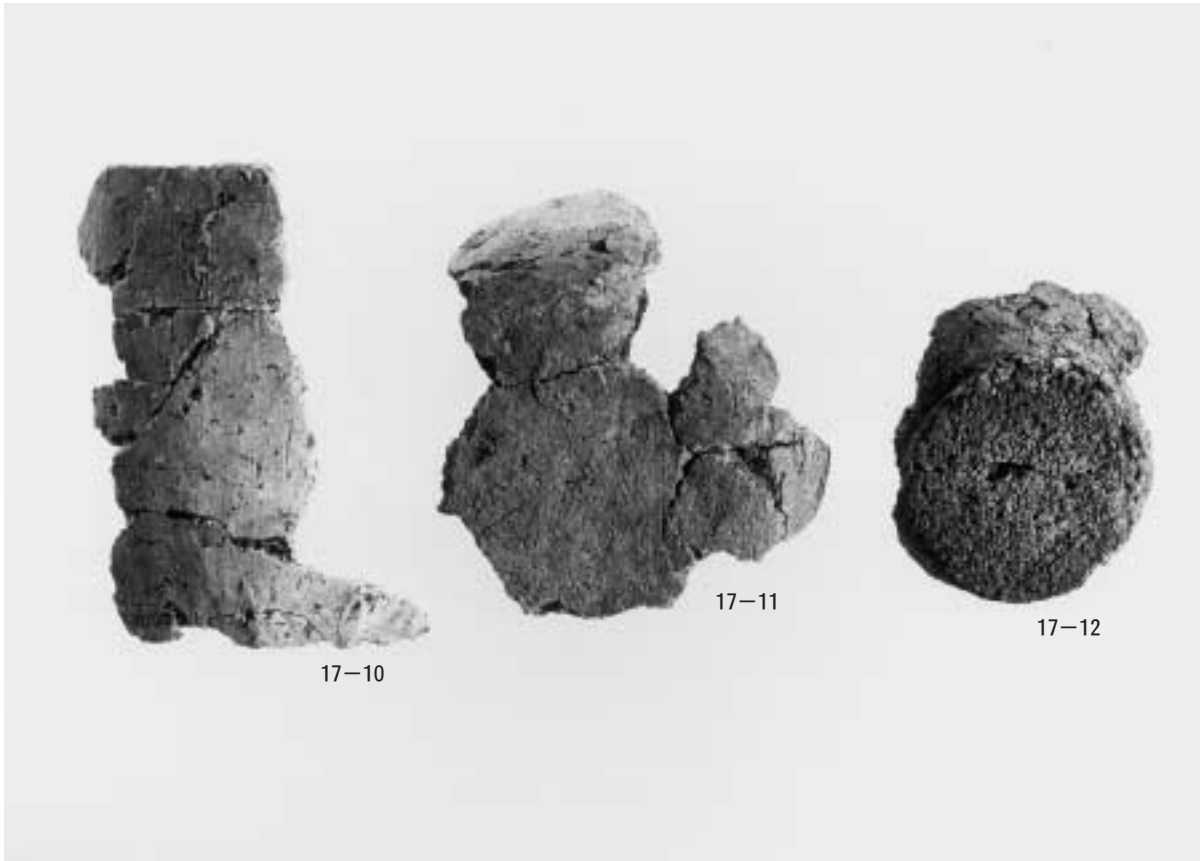
3. S S43鍛冶炉
羽口片出土状況
(北東→)



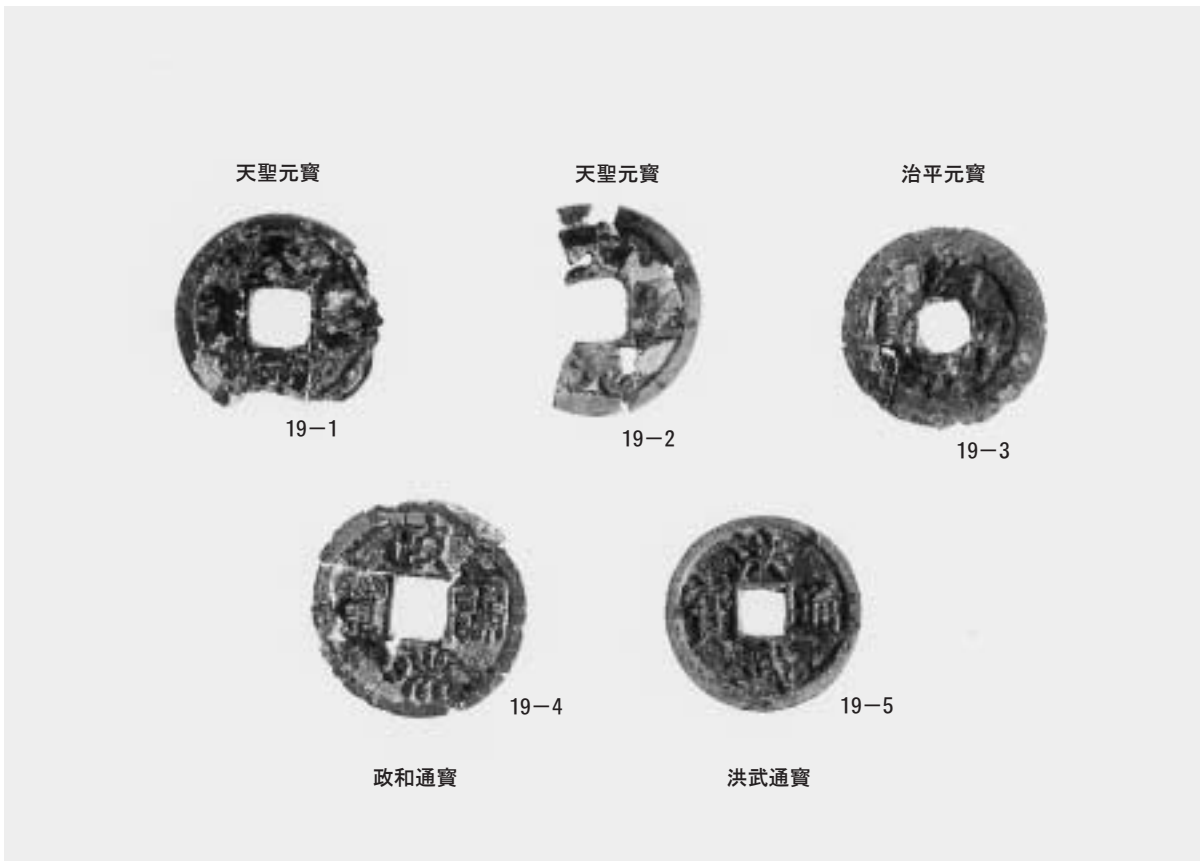
1. S I 113・114 竪穴住居跡出土土器(1)



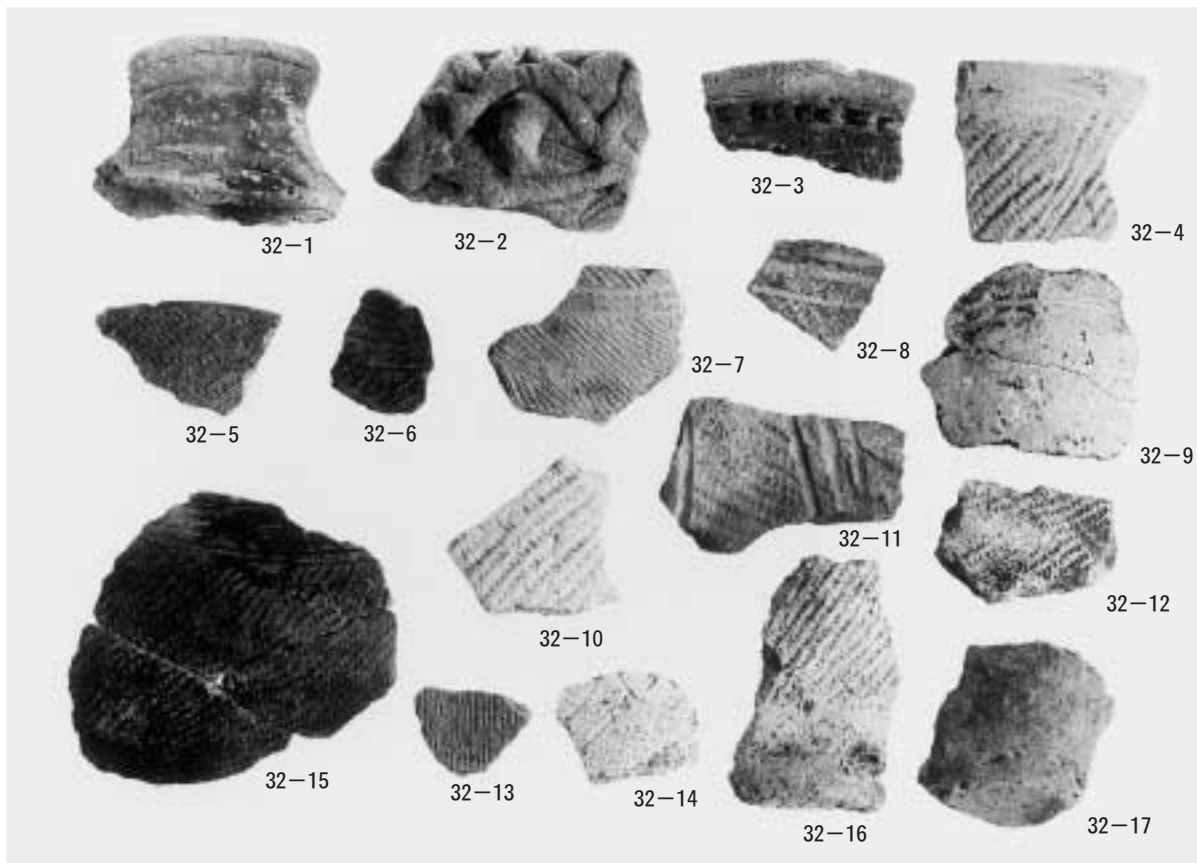
2. S I 114 竪穴住居跡出土土器(2)



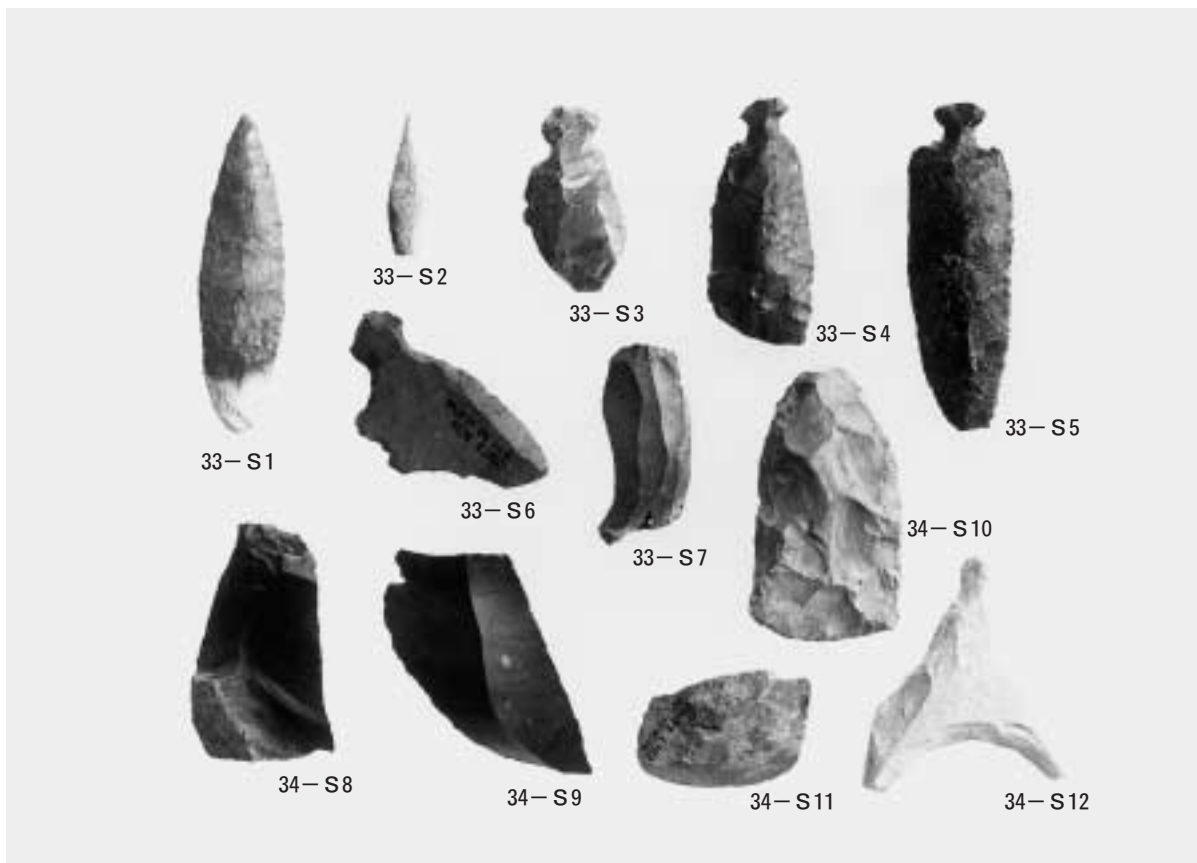
1. S I 114 竪穴住居跡出土土器 (3)



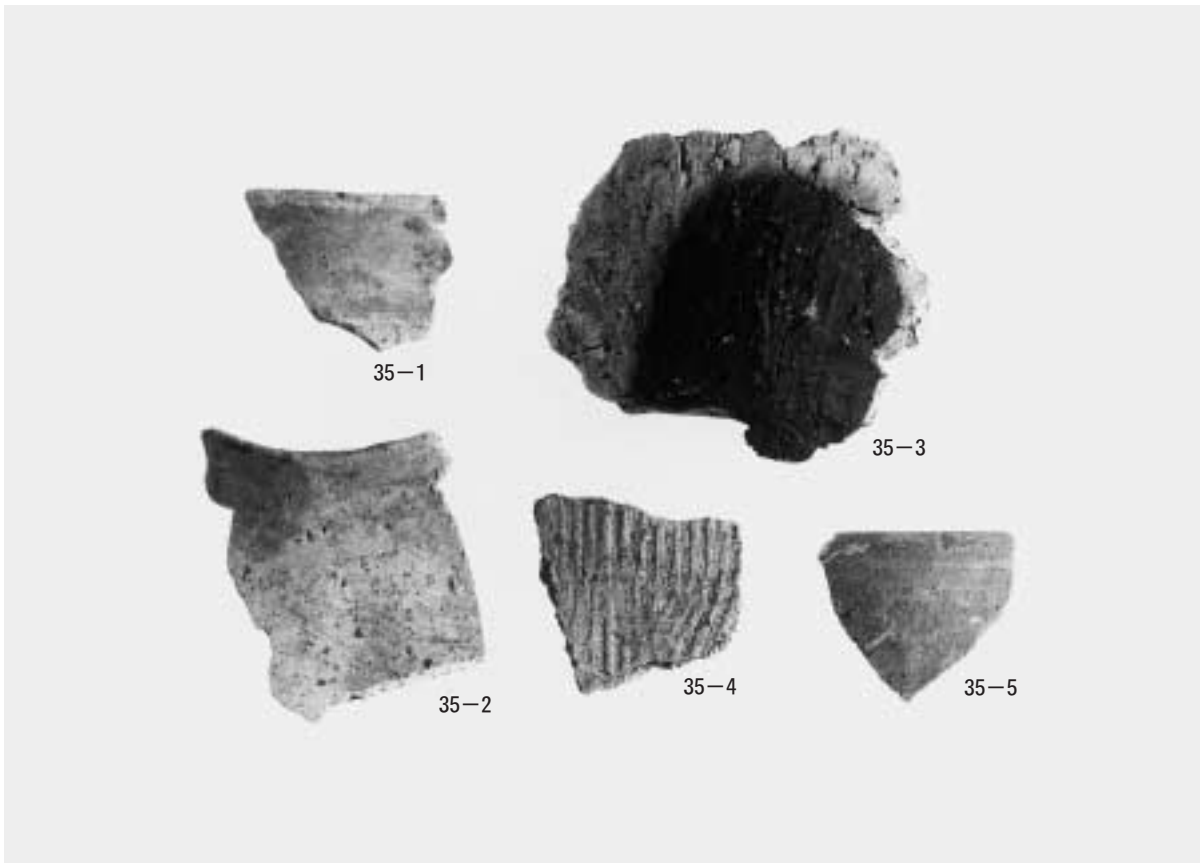
2. S I 115 竪穴住居跡出土錢貨



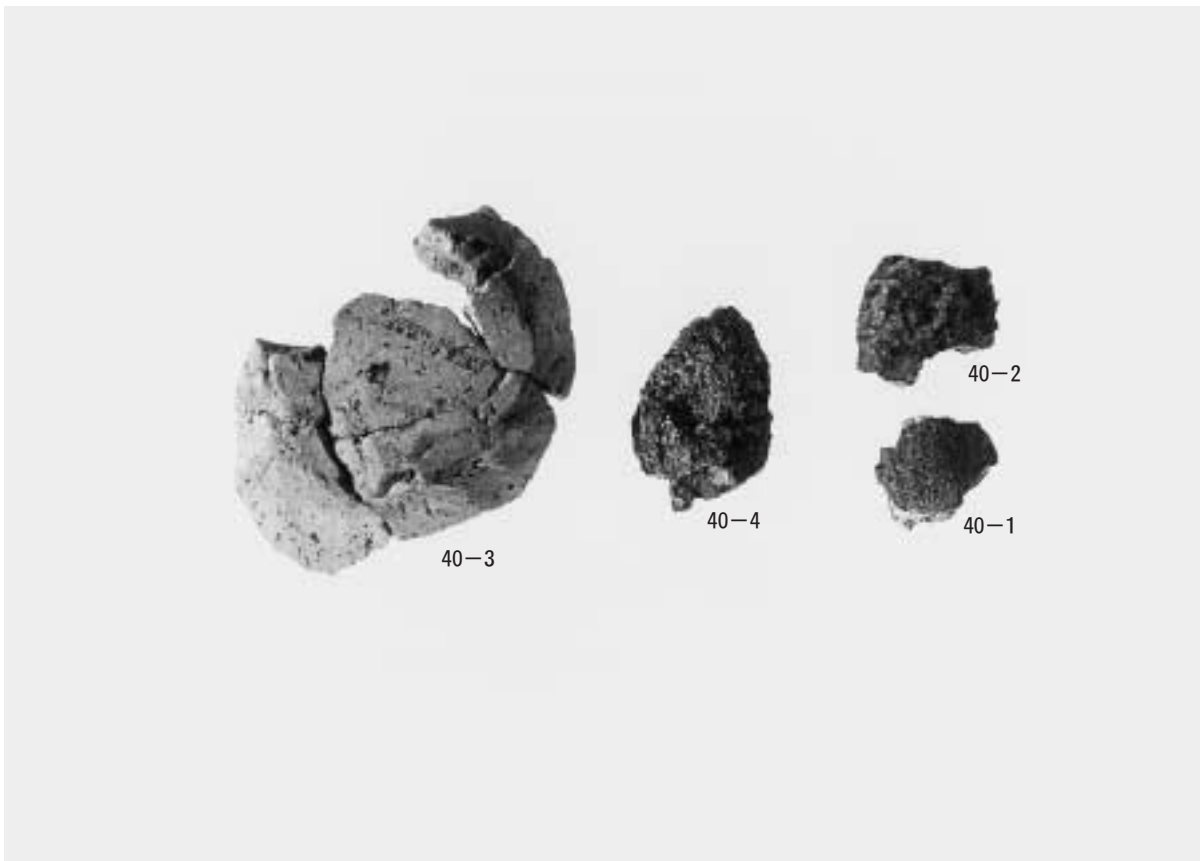
1. 遺構外出土土器



2. 遺構外出土石器



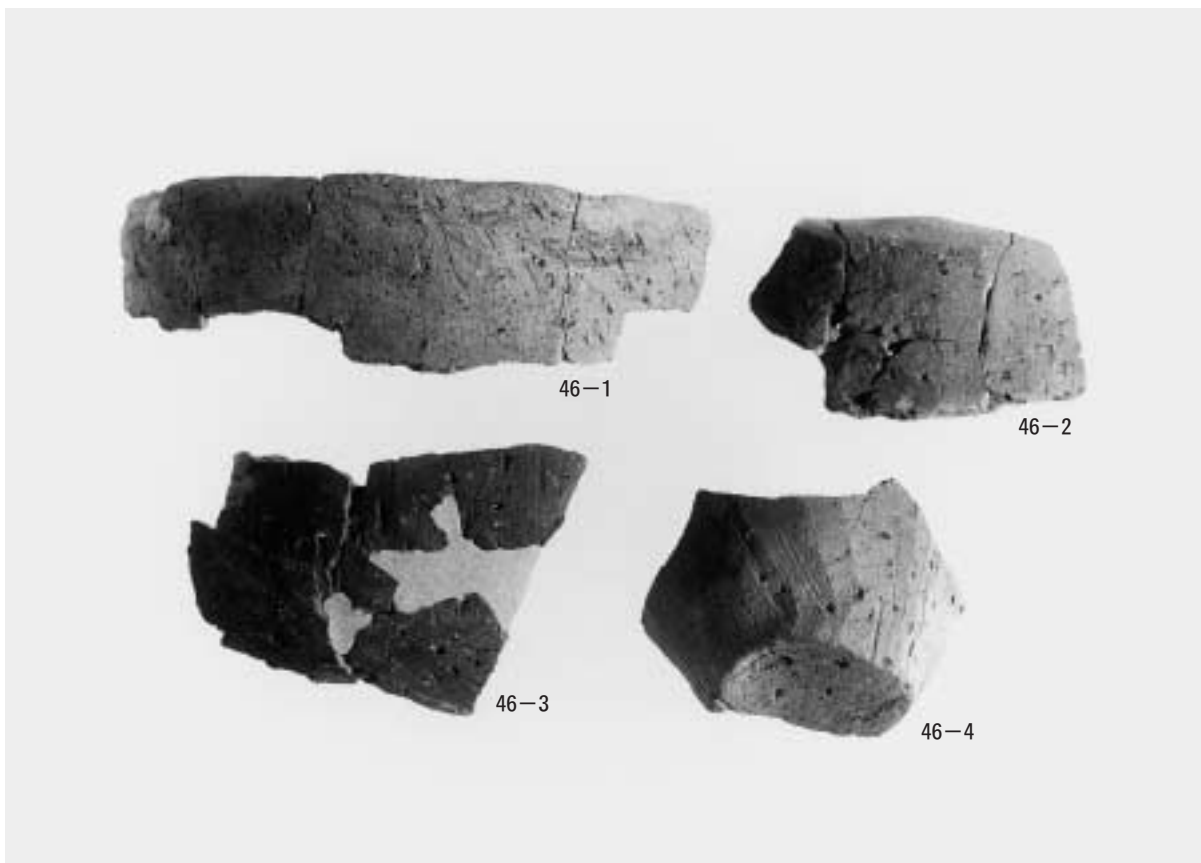
1. 遺構外出土土器



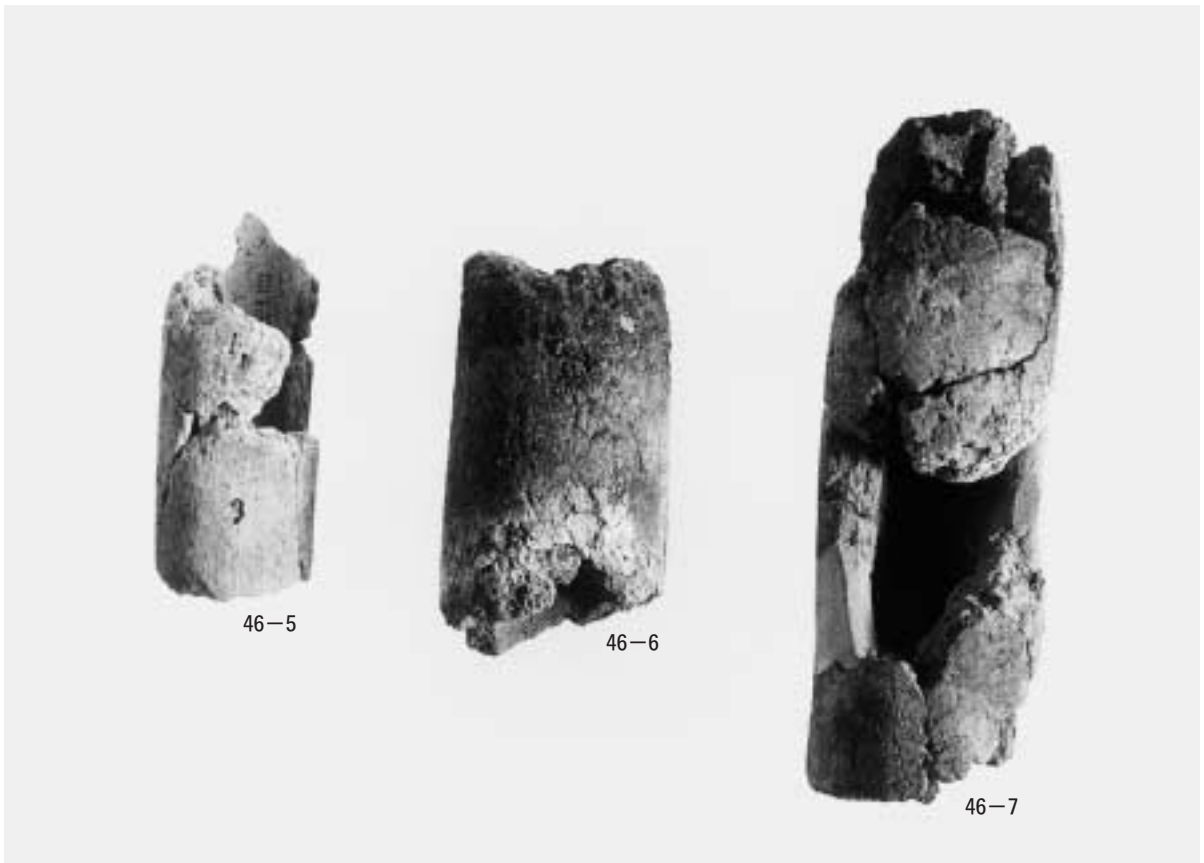
2. S I 01・02 竪穴住居跡出土土器・羽口



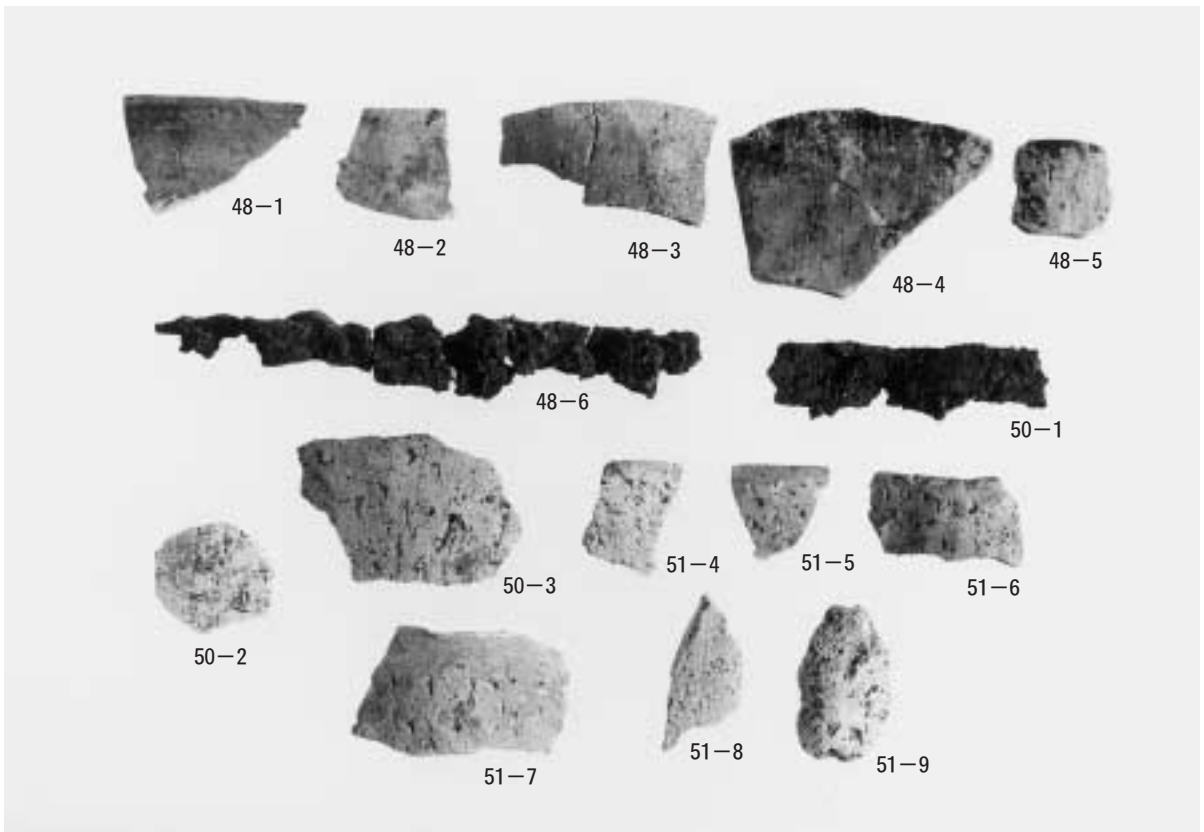
1. S I 16 竪穴住居跡出土金床石



2. S I 44 竪穴住居跡出土土器



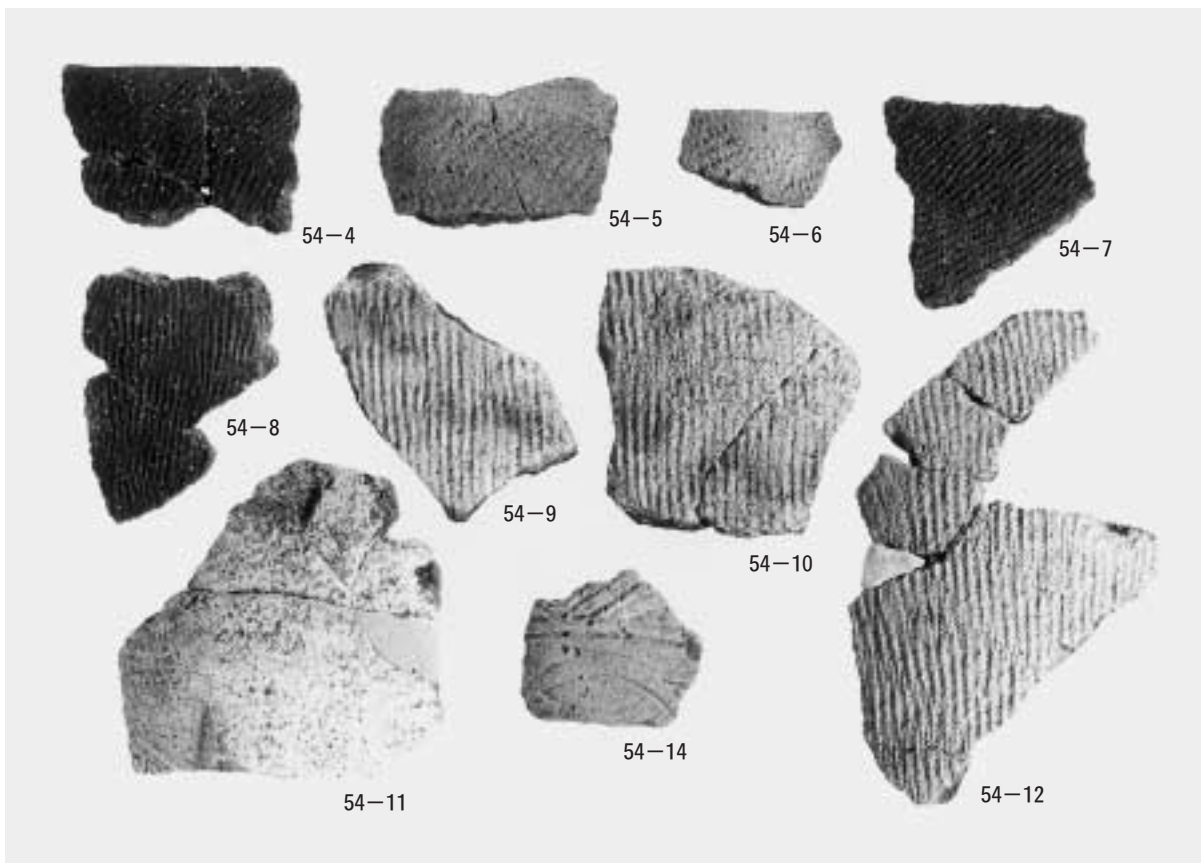
1. S I 44 竪穴住居跡出土羽口



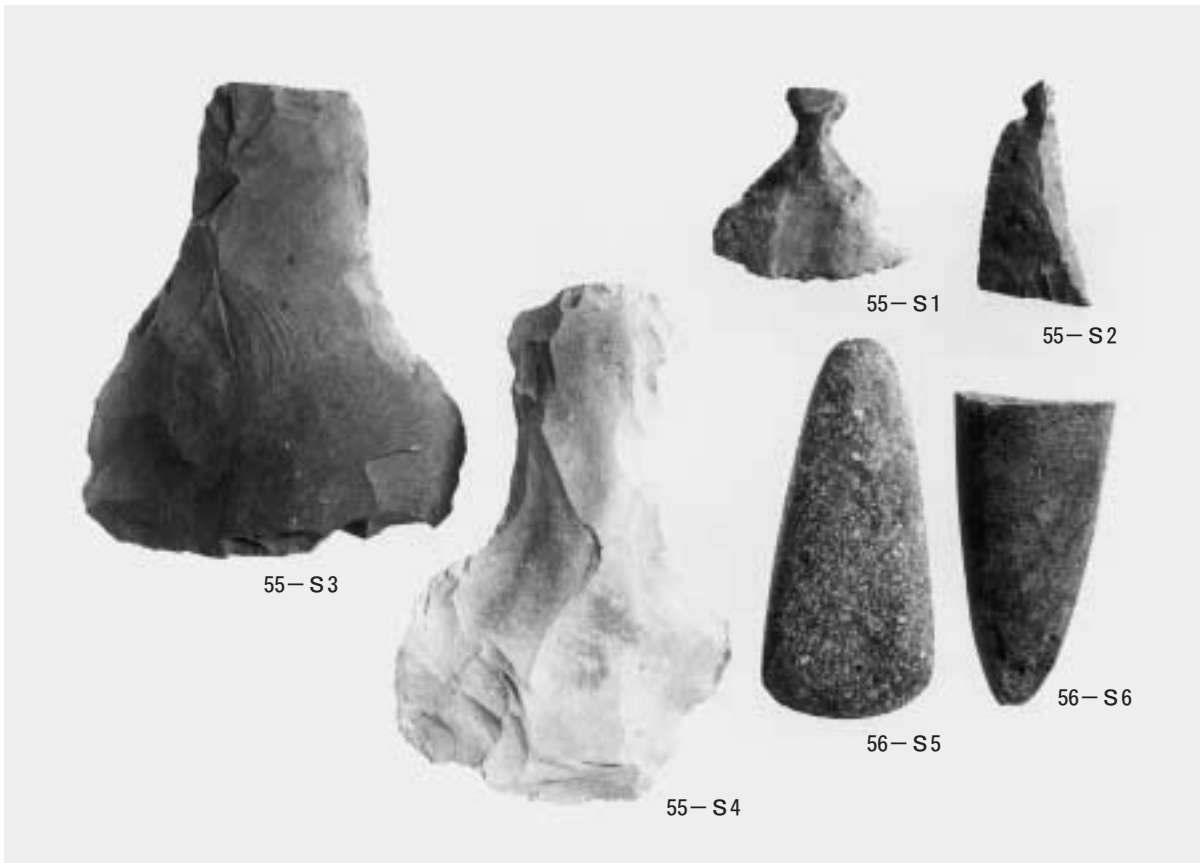
2. S N15 焼土遺構・S S43 鍛冶炉出土遺物



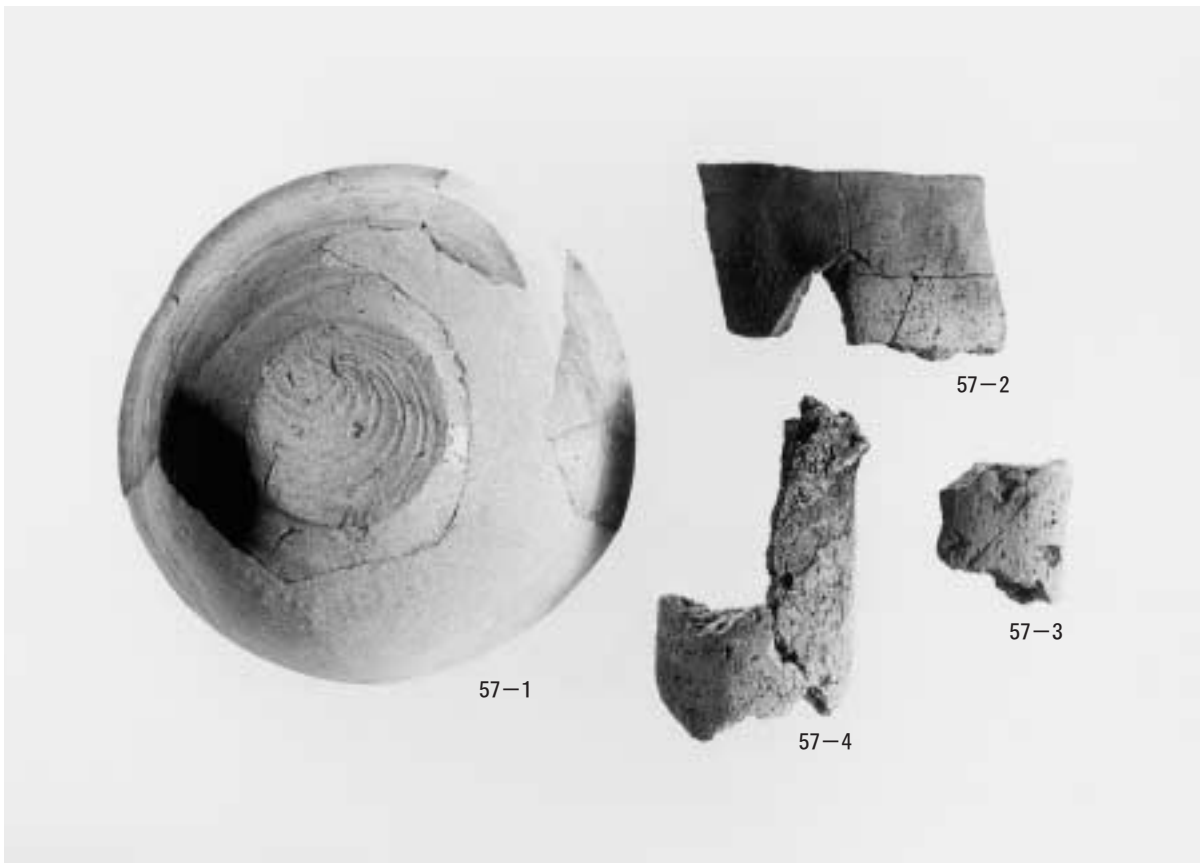
1. 遺構外出土土器(1)



2. 遺構外出土土器(2)



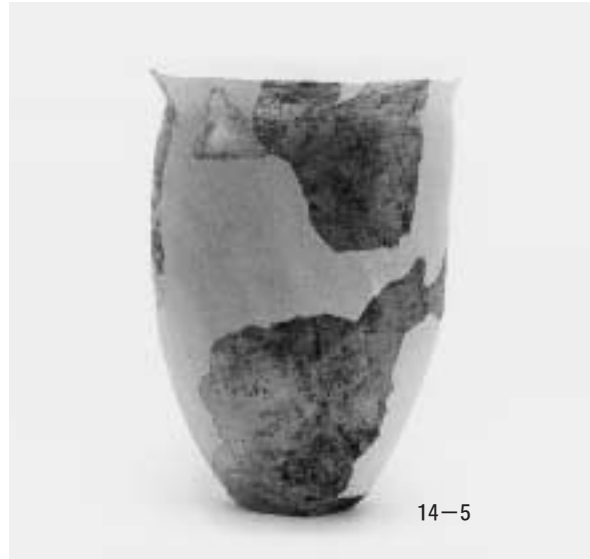
1. 遺構外出土石器



2. 遺構外出土器・羽口



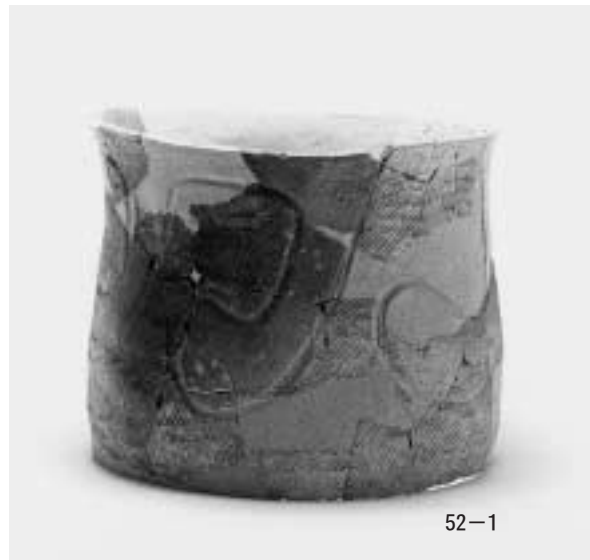
1. 諏訪岱Ⅱ遺跡S R02埋設土器



2. 諏訪岱Ⅱ遺跡S I 113出土土師器甕



3. 諏訪岱Ⅱ遺跡S I 113出土土師器杯



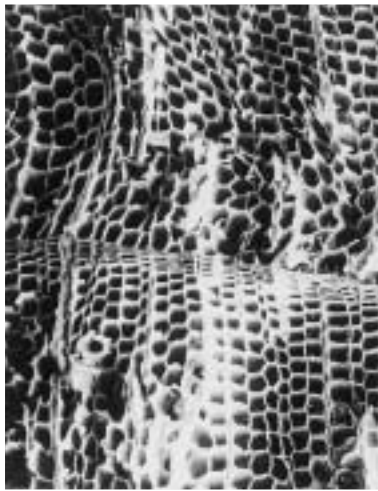
4. 長野岱Ⅲ遺跡遺構外出土土器(1)



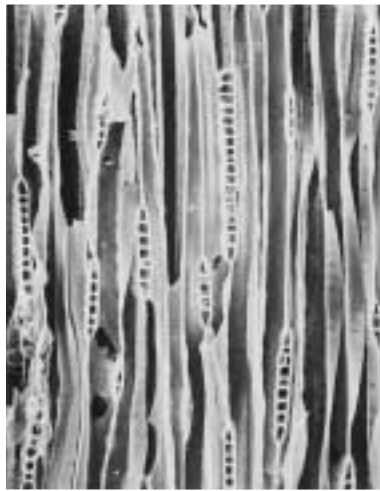
5. 長野岱Ⅲ遺跡遺構外出土土器(2)



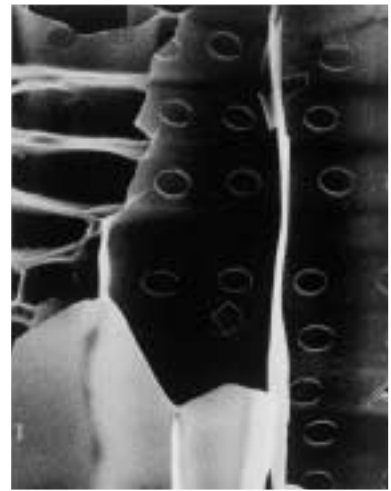
6. 長野岱Ⅲ遺跡遺構外出土土器(3)



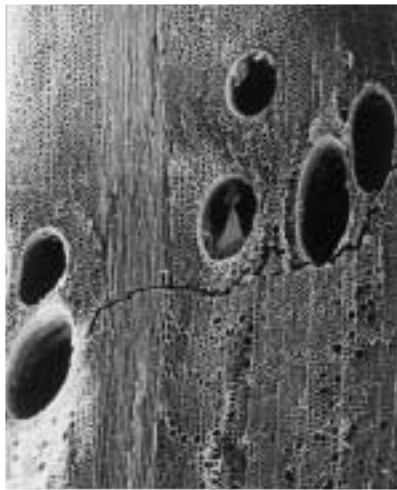
1a スギ(横断面)
試料No.2 bar:0.5mm



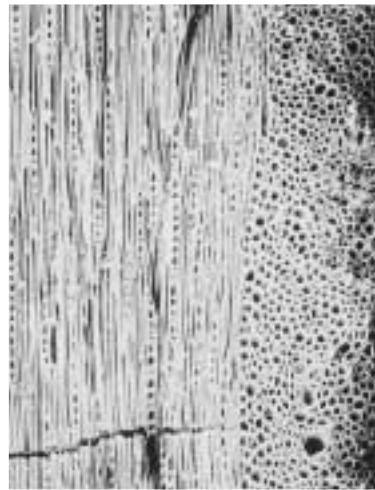
1b スギ(接線断面)
試料No.2 bar:0.5mm



1c スギ(放射断面)
試料No.2 bar:0.05mm



2a コナラ節(横断面)
試料No.6 bar:0.5mm



2b コナラ節(接線断面)
試料No.6 bar:0.5mm



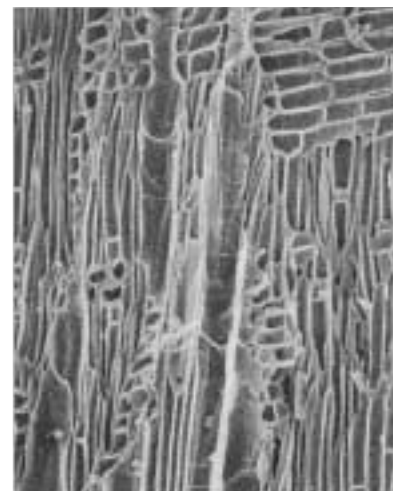
2c コナラ節(放射断面)
試料No.6 bar:0.5mm



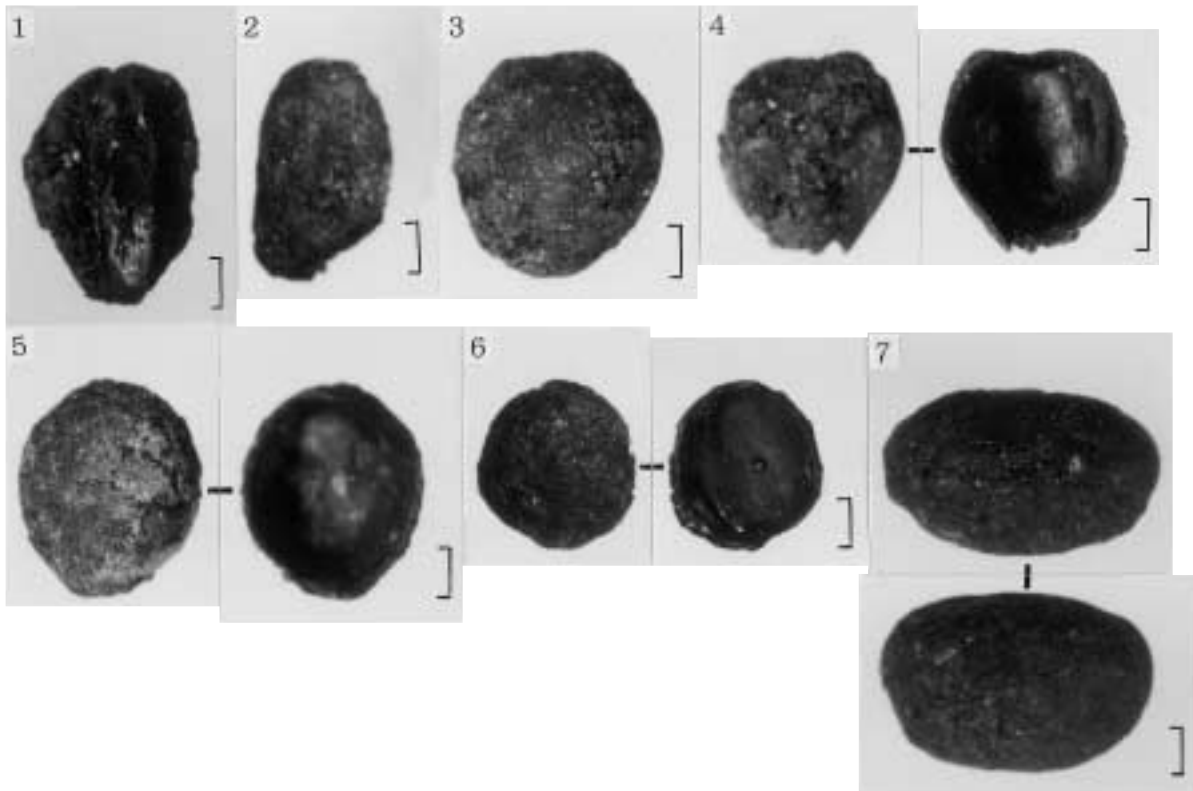
3a クリ(横断面)
試料No.7 bar:1.0mm



3b クリ(接線断面)
試料No.7 bar:0.5mm



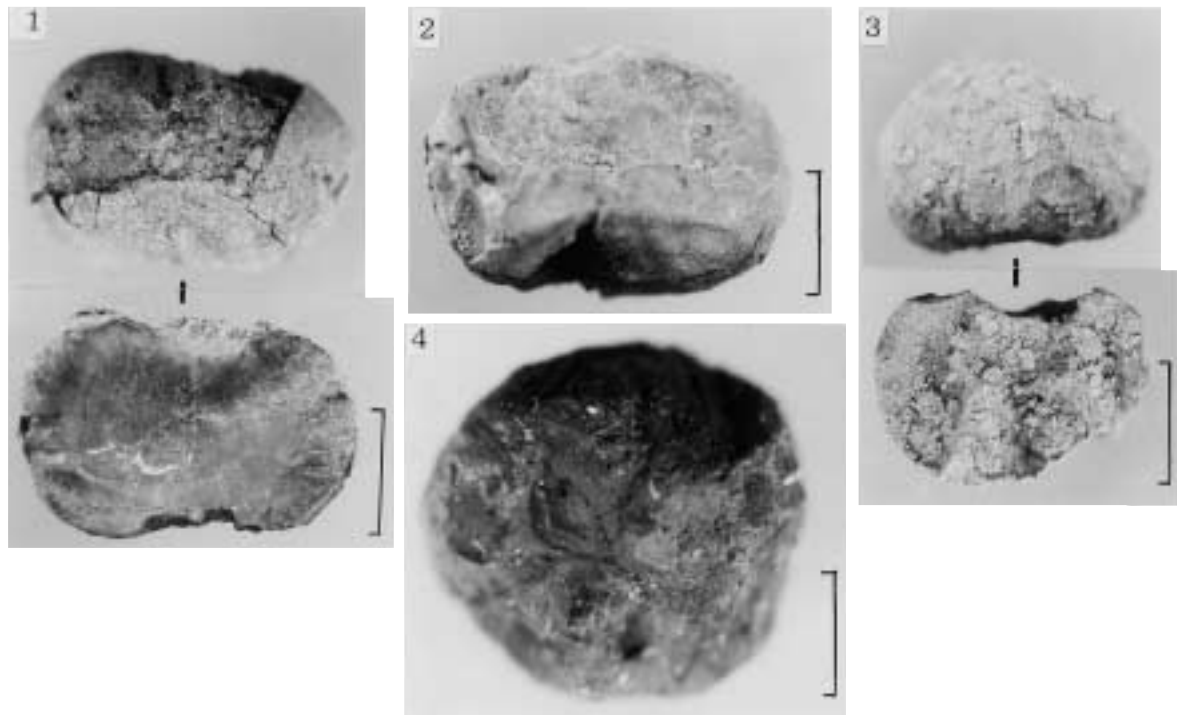
3c クリ(放射断面)
試料No.7 bar:0.1mm



1. 諏訪岱Ⅱ遺跡で出土した炭化種実(スケールは1mm)

1. イネ、炭化胚乳、試料10(SI116-RC2) 2. イネ炭化胚乳、試料9(SI115-RC2)

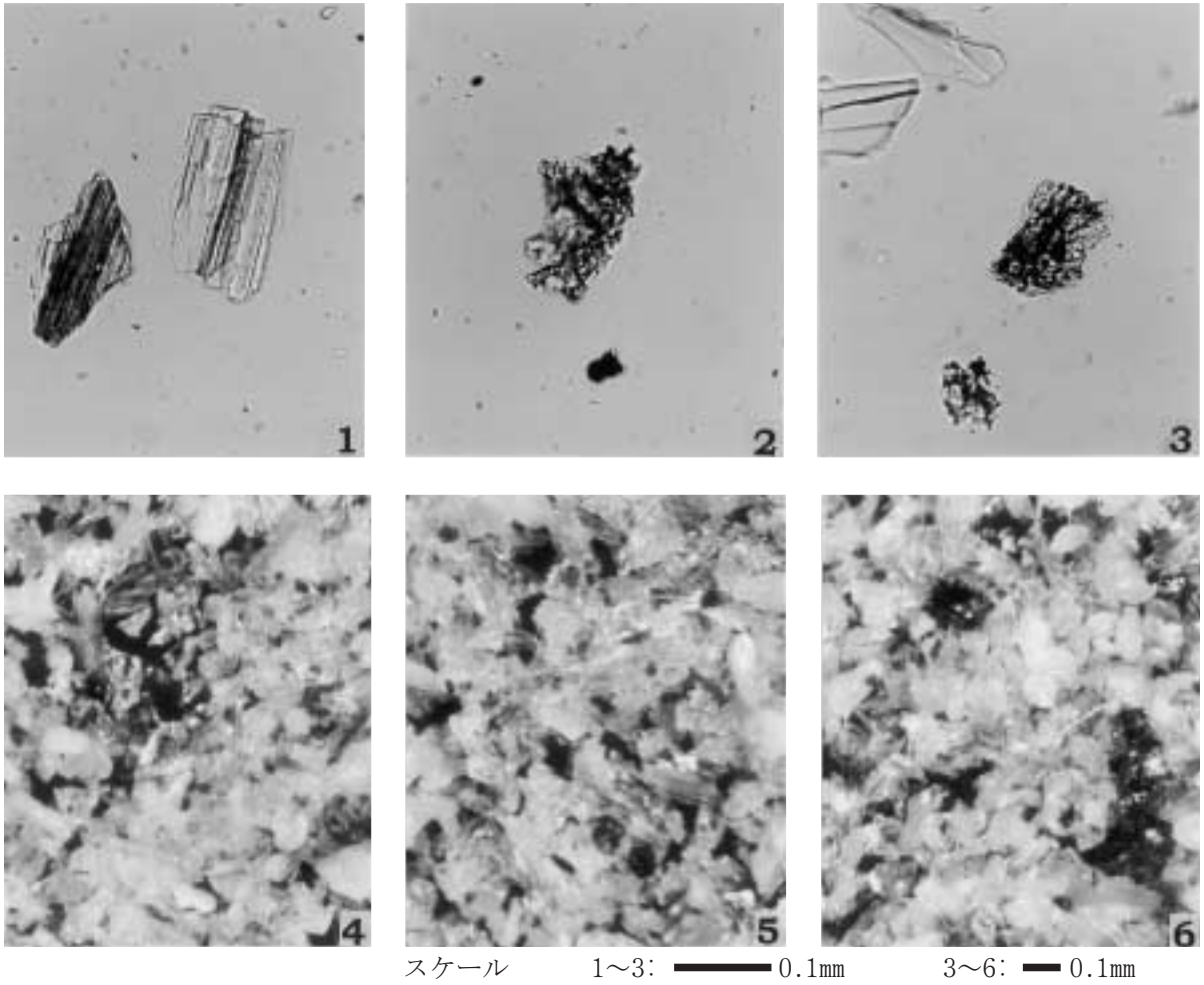
3~6. アサ、炭化種子試料9(SI116-RC2) 7. ササゲ属近似種、炭化種子、試料10(SI116-RC2)



2. 長野岱Ⅲ遺跡で出土した炭化種実(スケールは1cm)

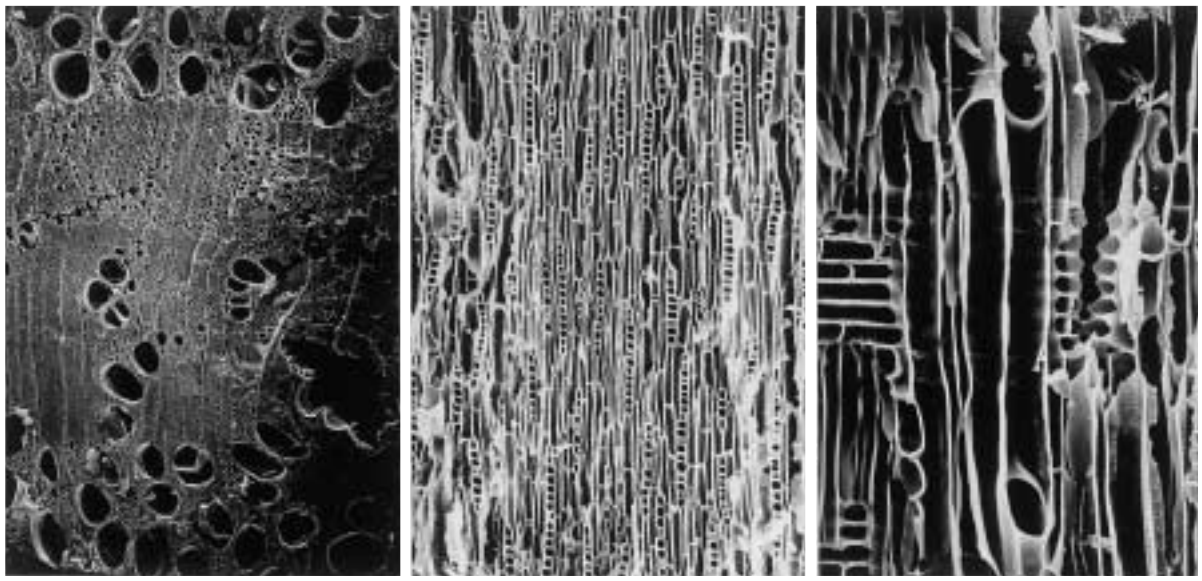
1. トチノキ、炭化子葉、試料4(SI01-RC1) 2. トチノキ、炭化子葉、試料5(SI01-RC2)

3. トチノキ、炭化子葉、試料6(SI02-RC1) 4. トチノキ、炭化子葉、試料7(SI01-RC2)



1. 長野岱Ⅲ遺跡の堆積物中の鉱物類

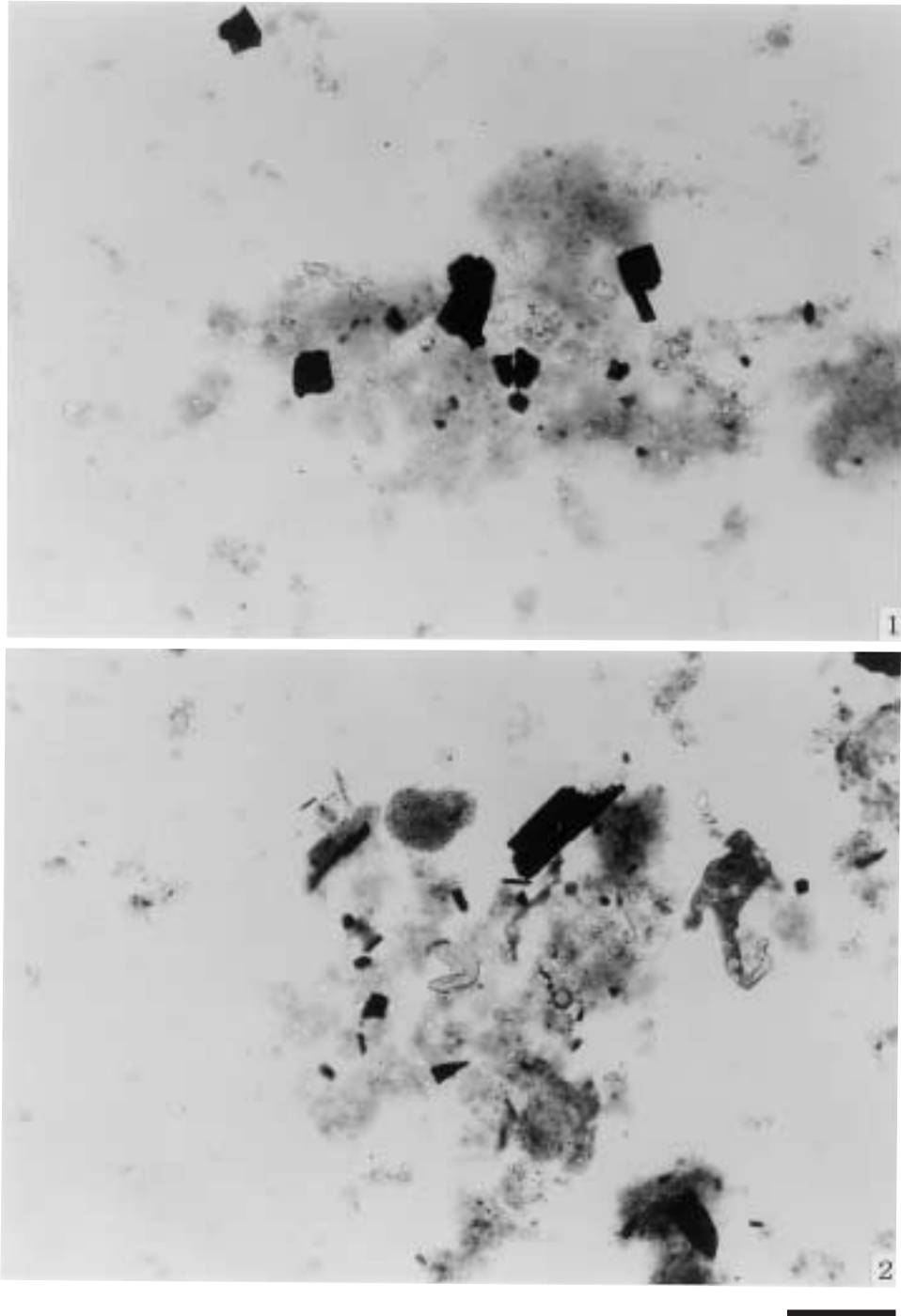
- 1: 軽石型繊維状火山ガラス(試料1) 2,3: 軽石型スポンジ状火山ガラス(試料1)
 4: 4φ(試料1) 5: 4φ(試料2) 6: 4φ(試料3)



1a クリ(横断面)
SW07-RC1 bar:0.5mm

1b クリ(接線断面)
SW07-RC1 bar:0.5mm

3c クリ(放射断面)
SW07-RC1 bar:0.1mm



花粉プレパラート状況 (scale bar: 50 μ m)

1. 試料8 (SI16カマド内部土壌)

2. 試料9 (SI44カマド内部土壌)

報 告 書 抄 録

ふりがな	すわたいにいせき・ながのたいさんいせき							
書名	諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡							
副書名	国道105号国道道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第353集							
編著者名	石澤宏基・遠藤 元・田村瑞保・高橋 信							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王3丁目1番1号 TEL 018-860-3193							
発行年月日	西暦2003年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すわたいにいせき 諏訪岱Ⅱ遺跡	あきたけんきたあきたぐん 秋田県北秋田郡 もりよしまちよないざわあざ 森吉町米内沢字 すわたい 諏訪岱111外	05323	****	40度 7分 8秒	140度 23分 00秒	20010517) 20010726	4,300㎡	国道105号国道道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査
ながのたいさんいせき 長野岱Ⅲ遺跡	あきたけんきたあきたぐん 秋田県北秋田郡 もりよしまちよないざわあざ 森吉町米内沢字 ながのたい 長野岱149-2外	05323	****	40度 7分 39秒	140度 23分 8秒	20010727) 20011004	3,200㎡	国道105号国道道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
諏訪岱Ⅱ遺跡	狩猟場 採集場	縄文時代中期) 縄文時代晩期	陥し穴 1基 土坑 1基 土器埋設遺構 1基	縄文土器、石器 (石鏃・石槍・石匙 石筥・磨製石斧等)	阿仁川左岸の河岸段丘上(標高41~42m)に営まれた縄文時代中期から晩期の狩猟場・採集場であるとともに、平安時代後半から中世までは集落が営まれていた複合遺跡である。			
	集落跡	平安時代後半) 中世	竪穴住居跡 7軒 土坑 13基 焼土遺構 7基 性格不明遺構 1基	土師器、陶磁器、 銭貨(天聖元寶、 治平元寶、 政和通寶、 洪武通寶)				
長野岱Ⅲ遺跡	採集場	縄文時代中期) 縄文時代晩期	フラスコ状土坑 1基	縄文土器、石器 (石匙・打製石斧・ 磨製石斧等)	阿仁川右岸の大野台地上(標高62~65m)に営まれた縄文時代中期から晩期の採集場であるとともに、平安時代後半には集落および鍛冶による鉄生産が行われていた複合遺跡である。			
	集落跡 生産場	平安時代後半	竪穴住居跡 5軒 土坑 3基 焼土遺構 1基 炭窯 1基 鍛冶炉 1基	土師器、 フイゴ羽口 鉄製品(刀子)、 鉄滓				

秋田県文化財調査報告書第353集

諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡

—国道105号国道道路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

印刷・発行	平成15年3月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330
発 行	秋田県教育委員会 〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号 電話(018)860-3193
印 刷	精巧堂印刷所